



■前書き

第一部 前史としての弓

■古代

- 盾人宿禰 たてのひとのすくね 鉄をも射抜く技量
  - 伊勢 朝日郎 いせのあさけのいらつこ 弓と白刃の闘い
  - 筑紫 国造 つくしのくにのみやつこ 剛弓は鞍まで貫く
  - 迹見赤檣 とみのいちい 神仏の争いは加護ある矢で
  - 捕 鳥部 万 ととりべのよろず 追手を蹴散らした狩人
- ◇弓による要人狙撃事件① 皇位をめぐる骨肉の争い
- 市辺押 磐皇子 いちのへのおしわのみこ
  - 大泊 瀬皇子 おおはつせのみこと

■平安・鎌倉・南北朝

- ◇遊芸と儀式に見る狙撃
- 菅原道真 すがわらのみちざね 文武両道の教養人
  - 藤原 道長 ふじわらのみちなが 弓競べで示した野心
- ◇決闘
- 源 宛 みなもとのあつる 荒武者二人の狙撃戦
  - 平 良 文 たいらのよしふみ
  - 平 季 武 たいらのすえたけ (卜部 正確すぎた狙撃
  - 源頼義 みなもとのよりよし 武門の父子の連携
- ◇狩猟と弓矢
- 魚のご馳走を供す
- ◇弓による要人狙撃事件②
- 藤 原種 継 ふじわらのたねつぐ
  - 大伴 竹 良 おお とも たけら・つくら、大伴 継人 おおとものつぐひと ら？
- ◇弓による要人狙撃事件③
- 花山 法皇 はなやまほうおう
  - 藤原 伊周 ふじわらのこれちか、隆家 たかいえ ら
- ◇源平合戦
- 根井行 親 ねの いゆきちか 一の矢が外れたのを恥じる
  - 那須宗 高 なすのむねたか (与一 紛になる狙撃者
  - 浅利義 遠 あさりよしとお 船上で射返し合う
  - 諏訪盛 澄 すわ もりずみ 流鎧馬が救った命
  - 愛甲 季 高 あいこうすえたか 総大将を射倒す

§コラム いつの世にも有効だった狙撃戦術

- ◇南北朝の名将
- 足助 重範 あすけしげのり 兄弟ごと射倒した忠臣
  - 名和 長年 なわ ながとし 三千人を退却させた狙撃
- ◇弓による要人狙撃事件 婆娑羅大名大暴れ
- 光 厳 上皇 こうごんじょうこう
  - 土岐頼 遠 ときより とお

§コラム 狙撃に斃れた二名将 義仲と義貞

- 源義仲 みなもとのよしなか 朝日將軍の終焉
- 一条忠頼 いちじょうただより 側の兵
- 新田義 貞 にったよしきた 南朝の有力武將の死
- 鹿 草 公相 しかくさこうさけ 側の兵

§コラム 伝説に彩られた名手たち

- §コラム 海賊との戦い
- 門部府生 かどへのふしょう 何よりも弓を好む
  - 行 快 ぎょうかい 神官にして達人
  - 花房 正幸 はなぶさまさよし 達人は矢を選ばず

■室町・戦国	
● <u>蠣崎 義広</u> <small>かきざきよしひろ</small>	暗闇の中の一矢
● <u>桂元 澄</u> <small>かつらもとすみ</small>	狙撃で城を落とす
● <u>横井 新助</u> <small>よこいしんすけ</small>	一門の争いに決着をつける
● <u>六角 義賢</u> <small>ろつかくよしきた</small>	威力を発揮した狙撃軍団
● <u>大宮景連</u> <small>おおみやかげつら</small>	秀吉に矢傷を負わせた男
● <u>大嶋 光義</u> <small>おおしまみつよし</small>	弓一つで大名に
● <u>内藤 正成</u> <small>ないとうまさなり</small>	弓も人柄も剛直
● <u>柴田 康忠</u> <small>しばたやすただ</small>	六十三人を斃した男
§ <u>コラム 弓の極意</u>	
◇ <u>弓による要人狙撃事件</u>	⑤家のために犠牲になる
□ <u>豊臣 秀吉</u> <small>とよとみひでよし</small>	
● <u>島津 歳久</u> <small>しまづとしひさ</small>	<u>ほんだごろう さえもん</u> 本田五郎左衛門?
■江戸～幕末	
◇ <u>将軍の弓術</u>	
◇ <u>通し矢に見る射撃</u>	
<u>通し矢の競技法</u>	
<u>通し矢の実力者たち</u>	
● <u>星野 茂則</u> <small>ほしのしげのり</small>	二度天下を取った男
● <u>和佐範 遠</u> <small>わさ のりとお</small>	(大八郎) 不朽の記録を樹立
● <u>安藤 貴道</u> <small>あんどうたかみち</small>	新選組勇士の意外な一面
§ <u>コラム もし新選組の安藤が生きていたら?</u>	弓の可能性
<u>弓は鉄砲の前には無力か</u>	
<u>幕末の主要銃器</u>	

## 第二部 鉄砲の時代

### 日本での銃砲発達の特徴

◇ <u>砲術家たちの名手</u>	
● <u>稲富一夢 斎</u> <small>いなどうみいちむさい</small>	毀誉褒貶する砲術の大家
<u>稲富流その後</u>	
§ <u>コラム 弓対鉄砲 どちらが有利か</u>	
<u>火縄銃の限界</u>	
<u>宮本武蔵の論考</u>	
<u>鉄砲と弓の一騎討ち</u>	
<u>弓と鉄砲を賭ける</u>	
<u>隙間を縫う巧みな射撃</u>	
<u>鉄砲の一番の有用性</u>	
◇ <u>大名と狙撃</u>	
● <u>織田 信長</u> <small>おだ のぶなが</small>	個人でも戦術でも巧み
● <u>浅野 幸長</u> <small>あきのよしなが</small>	鉄砲の有難みを知る
● <u>徳川 家康</u> <small>とくがわいえやす</small>	幕府創設者は実戦でも有能
● <u>毛利 高政</u> <small>もうりたかまさ</small>	一流に数えられた名手
● <u>徳川 斉昭</u> <small>とくがわりあき</small>	一日に射撃訓練千発
◇ <u>狙われた大将たち</u>	今に残る狙撃伝説
□ <u>三好 義賢</u> <small>みよしよしきた</small>	火縄銃よる初の総大将の戦死
● <u>往来右京?</u> <small>みむらいえちか</small>	根来衆?
□ <u>三村家 親</u> <small>えんどうきょうだい</small>	～やって来た兄弟の刺客～
● <u>遠藤 兄弟</u> <small>ひできよ</small>	
・ <u>秀清</u> <small>としみち</small>	
・ <u>俊通</u> <small>おかみはるすけ</small>	
□ <u>岡見 治資</u> <small>ねごろほうし おおくらぼう</small>	
● <u>根来法師 大蔵坊</u>	新兵器による勝利
□ <u>織田信長</u>	稀代の権力者を狙撃した男たち
● <u>杉谷 善 住坊</u> <small>すぎたにぜんじゅぼう</small>	悲惨な報復を喰らった暗殺者
● <u>城戸 弥左衛門</u> <small>きど やさえもん</small>	信長を二度狙撃した忍者
● <u>岡 吉 正</u> <small>おかよしまさ</small>	信長に傷を負わせた雑賀衆
□ <u>豊臣 秀吉</u> <small>とよとみひでよし</small>	天下人を倒そうとした男たち
● <u>富岡 藤太郎</u> <small>とみおかとうたろう</small>	狙撃も拔群な鉄砲鍛冶
● <u>中島晴時</u> <small>なんぶのぶなお</small>	歴史を変えようとした一弾
□ <u>南部 信直</u> <small>くどうすけつな</small>	
● <u>工藤 業 綱</u>	暗殺相手に召し抱えられる
□ <u>森 長 可</u> <small>もりながよし</small>	
● <u>杉山 孫六</u> <small>すぎやまごろうく</small>	小牧・長久手の勝敗を左右する
◇ <u>関が原</u>	
□ <u>島 清 興</u> <small>しまきよおき</small>	(左近)



◇ 銃による要人狙撃事件 ③皇太子を狙った隠し銃

ひろひとこうたいし

□ 裕仁皇太子

なんばだいすけ

● 難波 大助

◇ 日米戦争

太平洋戦線

マリアナ・バラオ諸島方面

ほりうち けさ まつ

● 堀内 今朝松 映画にもなったサイパン・タイガー

ペリリュー島の戦い

ふなさかひろし

● 船坂 弘 アンガウル島の怪物

● ガダルカナル 伏兵たちの狙撃戦

§ コラム 南洋 正体不明の女狙撃手

沖縄戦

狙撃された高位の軍人たち

謎の小野一等兵 ～論争が残るバックナー中将の狙撃～

◇ 銃による要人狙撃事件 ④保守派の巨魁撃たれる

ひらぬまきいちろう

□ 平沼麒 一郎

● 西山直ら

◇ 銃による要人狙撃事件 ⑤軍縮を潰した一弾

はまぐちおさち

□ 浜口 雄幸

さ ごや とめお

● 佐郷屋留男

◇ 血盟団による連続狙撃事件

いのうえじゆんのすけ

□ 井上準之 助

だんたくま

□ 団 琢磨

おぬましよう

● 小沼 正

ひしぬまごろう

● 菱沼五郎

■ 現代日本の狙撃手

◇ 治安維持組織における狙撃 警察・機動隊・S A T

◇ 海上保安庁

◇ ラズエズノイ号事件 一九五三の日本領海侵犯

◇ 北朝鮮による国境侵犯

能登半島沖不審船事件 不審船による日本領海侵犯事件

奄美沖不審船事件

海上の狙撃者たち

◇ 自衛隊の狙撃手

抑制されてきた狙撃活動

狙撃への着目

狙撃用装備

特殊な自衛隊の狙撃戦術

◇ 主な戦後の狙撃事件

ぶりんす号シージャック事件

あさま山荘事件

長崎バスジャック事件

三菱銀行立てこもり事件

◇ 注目を浴びた民間の狙撃事件

政治関係

メディア関係

暴力団関係

◇ 銃による要人狙撃事件 ㊦松長官狙撃～治安機関のトップが狙われる～

§ コラム 才能か修練か 射撃の技術はどう決まる？

◇ 日本選手のスポーツの射撃記録

## ■前書き

スナイパーというと、我が国で取り上げられるのは外国の人物が多いのではないだろうか。  
かなりの歴史ファンでも日本の狙撃手と言われてすぐ思い付く人は少ないだろう。

フィクションなどで多少戦国時代の話が取り上げられることはあるが、まだまだ十分とは言えない。  
狙撃史はあくまで断片的に知られている程度というのが現状である。

伝統的には日本は戦士階級の社会的地位が高い国であり、長い歴史の中で戦争の事例も豊富だ。  
探そうと思えば狙撃の史実もそれなりに発見できそうである。  
しかしながら今までは「狙撃」に絞った通史のようなものも十分ではなかった。研究も著しく不足しているように思える。

これが本書の執筆に至った動機である。

本書では分かる範囲での狙撃手や狙撃事例の代表的なものを取り揃えてみた。

構成としては大きく分けて第一部の弓、そして第二部の鉄砲である。

狙撃というのは基本的に飛び道具を使う。  
そのため小銃の前史として弓矢によるものも欠かせないと考えた。

### 取り上げる基準

歴史というものは古くなればなるほど、真実との境目が分かり辛い。  
明らかに物語上の誇張であったり、史実か定かではないもの、「名手」のはずの人物がそもそも実在していなかったりと、取り上げてよいのか迷うのも多い。

また近代になるほど記録が豊富なのは良いことだが、細かい例も含めると話が無数にのぼってしまう。  
とりわけ幕末にもなるとほとんどが銃撃戦になるので、どこまで狙撃にするか線引きや取捨選択が必要になってくる。

こうしたことに鑑みて以下のような条件を設けた。

- ① 狙撃が状況に与えた影響力が目覚ましいもの
- ② 著しい狙撃の技量を示す
- ③ 歴史的、政治的な意義がある
- ④ ユニークである、面白みを感じさせる

こうした条件に著者の判断を含めて採用することにした。

歴史の見方としてはもう一つ重要な点がある。  
歴史というものは戦場のあらゆる場面が遺っているわけではない。名も無き一兵士に至るまで細大漏らさず記録に残すわけではないのである。  
弓と銃の両方に関して言えるが、おそらく歴史に残らなかった名狙撃手も居ただろう。

確かめる術がないものは、残念ながらないなかったとの同じ扱いであり、僅かな断片や伝聞から推測するのみである。

なるべく代表的なものを取りあげるようにしたが、掲載したもの以外にもこれを取り上げるべきだといった意見がある場合、検討の末に改訂することも視野に入れている。  
博学の士のご叱正をいただければ幸いである。

# 第一部 前史としての弓

## 総説

弓は古くは石器時代から人類の武器として存在し、狩りや戦争にも用いられた。  
人類の歴史の黎明から既にあると言って良い。  
時代や地域によって弓の材質や長さには違いがあるものの、使用される目的は人類共通である。

日本も出土する古代の人骨には、矢尻が食い込んだままのものも多数ある。弓が古くから戦の友であったことは疑問の余地がない。  
それは神話、歴史説話、各地の伝承での弓の儀礼や戦いの記述を見ても明らかである。  
ムグリの軍を追い払った百合若大臣、鬼を討った吉備津彦命、日本武尊に従った弟彦公など、伝説の世界でも弓の名手の存在感は大きい。

弓は銃砲と同じく遠距離の攻撃兵器である。狙撃的な事例も豊富に見られる。

第一部では弓による狙撃事例を採録していきたい。

■古代

たてのひとのすくね  
● 盾人宿禰 鉄をも射抜く技量  
  
( 生没年不詳 )

仁徳十二年 2 2(4 、朝廷の宴の席で高麗から鉄的<sup>鉄的</sup>と鉄の盾が献上された。  
群臣たちが歓談する中で、誰かその鉄的<sup>鉄的</sup>の突き通せるだろうかという話になった。腕自慢の者が何人も試みるも、鉄で出来ているためになかなか射通せない。  
どうにも何かコツがあるらしく、腕力だけではだめなようであった。  
皆があきらめかかっていた中で一人の男が進み出る。  
それは盾人宿禰というよく弓を射ることで評判の者であった。  
盾人宿禰が狙いを定めて矢を放つと、的は嘘のようにあつてなく射抜かれてしまった。

皆はその技量に感動し、帝に拝謁する際も高麗の使者とともに盾人宿禰も連れ立った。帝は盾人宿禰の腕前を大いに称え、いくはのとだのすくね 的<sup>的</sup>の戸田宿禰 という名を与えたという。  
  
いくはのおみ  
これがのちの 的<sup>的</sup> 臣の祖とされる。

いせのあさけのいらつこ  
●伊勢 朝日郎 弓と白刃の闘い  
  
( 生年不詳～雄略十八年4 7 4 伊勢国？ )

朝日郎は実在したとすれば、伊勢に勢力を持っていた豪族であったとされる。  
弓にすこぶる巧みで、二枚に重ねた鎧を打ち抜けるほどの力があり、「自分になう者がおるか」と常日頃から豪語し怖れられていたという。

雄略十八年 4 7(4 、八月十日、朝廷は伊勢の平定に もののべのうしろのすくね 物部菟代宿禰 と もののべめのむらじ 物部 目連 を遣わし、朝日郎の軍勢と あおはか 青 墓 の地で交戦となった。  
戦いは二日間に及ぶ激戦となったが、朝日郎は弓でもって近づく兵を次から次に討ち取ってしまうので、朝廷の兵も容易に近づけない。

兵士たちも腰が引け、大将の物部菟代宿禰からして怯えてしまつて戦わない。

睨み合いが二日と一夜すぎ、このままでは埒があかぬと物部目連が行動を起こした。  
大刀を用意し決死の覚悟で勝負を挑もうと決心したのだ。

しかし単身で攻撃するだけでは、むざむざと朝日郎の弓の餌食になるようなものだ。  
きくのもののべおおおのて  
そこで筑紫の 聞物部 大斧手に盾を持たせて傍らに従えた。

戦場で朝日郎は不敵なまでの傲慢さで弓を片手に待ち構えている。  
いつでも射倒すという自信のあらわれであった。

物部目連は白刃をかざすと絶叫しながら大斧手とともに突撃を敢行した。

朝日郎は次々に矢を放ち、その威力は噂に違わない。  
最初は大斧手が盾でもって防いでくれたものの、しまいには大斧手自身も盾と鎧ごと貫かれて大怪我を負ってしまう。

しかしそこまでやった効果はあった。  
大斧手が防いでいた間に物部目連は朝日郎に肉迫していた。  
勢いに乗って朝日郎を捕え白刃の下に叩き切ったのだ。＊

こうして戦は官軍の勝利に終わったが、雄略天皇は菟代の臆病に激しく 憤ったという。  
菟代の領地の猪飼部を取り上げ、物部目連に褒美として与えた。

肉弾戦で勝利を得た逸話だが、それでも朝日郎の射撃の威力も伝える話ではある。

＊ 大斧を振るう大斧手自身があえて矢を浴びながら突撃し、朝日郎を討ち取ったという話もあるという。

つくしのくにのみやつこ  
●筑紫 国造 剛弓は鞍まで貫く  
  
磐井氏？ 生没年不詳 筑紫国 ( )

欽明十五年 5 5(4 、半島にあった任那日本府は新羅との戦いの中で危機に陥っていた。同盟国百済の王子の余昌も、新羅の包囲下で絶体絶命の状態であった。  
その際現地の救援に赴いたのが「善く射る者」である筑紫国造であった。

新羅の攻勢の前面に立ちはだかると、筑紫国造は敵の将兵を見回す。  
馬上に並ぶ敵将の中で最も強そうな者が目に入ると、すかさず標的に選んだ。

「善く射る者」の矢の勢いは凄まじかった。  
相手の鎧の合わせ目を貫いただけではない。  
勢いあまって馬の鞍の前後両方の輪まで貫いて一撃で敵を仕留めてしまったのだ。



さらに筑紫国造は雨のように矢を浴びせ、次々に周囲の敵を葬っていく。  
新羅の将兵たちはたまたらず包囲を解いて退却していった。

味方の軍は間道を通って脱出することができたという。

この時の鞍を突き通すほどの弓矢の力を讃えられて、筑紫国造は「<sup>くらじのきみ</sup>鞍橋君」との尊称で呼ばれるようになった。

<sup>とみのいちい</sup>  
●**迹見赤檮** 神仏の争いは加護ある矢で

(生没年不詳 大和国？ )

厩戸皇子は四天王の像に祈っていた。戦勝のためである。

用明天皇は病に倒れ、仏教を巡る勢力争いは、蘇我氏と物部氏の内戦に発展していた。

他の皇族や豪族たちの支持を受けて、蘇我側の軍勢は数の上で優勢であった。  
しかし元来が軍事氏族の物部は、統率がとれていて頑強に抵抗する。三度の攻撃は三度にわたって撃退されていた。

聖徳太子は戦勝祈願の後で迹見赤檮を呼び加護を込めた矢を手渡す。迹見赤檮は大和国の鳥見出身で、<sup>とみのながすねのひこ</sup>登美能 長髓彦 の一族とも伝わる。

再戦が開始されると、物部守屋は自ら榎の大木に登って指揮を執り、弓で近づく敵兵を蹴散らしていた。

赤檮は弓を携えて守屋の居る榎の木に接近する。戦場の指揮を取る守屋の注意は赤檮には向けられていない。  
赤檮は太子から手渡された番えと、念入りに狙いをつける。

神仏の加護があったかは定かではない。  
狙いました一矢は的確に守屋の身体を貫き、榎の木から射落とした。

総大将が射殺された物部側は総崩れとなる。討伐軍は勢いを得て戦場の勝敗は決まった。

戦いのあと、迹見赤檮は物部氏の領地から一万田を褒美として下賜された。

<sup>とりへのよろず</sup>  
●**捕鳥部 万** 追手を蹴散らした狩人  
(生年不詳～用明二年587 河内国？ )

捕鳥部万はその職名「捕鳥部」が示すように鳥などを捕らえる律令の品部に属していたとされ、当然狩猟を通じて弓が巧みであった。

その腕前を見込まれて物部守屋の護衛役も勤めていたらしく、守屋と蘇我馬子が争うようになると、百人ほどの兵を率いて難波の守屋の屋敷の警護につとめていた。

守屋が敗れて戦死すると、万も追われる身になる。妻に別れを告げて山中に逃亡したという。  
朝廷は数百人の兵を以てあとを追わせ、大規模な山狩りを行う。

しかしむざむざと捕えられなかったのは守屋に見込まれた男であった。

あらかじめ紐を竹やぶに張り巡らし、奥深くに潜んで迎撃戦を準備していたのだ。  
追手が接近して来ると、紐であちこちの竹を動かして相手を惑わす。そしてその隙に狙撃を繰り返す。

巧みな射撃で官兵は次々に斃れ、しまいには誰も恐れて近づけない。  
万はさらに山奥へと逃亡することができた。

しかし抵抗はそこまでであった。

一人の兵士が先回りして川の側に潜み万を待ち構えていたのである。  
万が姿を現すと矢でもって逆に狙撃する。不意を突かれて膝に命中し、万は絶叫する。

「民として帝のために尽くしたいと思っている者を、よく調べもせずなぜこのように苦しめるんだ！」

そしてなおも最後の抵抗で暴れまわり、三十人近く射倒したという。

矢が尽きると弓を三つに切り、太刀を川に捨て、小刀で首を突いて自刃したと伝わる。

◇ 弓による要人狙撃事件 ① 皇位をめぐる骨肉の争い

<sup>いちのへのおしわの みこ</sup>  
□ **市辺押 磐皇子** 生年不詳～安康三年 )

<sup>おおはつせのみこと</sup>  
● **大泊 瀬皇子** 允弑七年～雄略二十三年 大和国？ )

大泊瀬皇子は、実在するとすれば後の雄略天皇である。  
「宋書」に出てくる「倭王武」にあたる人物ではないかと推測されている。

歴史上では、たとえ親子兄弟であっても血なまぐさい争いになることは珍しくない。  
しかしこの事例が特異なのは、皇太子自身が狙撃者として伝わっている点である。これは雄略天皇の個性——史書では残酷な君主としての一面が伝えられている——に負うことも多いだろう。

あなほのすめらみこと

穴穂天皇　こと安康天皇は、皇位に関してはいどこにあたる履中天皇の第一子、市辺押磐皇子に譲りたいと思っていた。親族として皇子の才を認めており、国を託したいと思っていたのである。しかし正式な決定ではなかった。

いちのへのおしわのみこと

安康天皇が眉輪王に暗殺されると、安康天皇の弟である大泊瀬皇子は眉輪王を討伐する。

また自らが皇位を継ぐ腹積もりだったので、市辺押磐皇子のことは日頃から苦々しく思っていた。そこで一計を案じて市辺押磐皇子を呼び出す。

「近江の蚊屋野にはたくさん猪や鹿がいるそうだから、狩りをしに遊びに行こう」

二人は馬を走らせて狩りを楽しんだが、大泊瀬皇子は頃合を見て弓を構える。そして「大きな猪がいたぞ！」と市辺押磐皇子を呼び込んだ。

どこに猪がいるかと市辺押磐皇子が注意を引かれている間であつた。至近距離から狙撃し、皇子は一撃で射ち倒されたという。

とぼりないさえきべのうるわ

突然の出来事に市辺押磐皇子の舍人、帳内佐伯部売輪は動転する。どうしていいか分からず、転げ落ちた皇子の遺体を抱えて右往左往した。

大泊瀬皇子はなおも弓をつがえ帳内佐伯部売輪をも射殺した。そして二人の死骸を穴の中に葬ったという。墓を作るのも許さなかったと伝わる。

こうして大泊瀬皇子は政敵を葬り雄略天皇として即位したのである。

■平安・鎌倉・南北朝

◇ 遊芸と儀式に見る狙撃

すがわらのみちざね  
● 菅原道真 文武両道の教養人

( 承和十二年845～延喜三年903 山城国? )

平安の文章博士、文人貴族といえば色白で屋内で静かに書を紐解いてそうなイメージだが、実際にはそうでもなかったようだ。

道真は貞観十二年 870 に力略試を受験し、その時に都良香が問答博士を担当した。

試験後に道真が良香の家に挨拶に行くと、良香は弟子たちに囲まれて弓の練習をしている。  
道真が挨拶をしていると「道真は確かに学問はできる。しかし武はからつきしだろう」と半ばからかい気味に挑発された。

強いられるように弓をとった道真が矢を放ち始めると、周囲から笑みが消える。  
矢は百発百中、からつきしどころか一同の中でも抜群の腕前である。

道真は学問だけでなく武にも秀でているのかと、一同感嘆したという。

実は道真は幼少の頃から弓の名手であったのだ。  
文人にとって文射 儀礼・文化的な弓射で貴族層の六芸の一つ も教養の一つであり、「礼」の道にかなうことでもあったのだ。

例えば孔子も伝説では二メートル近い偉丈夫で、弓や馬術にも優れていたと伝わる。  
学問と徳行だけの人ではなかったのだ。

教養人の道真が弓に熟達していても不自然ではなかったのだ。

ふじわらのみちなが  
● 藤原 道長 弓競べで示した野心

( 康保三年966～万寿四年1028 山城国 )

言わずとしれた平安時代の実力者である。  
摂関政治の最盛期を築き上げ、文人たちをも保護し、一説には光源氏のモデルである。

その豪快な性格を忍ばせる話も残されている。  
当時日が落ちると、御所は真の闇に包まれる。胆力を試すために皆に探検させるところ、誰もが途中で帰ってきたのに、道真だけは一人大極殿まで行ってきたとか、父の兼家が、頼忠の子の公任が人物が優れているのを嘆いて「わが子らは公任の影も踏むこともできないだろう」と言うと、道長は「影を踏みなくても面を踏んでやりましょう」ぬけぬけと答えたという。

このような人物だから、当然権力争いでも頂点を目指す。

ふじわらのこれちか  
一番のライバルは叔父でもある 藤原 伊周 であった。

若い道長は長らく伊周の下位に甘んじていたが、全く覇気が衰えてなかったのは次の逸話からも分かる。

ある日、伊周が東三条殿南院で弓の競射を催した。  
道長も参加したのだが関白の伊周と弓の勝負をする段取りとなった。

慣例では身分の高い方が先に射つ。  
しかし道長は気にすることなく自分が先に立って射て周りを驚かした。

競技が進むと伊周が点で二つ道長に負ける状況になった。

当時は一度の勝負で二回撃つ。  
そこで人々はあと二度延長するように申し出てる。

言葉にせずとも目下の道長が伊周に勝ちを譲るように圧力をかけたわけである。

しかしここでも道長は傲岸であった。  
人々の思惑など意に介さず再び先手に立つ。そして  
「道長の家より天皇・后が立つならば矢よ、あたれ！」と矢を放ち、見事中心に命中させた。

この事で伊周は逆に緊張する。  
狙いすましたはずが矢は大外れして的確をかすりもしない。

二度目に再び立った道長は構えながらさらに傲慢な言葉を放つ。  
「矢よ、余が摂政・関白になるべきものならば当たれ！」  
そして放たれた矢は再度完璧に中央を射抜いた。

ここまでくると周囲も穏やかではない。  
皆がざわめき興奮している。

二度目に立とうとした伊周も止められ、関白の道隆も競射の中止を命じた。

道長が関白に就任する一年前の出来事である。

◇決闘

- みなもとのあつる

● 源宛

荒武者二人の狙撃戦

( 箕田源次 生年不詳～天曆七年953 武蔵国 )
- たいらのよしふみ・

● 平良 文

よしただ

( 良 忠 村岡五郎 生没年不詳 山城国 )

源宛は嵯峨天皇の末裔であり、頼光四天王として有名な渡辺綱の父親である。  
藤原純友の乱の鎮圧に功績があり、『今昔物語』では「魂太く心賢き兵」とまで称された。

武蔵守として足立郡箕田に居住していたが、荒川を挟んで領地が接する平良文一党との対立を深め、ついに武力対決を行うに至った。

今昔物語によれば決闘の原因は、以前から家来同士がいさかいを起こしていたこと、互いに自分の武名の方が上だと競い合ったこと、さらに周囲が対立を煽ったためだという。

元々平良文は高望王の子でもあり、平将門の叔父にもあたる名門武家である。  
良文も帝の勅命で現地に派遣されており、これは宛の父である源任時代から伸長著しかった箕田源氏の勢力抑えの役割もあったとされる。

こうした様々な要因が背景となって両者は決闘を行うに至った。

決闘当日、両家とも数百人の兵を率いてにらみ合った。  
流儀通り開戦の使者を送り、互いに楯を並べて射合おうとする段になる。

その時前触れなしに良文が進み出て、宛に呼びかけた。

「兵士らに射合わせても面白くない。おまえと私の武芸を比べて見るということなのだ。二人で馬を走らせあつて腕の限り射合おうではないか」

これには宛も同意し、雁又の矢を携えて馬を走らす。  
良文は家来たちに  
「自分一人でやるから、おまえたちは見ておれ。私が射殺されたら骸は葬ってくれ」  
とこれも雁又の矢を番えて宛に向かっていく。

数百人の一族郎党が見守る中、両家の騎者は互いに馬を走らせあう。

二人ともまず相手に射させてから射ち倒そうという腹積もりであった。

やがて良文が宛の身体中央をめがけて矢を射ち放ったが、宛は馬から落ちらんばかりに身を伏せてかわした。  
矢は太刀の鞘をはじいて飛んだ。

宛は馬をとって返し、同じく良文の身体の中をめがけて矢を放つ。同じく良文も身をよじった。矢はぎりぎり腰当てに突き刺さっただけであった。

互いに刀を抜き、片方が矢を射ればそれをかわして刀で叩き落す。同じく相手の一瞬をついて矢を放ちまた刀ではじく。

両者とも名だたる武士である。  
息をつく間もなく矢を連射し、刀を振るった。

あまりの見事な勝負にいつしか見守る両家の者たちも決闘であることを忘れてしまっていた。  
両者の一挙一動に歓声が沸き、拍手を惜しまない。

お互いに体勢を立て直し、矢も乏しくなってくると、良文は再び呼びかけた。

「どれも互いに射られてもおかしくないものばかりだった。俺たちの腕前ははっきりした。二人とも下手ではない。  
なあ昔ながらの仇敵でもないんだからこいらにしなやか」

これには宛も同意する。  
両者とも歩み寄って互いの力をたたえ、以後はこの地で協力しあうことを約束しあったという。

これによってお互いに兵を引いて両名射手による勝負は引き分けに終わった。

- たいらのすえたけ

● 平 季 武( 卜部 正)

正確すぎた狙撃

天曆四年950?～治安二年1022? 生国不明 )

うらべのすえたけ  
平季武は 卜部 季 武としていわゆる「頼光四天王」の一人として有名である。  
当然武勇の誉れも高く、弓の腕前は糸で吊るされた針を射ってはズナないと言われていた。

しかしある時家来の中でも秀でた者が季武にこう言ってきた。  
「旦那さまは針を射ることはできますが、もし私が三段 三〇メートル弱 離れたおれば射当てることはできませんでしょう」

小癪なことを言うやつだと季武は怒って口論となる。

最終的にはその家来を引き出し、実際におまえを射てやるという事となった。  
もし季武が当てる事ができなかったら、なんでも好きな褒美をとらせるという約束である。

弓にかけては名うての季武である。  
後悔させてやると、立たせた家来めがけて矢を放つ。しかしなんと相手の左脇五寸ばかりはずれてしまう。

季武は不承不承ながら賭けの褒美をわたす。  
すると家来はなおももう一度と勝負を挑んできた。

季武はさすがに本気で腹を立て、今度ははずさぬと、本気で狙いをつけて矢を放った。  
しかしまたしても矢は相手の右脇五寸ほどにはずれて刺さっただけであった。

家来の侍は進み出るとこう進言した。  
「旦那様は確かに上手です。しかし人間の身体は一尺ほどの幅しかありません。  
その真ん中を狙われているため、弦の音と同時に横に飛べば五寸ほどはよけられるもののです。  
今度このようなことがあった時は、それに気をつけて射られればよろしいのです」

これには季武も相手に一理あると認めた。そして以後はますます稽古に励んで上達していったという。

この逸話は弓道の一つのコツともなる話だが、季武の弓が下手でそれてしまったらこの家来の読みも外れてしまったろう。

逆を言えばそれぐらい正確な射撃だったという証かもしれない。

- みなものよりよし
- 源頼義
- 武門の父子の連携

永延二年988～承保二年1075 河内国

源頼義は源頼信 頼光の弟。鎮守府將軍で河内源氏の初代棟梁 の長男として生まれた。

武門に秀でた一族らしく、頼義も幼い頃から弓馬に頭角を顯し、父よりも大物との評判が高かった。  
父とともに平忠常の反乱を鎮圧し、前九年の役にも従軍して安倍貞任を降した。

『今昔物語』には頼義と父の逸話が載せられている。

東国で良馬を見かけた頼義は、馬の持ち主に頼み込んで譲ってもらう。

しかし馬は京都に届けられる途中で関東の盗人に目をつけられていた。  
盗人は雨風の激しい夜に乗じて馬を盗み出した。

家の使用人が盗まれたことに気づき大騒ぎとなる。  
頼信も頼義も目を覚まし、それぞれが弓矢をとって馬で追跡する。

真夜中である。  
父子はお互いの姿を確認していなかったが、兩人とも相手がすぐ近くに居ると確信していた。

その頃盗人はもう逃げ切ったと安心して鴨川の中に馬を乗り入れていた。  
頼信は水音を聞くと息子の姿を目にしていなくてもかわらず、暗闇に「頼義、討ち取れ」と叫んだ。

声と同時に闇の中で矢が放たれて盗人は一撃のもとに絶命した。

暗闇で分かるのは音だけである。それでも父は息子が賊を射倒したことを確信していた。  
「そのまま馬を連れて戻れ」  
とだけ息子に呼びかけて、現場を確認することなく屋敷に戻ったという。

頼義の技量もさることながら、ことに及んで迅速で一条乱れぬ行動をした武家の見事な姿がある。

◇ 狩猟と弓矢

弓矢は元々狩りに使われることが多く、それは犬追物や流鏑馬などと同じく弓術鍛錬の場でもあった。  
また大規模な巻狩りなども集団での連携と行動が重要になる。言ってみれば合戦の予行演習としての意味合いもあったのである。

こうした事から弓の名手に狩猟と関係する逸話が少なくないのは偶然ではない。

大江山の酒吞童子退治で有名な 源頼光 にも狩猟の話がある。  
これは頼光の老齡時の逸話である。

三条天皇の御代の折、東宮御所の縁側に狐が寝転がっているのが発見された。誰かに仕留めさせようという話になり、最終的に頼光が依頼された。

時間がちょうど夕闇で薄暗く、縁側まではかなり距離がある。しかも渡された弓矢は東宮の使っている弱弓であり、矢も重たい蟻目矢でもあった。  
かなり高齢で目も腕も弱つてる。いくら頼光でも無理だという声が上がったが、頼光自身は全く気にしてなかった。

東宮の弓を難なく引き絞ると鮮やかに狐を仕留めてしまった。  
これにはさすが頼光、歳をとっても腕は鈍っていない讃えられたという。

魚のご馳走を供す

狩猟では魚に関する逸話もある。

平安末期に栄えた嵯峨源氏の渡辺党は幾人もの弓の名手を輩出したが、その中の二人の話である。

『古今著文集』では次のような話を伝える。

ある時鳥羽院で庭の池近くに鳥のみさごが居ついてしまった。  
しよちゅう舞い降りてきては池の魚を勝手に取っていく。

そこで上皇は武者所の 渡辺昵 満(?)を呼び出し、みさごを射るように命じた。  
しかも殺すのも可哀想だから、みさごと魚の両方とも生かせとの無理難題であった。

いくら難しくても上皇の命令ともあれば無視するわけにはいかない。  
昵は雁股の矢を番えて池の側に控える。みさごが来るのをじっと待つ。

くだん  
件 のみさごが姿を見せると、一つ飛びで池に舞い降りてきた。慣れたものであった。そのまま水面に足を突きこむ。  
そして鯉をつかまえて飛び上がった瞬間である。

昵は間髪いれずに矢を放ち鯉だけを落とした。みさごは死なずにそのまま飛び去る。

居合わせた人たちは、鯉が射抜かれていないか調べてみた。すると、なんとみさごの脚が鯉の背を掴んだ状態のまま断ち切られていた。

つまり昵は、鯉やみさごの身体でもなく細い脚を狙って命中させたのだった。

一同は昵の技量に感心し、帝も褒美をたくさん与えたという。

同じ一族の 渡辺番 にも似た話がある。

近親の渡辺駿が義経に参陣していたことから、番も一時は幽閉されていた。  
処刑されるすんでのところを弓の腕を評価されて助命、藤原泰衡討伐で手柄を立てて赦された。

ある時番の所に珍しい客があったので、鮎料理でもてなすことにした。食材の鮎を川に取りに行くことになったが、鮎もなかなかすばしい。周りの者が何度も網ですくおうとして失敗し、うまく手に入らない。

大事な食材が確保できないと料理が作れないし、あまりに長く 客人を待たせるのも失礼だ。

皆が困っていると番が弓矢を取り出して、狙いをつけた。  
そして時折水面をはねる鮎を一匹残らず射ち落したので、居合わせた者は信じられない思いだったという。

もう一つは南北朝の頃、建武の新政が失敗し足利尊氏と朝廷側が抗争になった頃の話である。

一時は九州に逐われた尊氏も、地元の豪族と上皇らの協力を得て、数十万の軍勢で陸海の両路から京都に攻め上っていた。  
新田義貞は二万五千騎でもって和田岬に布陣して迎撃する。

尊氏の船団が海岸に押し寄せてくると、相模国出身で村上源氏の一門である ほんましげうじ 本間重 氏が、黄瓦毛のたくましい馬に乗って波打ち際に寄ってきた。

そして船団に向かって、  
「將軍よ、筑紫からの上洛なら船には定めし大勢の美女を召しておられるでしょう。彼女らに珍しいご馳走をしてあげましょう」と飛び交うミサゴに狙いを定めた。

そして一羽のミサゴが二尺ほどの魚を捕らえて舞い上がった瞬間、矢を放った。  
鎗矢は甲高く鳴り響いてミサゴの片方の羽を射抜き、帆柱に突き刺さしたという。

敵ながらあつばれと足利側も感嘆する。名を知らせるように呼びかけた。  
重氏は自らの名を刻んだ矢を六町 三〇〇メートル の距離から射込み、そして戦場なので矢は返してくれと叫んだ。

尊氏は配下の者に射返させようとしたが、弓を射返すとなると武士の面目にもかかわる。  
誰が矢を射るかで現場では喧嘩々諍々の口論となる。「関東勢には射ち返せる者はおるまい」、「いや中国で随一の強弓の佐々木に射たせる」など争いが終わらない。

そうこうするうちに、とある道化者が「俺が射ち返してやるぞ」と矢を下手に射って波間に矢を沈めてしまった。これには敵味方ともに大笑いになり、殺伐とした戦場に潤いをもたらしたという。

ここらは「平家物語」にも通じる逸話であろう。狩猟と狙撃者は常に密接な関係がある。

## ◇弓による要人狙撃事件② 長岡京 遷都に伴う刺客

ふじわらのたねつく  
□藤 原種 継

- おお とも たけら・つくら おおとものつくひと
- 大伴 竹 良 、 大伴 継人ら？

藤原種継は桓武天皇の強い信任を受けていた男で、長岡京の遷都にあたり宮殿造営の中心人物であった。  
しかし現地での建設監督中に遷都反対派の刺客に弓矢で狙撃され、その傷がもとで死去した。

これは背景にに宮中の権力争いも含む複雑な経緯があったとされる。  
首謀者として大伴氏を中心に十数名が捕縛され、桓武天皇の弟の早良親王も廃位されて追放となった。

また後年の種継の息子の藤原仲成も同じく粛清された。  
妹である葉子への天皇の寵愛を利用して権力を振るおうとしたため拘禁され、弓で射殺されたという。

葉子自身も毒をあおいで自殺した。

◇弓による要人狙撃事件③ 花山法皇襲撃事件 女性をめぐるスキャンダル

はなやまほうおう  
□ 花山 法皇

ふじわらのこれか たかいえ  
● 藤原 伊周、 隆家 ら

この事件は当時宮中で権勢を振るっていた藤原伊周が没落し、道長とその一門が隆盛するきっかけとなったものである。

長徳二年 9 9(6)、伊周は藤原為光の三女がお気に入り、屋敷に足しげく通っていた。同じ屋敷には四女も同居しており、この四の君が騒動の原因となる。

話がややこしくなるのは、花山法皇がこの四女を気に入ってその元に通うようになったせいである。当然ながら為光の娘らは同じ屋敷に同居している。法皇が足しげく通うようになると、傍目にはどの娘かは区別がつかない。

伊周は、てっきり自分のお気に入りの三女が奪われたと早とちりしてしまい、嫉妬のあまり大胆な行動に出る。なんと弟の隆家と共謀し、弓矢でもって法皇襲撃を図ったのである。

何も知らない花山院は常のごとく四女のもとにやってきて、弓で狙撃される。狙いは正確では流れた矢は、花山院を射倒したかに見えた。

しかし実際は運よく矢は法王の衣服の袖を撃ちぬいただけで命に別状はなかった 従者(に当ってしまいそちらが命を落としたという伝聞もある)

これが世に「正徳の変」として知られる事件である。

女性をめぐる騒動は世に珍しく無いことながら、このような暗殺事件は前代未聞だ。当初花山院は口を閉ざしていたが、大事件のために世間に広まる。

襲撃犯が伊周らと判明すると、政敵である道長らが見逃すはずがない。道長は先頭に立ってこれを政治問題化させ、捜査をリードした。

なかの  
権勢を誇った藤原道隆の一族、中 関白家は次々に追放や左遷の憂き目を見て没落に追いやられる。

こうして道長の天下への道のりは出来上がった。

◇ 源平合戦

ねの い ゆきちか  
● 根井行 親 一の矢が外れたのを恥じる  
(大弥太 生年不祥～元暦元年1184 )

宇治川を挟んで東西に軍勢は分かれていた。平氏追討を果たしたのも束の間、木曾義仲と源氏の諸将の間で戦いが起こっていたのである。

西軍より進み出た根井行親は、長年義仲に従って功名をたて、今では義仲配下の四天王とまで呼ばれる人物である。

先程から東軍の大將らしい人物の指揮の見事さが目に入っており、行親はこれが義経や範頼だろうとみなした。

大物相手に不足はないとして、十四束の矢を取り出してその者を狙った。

弓馬で知られた行親である。矢筋は見事であったが、すんでのところで相手の体はずれ馬を射抜いた。

実はこの男は名將畠山重忠であり、騎乗するのは愛馬の磨墨であった。

惜しいところであったが行親は嘆いた。「味方の運は尽きた。大將軍たる者が一の矢をはずすとは運がないからである。外れたからといって二の矢で狙うなどしないものだ」と恥じて盾の奥に引っ込んだ。

そのまま行親はこの宇治川の戦いで戦死したとされる。

これは狙撃の外れた事例だが、義忠の馬に命中させるなど、まったくの仇矢ではない。それでも一撃で倒せなかったのを恥辱に感じて二の矢を射たなかったのだから、当時の武士の大將の美意識や、要求される射撃の水準がうかがえる話である。

なすのむねたか  
● 那須宗高(与一) 絵になる狙撃者  
( 宗隆 与一 余一 嘉応元年1196?～文治五年1189? 下野国 )

那須与一。  
おそらく日本史上で最も有名な狙撃者かもしれない。

合戦のさなかに海の小舟にかざされた扇。波打ち際まで寄った騎馬武者が一矢、鮮やかに射ち抜く。  
平家物語中屈指の名場面である。

ただこれほど有名人ながら、歴史的に探っていくと人物像がかなりあやふやである。  
生没年や墓所とされる場所からして複数ある。

与一は幼少の頃から弓矢に優れ、弓で空を飛ぶ鳥を狙えば三羽の内二羽は必ず射止めたという。  
一族の中の十一男 与一(の名は余るの一の意味 であ)ったため、あえて立身のために義経に従ったとか、弓の稽古中に神社に参拝に来ていた義経と知り合い、従軍を約束したなどの逸話も残る。

源平の騒乱で他の兄弟は九人までが平氏側につき、結果として与一が二代目の家督を継ぐこととなったという。妻は新田義重の娘とされる。

『源平盛衰記』によれば屋島合戦の扇の名場面は、最初から与一に命じられたのではない。  
まず強力で弓の名手である畠山重忠が選ばれたが、脚気を理由に固辞したという。  
そこで那須十郎 与一(の兄 が)推薦されたが、十郎も合戦で負傷しており、代わりに弟であり幼少時から弓射に才を示していた与一にお鉢が回ってきた。

そしてここからは知っての通りである。最初は固辞したものの、義経の強い命令によって引き受け華々しい成果を見せた。  
そして感動した平氏側の武士が舞を演じ始めたのを、義経の命によって再度射殺するという当時の戦らしい一片の冷酷さも見える。

戦後は恩賞として頼朝から丹後、若狭、武蔵、信濃、備中などに荘園を与えられる。  
晩年は家督を捨てて出奔したとされ、その理由も様々だ。梶原氏と対立し越後の五十嵐家に庇護を求めたとか、頼朝から肅清されそうになったとか、癪病にかかって出家したなどと諸説ある。

ちなみに与一は、扇を射抜く際に一族に代々伝えられてきた「引目秘術」という遠矢の奥義を使ったという言い伝えもあるが、真偽は不明である。

源平の騒乱で他の兄弟は九人までが平氏側につき、結果として与一が二代目の家督を継ぐこととなったという。妻は新田義重の娘とされる。

『源平盛衰記』によれば屋島合戦の扇の名場面は、最初から与一に命じられたのではない。  
まず強力で弓の名手である畠山重忠が選ばれたが、脚気を理由に固辞したという。  
そこで那須十郎 与一(の兄 が)推薦されたが、十郎も合戦で負傷しており、代わりに弟であり幼少時から弓射に才を示していた与一にお鉢が回ってきた。

そしてここからは知っての通りである。最初は固辞したものの、義経の強い命令によって引き受け華々しい成果を見せた。  
そして感動した平氏側の武士が舞を演じ始めたのを、義経の命によって再度射殺するという当時の戦らしい一片の冷酷さも見える。

戦後は恩賞として頼朝から丹後、若狭、武蔵、信濃、備中などに荘園を与えられる。  
晩年は家督を捨てて出奔したとされ、その理由も様々だ。梶原氏と対立し越後の五十嵐家に庇護を求めたとか、頼朝から肅清されそうになったとか、癪病にかかって出家したなどと諸説ある。

戦は佳境を迎えていた。  
平氏は今や壇ノ浦まで追い詰められ、船上での最後の抵抗を試みていた。

そんな中で源氏の 和田義盛 という弓の名手が進み出る。  
丘の上から三百メートル程先の中納言平知盛の軍船に弓を射かけ、「平家に射返せるものがあるか」と豪語した。

驚いた事に船からはすぐに同じように射返され、しかも矢は軽々と義盛の頭の上をこえて行った。  
平氏にも伊予の国の住人、 仁井親清 という名手が居たのだ。  
しかも親清の矢は義盛のものよりも大きく、相手の方が剛力なのは確かだった。親清も「その矢を射返せるか」と挑発してくる。

源氏の名折れとなると見てとり、義経は後藤兵衛実基を呼んだ。  
「我が方にもこれを射返せるものはいないか」  
すると後藤は浅利与一の名を上げ、弓の強さでは一番だと保証した。

浅利与一に義経が丁重に頼むと、与一は「この矢は短くて弱い。自分の矢を使います」と語り、九尺の大弓にさらに長い矢をつがえた。  
仁井親清は挑発するように四町 約四四〇m 先の船の舳先に立っている。浅利与一は狙いを定めると、距離をものともせずに一撃で仁井親清を射転がした。

扇の那須与一、石橋山の組み討ちの佐奈田与一とともに「源氏三与一」と呼ばれる浅利与一の名場面である。

源平の騒乱で他の兄弟は九人までが平氏側につき、結果として与一が二代目の家督を継ぐこととなったという。妻は新田義重の娘とされる。

浅利義遠は甲斐源氏の末流と言われ、父は逸見流弓術の祖である逸見清光、母は佐竹義業の娘と言う。甲斐武田氏の祖、武田信義の弟にあたる。甲斐国八代郡浅利郷を本拠としたため浅利姓を名乗った。

弓術の家柄だけあって、与一の弓の才幹は早くから 顕れ、二〇〇先を走る鹿を狙っても百発百中だったとされる。  
「吾妻鑑」では頼朝の有力御家人の一人とされ、陣の随兵や御供の輩として度々名前が出る。  
奥羽合戦後には陸奥国比内の地頭に命じられ、この関係で東北にも浅利の名前はしばしば見られる。

越前の城氏が 叛いた建仁の乱では、鎮圧後に護送されてきた坂額御前を妻にもらい受けた。捕虜でありながら堂々とし、女にも関わらず戦場で示した武勇に感心したからだという。

「謀反人だぞ」と周りに訝しがられると、「我ら二人の間になら武勇に秀でた子が生まれるだろう」と答えたという。

源平の騒乱で他の兄弟は九人までが平氏側につき、結果として与一が二代目の家督を継ぐこととなったという。妻は新田義重の娘とされる。

『源平盛衰記』によれば屋島合戦の扇の名場面は、最初から与一に命じられたのではない。  
まず強力で弓の名手である畠山重忠が選ばれたが、脚気を理由に固辞したという。  
そこで那須十郎 与一(の兄 が)推薦されたが、十郎も合戦で負傷しており、代わりに弟であり幼少時から弓射に才を示していた与一にお鉢が回ってきた。

そしてここからは知っての通りである。最初は固辞したものの、義経の強い命令によって引き受け華々しい成果を見せた。  
そして感動した平氏側の武士が舞を演じ始めたのを、義経の命によって再度射殺するという当時の戦らしい一片の冷酷さも見える。

戦後は恩賞として頼朝から丹後、若狭、武蔵、信濃、備中などに荘園を与えられる。  
晩年は家督を捨てて出奔したとされ、その理由も様々だ。梶原氏と対立し越後の五十嵐家に庇護を求めたとか、頼朝から肅清されそうになったとか、癪病にかかって出家したなどと諸説ある。

中心を占めるのは源氏の棟梁であり、実質的な日本の統治者である頼朝である。  
頼朝は冷ややかな目付きで成り行きを見守っていた。

頼朝の目の向いた先には、一人の騎馬武者が控えている。  
諏訪盛澄。

先祖は諏訪大社の神官の血筋であり、同時に武門の一族としての誉れも高い。



中でも盛澄は幼い頃より弓に優れており「弓馬の力量、神に通ず」と絶賛されていた。

普段の盛澄にしてみれば流鏑馬など造作もないことである。しかしこの日は違った。

ともすれば手綱を持つ手に震えが走り、緊張がこみ上げる。

なぜなら出来の如何によって自分自身はもとより、親類縁者の多数の命が左右されるのである。

話は源平の争いのたけなわの頃にさかのぼる。  
盛澄は育った土地柄もあって木曾義仲と親しい仲であった。  
実際義仲に従って何度か戦に臨んだこともある。

源平の対立が決定的となり、平氏討伐の兵が起こされると義仲も挙兵して京を占拠する。  
しかし以後の専横の振る舞いは世の不評を買う。身内の源氏との対立をも引き起こし、遂には討たれてしまった。

頼朝の追求は厳しい。  
義仲の一族郎党にも手が回り、密接な関係があった盛澄も自領の信州で捕縛され、梶原景時のもとに連行された。

始めは死罪が妥当とされたが、盛澄の才を惜しんだ景時が熱心に助命嘆願してまわった。

盛澄の腕をご覧にいたい、と鶴岡八幡宮の流鏑馬の神事に参加を願う。

景時の必死の訴えによって頼朝の心は動かされる。しかし出された条件は過酷であった。

騎乗用にわざと癖のある荒れ馬を指定され、的は八つもある。そのすべてを射ち抜けという命令である。

尋常でない悪条件だが、盛澄はやはり名手だった。

馬に鞭をあてると、八つの的をひとつ残らず射抜いてみせた。  
人々の間からどよめきが漏れたが頼朝はまだ許さない。

「碎け散った的のかけらも射よ。的を支えている申も射てみよ」

無情な要求であった。

盛澄は再び馬を走らせる。的の前を走り終えた時、観衆からは再び歓声があがった。

全て要求通りに矢を射ち込んだのである。まさに神技であった。

さすがの頼朝もこれにはうなつた。  
盛澄の罪を赦し、義仲に協力した郎党も助命してやったという。

盛澄は信州への帰国も許可されたが、鎌倉では頼朝亡き後に御家人同士の戦いが勃発、自分を庇護してくれた梶原景時も討たれてしまった。

盛澄はひどく嘆き悲しみ、手ずから地元の諏訪に「梶原塚」を建立した。

弓の名手が恩人に報いた塚は、数百年を経た今日でも目にすることができる。

あいこうすえたか

●愛甲 季 高            総大将を射倒す  
  
（末高 三郎 久安六年1150～建保元年1213 相模国 ）

愛甲三郎は愛甲季兼の三男として生まれた。先祖は武蔵七党の横山氏の出身と伝わる。

三郎は子供の頃から体が大きく、早くから弓の才能を示した。  
そのため頼朝の御家人に抜擢され、頼朝の身辺警護や正月の御的始の射手など名誉ある役目を務めた。

頼朝の息子の頼家の弓の指南役も務めるなど、三代に渡って鎌倉将軍に仕えたが、一躍その名を轟かせたのは「二俣川の合戦」である。

鎌倉幕府と有力御家人の権力闘争が絡む武力蜂起事件である。弓の名手として知られる畠山重忠も幕府の討伐軍と二俣川において交戦した。

三郎は幕府側に立って従軍し、得意の弓射で敵を翻弄する。  
三郎の弓の張りは通常の二倍ほどに強めてあり、放つ矢は一キロを超えたという。

威力が凄かっただけではない。狙撃の腕も抜群でそれによって戦第一の殊勲に輝く。

敵の大將、名高い畠山重忠が激しい抵抗を見せていると、狙いすまして狙撃する。

威力と精度に優れた射撃は抜群であった。一矢で重忠は射倒されて絶命する。

見事総大将の首をあげたのである。  
大殊勲であった。これにより戦況は一変し、味方の勝利につながる。愛甲三郎の名は天下に鳴り響いた。

建保元年 12(13  の和田義盛の乱では和田方として参戦し、乱戦のさなかで一族とともに討死にしたという。

§コラム    いつの世にも有効だった狙撃戦術

源平合戦では狙撃の事例も多いのが特徴だ。  
壇ノ浦の合戦は最終局面であるが、ここでは義経が組織的な狙撃戦術をとったことが伝わる。

元々源氏には東国出身者が多く、海戦には西国の海に慣れている平氏が有利なはずであった。それでも源氏が最終的に勝利をおさめたのは、一つに当時の海の潮流が有利に働いたせいともいう。そしてもう一つが義経がとった狙撃戦術である。

当時の戦いは基本的に戦闘員である武士同士である。  
海戦ともなると舟の漕ぎ手が現場にいるわけだが、非戦闘員である彼らを狙うのはタブーであり嗜みでもあったという。

義経はそうした武士の規範に頓着せず、戦闘を優位に進めるために、集中的に船の漕ぎ手を狙撃したというのである。  
漕ぎ手がやられてしまえば、当然上手く操舵ができない。海戦でのやりあいでは自由がきかないというのはかなり不利である。ここに潮流のハンデも加わると個々の武勇以前の問題である。  
戦況が劣勢に陥るのも仕方ない。

こうした当時からすれば「卑怯」とも取れ、武士の暗黙のルールを破った戦術が勝利に導いたというのである。  
義経は育った環境からそうした武士の伝統儀礼やたしなみに疎く、それが後年の迫害につながったという見方もあるようだ。

本当に漕ぎ手を射るのがタブーだったかはともかく、海上で船のコントロールは死活問題である。

似たような事例が源平合戦以外でもある。

例えば種子島久時は、領主ながら狙撃手としても有能で、朝鮮出兵では側近たちに弾込めを分担させ、自ら凄まじい速射で名を轟かせていた。  
戦争後半の撤退戦では、至近距離まで追いつがる敵兵を正確な狙撃で撃ち落とし、また敵船の漕ぎ手を集中的に狙って撤退に成功したという。  
島津隊だけでなく小西行長が一命を保てて撤退できたのも、彼らの鉄砲隊が果たした力も大きいという。  
(ちなみに、史実かどうか議論があるが、海戦での活躍で有名な李舜臣も島津兵の狙撃で戦死したという)

他にも西欧の話になるが、フランスの三十年戦争でジャンヌダルクが田舎の村娘にもかかわらず大活躍したのは、本人のカリスマ性だけでなく、当時の騎士団の戦闘作法を無視した点にあるという。  
(武士の作法と同じく卑怯、礼儀知らずと思われぬように戦闘前に名乗りあったり、卑怯なやり方をとらないなど)

騎士でもないジャンヌはそうしたルールを知らず、神の使徒として夜討ち朝駆け何でもありの戦術をとり、慣習とルールに縛られていた騎士たちが打ち破られてしまったというのである。

どこまで史実は分からないが、義経の戦術とも合わせて考えると興味深い。

## ◇ 南北朝の名将

あすけしげのり

●足助 重範                      兄弟ごと射倒した忠臣

（次郎    正応五年1292～正慶元年、元弘二年1332    三河国）

笠置山は完全に包囲されていた。  
何しろ守備側の三千人に対し、包囲する六波羅探題側は十万を超えていたといわれる。数の上では敵ではない。

しかしこの挙兵は後の鎌倉幕府打倒につながる意義深いものであった。  
後醍醐天皇は朝廷から幕府に奪われた実権を取り戻そうと京を脱出し、笠置山にて反幕府の狼煙を上げたのだ。

これが全国に沸き起こる反北条の蜂起の先駆けである。

守備側の三千騎をまとめる総大将は足助重範。弓の巧みさで知られた男である。  
足助一族は挙兵の計画段階でいち早く後醍醐天皇側に立ち、蜂起が行われるとすぐに馳せ参じていた。  
もとより足助一族は過去の後鳥羽上皇の承久の乱でも朝廷に味方し、鎌倉方から処罰された過去がある。その点では筋金入りであった。

重範は戦いの最前線となる一の木戸の防衛を受け持った。得意の強弓でもって櫓から攻撃を仕掛け寄せ手を近づかせない。  
中でも圧巻だったのは開戦当初の二町    100メートル程度）を超える狙撃である。『太平記』は足助の活躍をこう伝える。

足助は押し寄せた敵に向かって矢間の板の間から堂々と名乗りをあげた。  
「三河国の住人足助次郎重範、かたじけなくも一天の君に命を捧げまいらせて此の木戸を固めたり。万乗の君のおわします城なれば大將軍の御出であらんと心得て、大和鍛冶の鍛えたる良き矢じりを少々用意致して候。一筋受けてごらんじ候え。」  
と三人張の弓に十三束三伏の矢を番えて放った。

矢は谷を超えて馬上の荒尾九郎の鎧を貫いて脇腹深く刺さった。荒尾九郎は馬から転げ落ちてそのまま死んだ。  
九郎の弟の弥五郎はこれを他に見せまいと矢面に立って「足助殿の御弓勢、日頃承候いし程にはなかりけり。ここを遊ばし候え。御矢一筋受けて、甲の程をためし候わん」と挑発した。

足助は鎧の下に腹巻など着込んでいると見てとり、少し考えてから矢の先が平らな金磁頭の矢を取り出し、弥五郎の兜めがけて放った。矢は兜の真向かいを碎き、眉間に突き刺さって弥五郎は兄と同じ場所に倒れた。

その後も近寄る敵兵を続々と狙撃してまわったので戦線は一時膠着状態に陥った。

しかしもとより兵力差は圧倒的である。  
さらに関東からも援軍まで到着するとひとたまりもなかった。奮戦むなしく笠置の城は陥落、足助は捕らえられて京の六条河原にて斬首された。＊1

明治以降は忠臣として再評価の対象となり明治政府からも官位が追贈された。足助神社も建立されている。  
また戦前の尋常小学校ではこの笠置山の逸話が國語讀本にも掲載され、この章の文も一部そこから採った。

＊1 そのまま笠置山にて討ち死にしたという説もあるそうだ。

なわ ながとし

●名和 長年                      三千人を退却させた狙撃

長高 又(休郎 生年不明～延元元年／建武三年1336 伯耆国 )

名和長年は村上源氏の末裔を称するが、元は伯耆国で海運業をまとめる豪族であったとか、悪党 從來の支配体制に従わない独立勢力 だつたなど諸説ある。

一族には弓に秀でた人物が多かったとされ、現在でも弓の鍛錬に使ったと言われる大石が残されている。その中でも長年の腕前は抜群であり、五人張りの強弓を軽々と引いたという。

当時後醍醐天皇は鎌倉方からの政権奪還を目指して抗争を繰り広げていた。

一度は笠置山で倒幕の挙兵を行ったものの、敗れて隠岐に流されていた。後醍醐天皇は再起を図って隠岐島を脱出し、あらためて幕府打倒の兵を集めた。この時に真っ先に天皇に馳せ参じたのが長年という。

後醍醐天皇を擁して軍勢は船上山で幕軍と対決した。攻め手の佐々木清高らの軍勢は精鋭三千騎あまりで山を包囲する。

まだ挙兵したばかりで兵員が少なく、長年は不利を補うために策も弄した。まず木々に大量に旗を結びつけ、あちこちに兵が潜伏しているように見せかけた。そうした上で兵数が乏しいのを見抜かれないようにしたという。

そうした上で要所は厳重に守備を固めて善戦した。各隊の奮戦もあつてか搦手の戦いなどではむしろ守備側が優位に立つほどであった。しかし人数の差はいかんともしがたい。全体的にはじりじりと幕軍に押されだす。後醍醐天皇も戦況の行方を気にしだしたという。

長年は愛用の弓を携えて自ら城戸に出陣した。敵方を確認していると、遠方の盾の並ぶ間に白い兜を身につけた田所の弟、五郎左衛門尉種直の姿が目に入った。

長年はこの機会を逃さない。自慢の大弓でもってその場で狙撃した。射られた矢は鎧の合わせ目を射ち抜き、後ろに居た弟の六郎の兜の正面も貫き通して矢が飛び出た。

この弓勢に驚いて郎党の源七らは盾を取り上げて影に隠れようとしたが、既に長年は二の矢を番えていた。放たれた矢は盾の真ん中を射抜き、盾をかざしていた者の首の骨を射切り、余った勢いでそばの源七の小手まで射抜いて二人もろとも倒した。

一矢で二人を倒すなど昔の為朝にも劣らないと、攻め手は怖れて一時兵を引いたという。

軍記的な誇張もあるかもしれないが、他にも包囲側の将の佐々木昌綱が右目に矢を受けて戦死したり、塩冶高貞が後醍醐側に寝返るなどもあつて、結局は幕府側が敗退に追い込まれたのは確かである。

これには弓矢に長けた名和一族の活躍も一役買っているだろう。後年、長年は結城親光、楠木正成、千種忠顕と並んで後醍醐天皇の忠臣四人「三木一草（ゆうき、くすのき、ほうきのなわ、ちぐさ）」と呼ばれた。

◇ 弓による要人狙撃事件 ㊦ 娑婆羅大名大暴れ

こうごんじょうこう  
□ 光 厳 上皇

ときより とお  
● 土岐頼遠

( 生年不詳～興国三年・康永元年1342 美濃国? )

土岐頼遠は足利尊氏に仕えて南朝側諸将と戦い武名をあげた人物である。

青野原の戦いでは北畠顕家の数十万にも及ぶ大軍を精鋭千騎あまりで奮戦して疲弊させたと言われ、天下にその勇猛さが知られた。

旧来の身分制を重んじず、華美な服装や奇抜な言動で「娑婆羅大名」の代表としても挙げられるが、頼遠はその中でも比較を絶していた。

自らの型破りな言動が命取りになったのが光厳上皇をめぐる一件である。

興国三年 13(42 九月)六日、笠懸 馬上から笠やそれに類する小さな的を射る競技 を納めた帰り、洛中で酔ったまま二階堂行春と馬の轡を並べていた。

すると目の前に上皇の牛車を通りかかる。通常ならば下馬して通すのが礼儀であり、隣の二階堂は実際そうした。

しかし頼遠は従者にたしなめられても馬から降りなかった。逆に「院ではなくて犬か、犬ならこうしてやる」といった暴言を浴びせ、あろうことか、上皇の牛車を蹴倒し転がり出た光厳上皇に向けて矢を射掛けたのだ。

さらに上皇が逃げ惑う姿を見て犬呼ばわりして、大笑いしていたという。

これはさすがに暴挙として大問題になり、足利直義によって斬首が決定される。

周囲のとりなしで土岐一族の存続は許されたが、頼遠自身は処刑される前にも同じような無礼な主張を繰り返していたという。「光厳上皇は尊氏の力で天皇になっただけのお飾りに過ぎん。われわれ武士が粉骨砕身して血を流してる横でふんぞりかえってるだけではないか。あんなもの犬でもつとまる」等の発言を繰り返し、直義を激怒させたという。

§ コラム 狙撃に斃れた二名将 義仲と義貞

みなものよしなか  
□ 源義仲

朝日将軍の終焉

(木曾 久寿元年1154～寿永三年1184 武蔵国?)

いちじょうただより  
● 一条忠頼 側の兵

一時は京都を制し平氏追討に功績のあった源義仲。  
その横暴な振る舞いと施政の失敗で朝廷や他の源氏、東国諸将らと対立する。遂には討伐を受ける身になってしまった。

かつて強盛を誇った義仲も宇治川、六条河原の両戦で敗北し、今や僅かな供回りと幼な友達の今井兼平だけを連れて故郷の木曾に落ち延びていた。

逃避行の途中、近江の粟津にさしかかった時である。運悪く敵対していた一条忠頼らの軍勢に補足され再び追撃される。

既に敗残の身である以上、まともに戦える戦力はない。

琵琶湖のほとりまでほうほうの態で逃げると、つい幼馴染の兼平に「いつもは何ともない鎧は今日は重い」と弱音を吐いた。

兼平は励まし、縄目の恥辱を避けるために松原での自害を勧めるが、義仲は兼平とともに討ち死にしたいと望んだ。

兼平は、武士としての最期の名誉を考えるよう諭し、自分が盾になる間に決断するよう迫る。

それに説得されて松原に向かった義仲だったが、薄い氷のはった深田に馬の脚がとられ、どう操ろうが身動きがとれなくなる。

つい兼平の方を振り返った瞬間、眉間を矢で貫かれて崩れ落ちた。

朝日将軍とまで言われた剛直な武人のあつけない最期であった。

それを見た兼平は「日本一の剛の者が自害する手本を見せるぞ!」と太刀を口に含み地面に落ちて自害し、義仲の後を追った。

にったよしきた  
□ 新田義貞 南朝の有力武将の死

(小太郎 正安二年1300?～延元三年・建武五年 上野国?)

ししくさきんすけ  
● 鹿草 公相 側の兵

鎌倉幕府の崩壊後、後醍醐天皇による新政は新たな不満を生んだ。  
幕府打倒に功績のあった足利尊氏は、今度は逆に武家に擁立される形で後醍醐天皇と対立し、衝突を重ねる。

湊川の戦いで頼みの楠木正成らも打ち破られて、後醍醐天皇は比叡山に亡命した。

新田義貞は親王を護りつつ北陸へと落ち延び、尊氏との戦いを継続した。

最初は北陸でも押され気味だったが、ついに義貞は反撃に成功し、越前のほぼ全土を手中に収めた。

なおも足利方の支城を攻略していき、延元三年(建武五年 1338)の七月には藤島城の攻略にかかっていた。

立て籠もる平泉衆は頑強に抵抗し、なかなか勝負がつかない。

義貞は膠着した戦況に業を煮やし、自ら藤島城まで赴くことにした。  
まずは状況視察程度の気持ちであったため、供廻りが五十騎程度しかおらず、これが一生の不覚となる。

藤島城に援軍に向かう足利方の しかくさきんすけ 鹿草 公相 の一行と鉢合わせし、戦闘にもつれ込んでしまったのだ。  
戦闘を予期していなかったため、義貞もほとんど無防備な状態だった。

鹿草の弓兵は楯を揃えて瞬く間に義貞の近習を討ち果たしていく。  
反撃しようにもろくに弓矢もないのだ。

中野宗昌は「千鈞の弩は けいそ 鼯鼠の為に機を発せず」、つまりねずみに長大な弩を使うな、要するにどうでもいい連中を相手にするな、と忠告したが、義貞は「わが家来の者を失ったのに、一人だけ逃げられるものか」とあえて敵に立ち向かった。

しかし多勢に無勢、武器の差もどうしようもない。

愛馬は狙撃されて体に何本もの矢が突き刺さって崩れ落ちる。下は泥田であった。  
倒れた馬の体に左足がはさまれて動けない。義貞がもがきながら半身を起こした瞬間だった。

眉間を矢で貫かれてこの勇将は事切れた。

最後の瞬間に武士の意地で自ら首を掻き切ったと記録されているが、これはさすがに義貞びいきによる美化だろう。

有力な武将を失った後醍醐天皇側はますます追い込まれていき、京都を取り戻すことはできなくなった。

世の中はそのまま南北朝並立の時代を迎える。

とかく弓は古代からあった武器だけに、神がかった弓の名手の話も少なくない。

時代が下ってくると実在の人物がモデルとなるが、やはり高名な英雄や権力者ともなると大げさな伝説で粉飾されたり、超現実的な話まで出てくる。

例えば鎌倉幕府の執権、北条時宗 には次のような話がある。

弘長元年 12(61)、~~柳~~<sup>栴</sup>楽寺の山荘での弓射の会が催された。  
遠笠懸の時是谁もが成功したのに、小笠懸 四寸(=約十二センチの小さい的を射る)に~~な~~<sup>つ</sup>った途端、誰もが失敗するようになった。

人々は「右大将 頼朝(の居)た頃に比べて近頃は名射手が少なくなった」と嘆いたので、北条時頼は「息子の時宗が得意だからやらせてみよう」と試しにやらせてみた。

すると時宗は高位高官の前でも全く物怖じせず、立派に小笠懸を成功させたので拍手喝采を浴びたという。

いかにも後年に蒙古を迎撃した執権にふさわしい逸話である。  
しかし史実の記録と照らし合わせると、この時の時宗の年齢は十歳である。

このぐらいなら多少の権力者に対する誇張で済むが、弓の名手ともなると様々な超自然的な怪異とも結びつくのだ。

<sup>おおむかで</sup>  
藤原秀郷は物語によく登場する人物である。有名なのが 大百足退治の話だ。

領民からの依頼で山に入ると山を七巻きするほどの大百足が現れる。得意の弓でもって矢を何本も射かけるが百足には効かない。  
ついに残る矢が一本となり命の瀬戸際に陥るも、矢に唾をつけて、八幡菩薩に祈りをささげると、最後の一本が神の加護を得て、遂に百足を射殺することができた。  
そしてその退治した百足の体からは無くなることのない大量の米俵があふれ出てきたという。

このパターンの説話は細部が異なっても日本各地に残る。  
いずれも怪物などを退治して最後に米や宝物を得る物語である。

他に史実と混じっているのは将門追討の逸話だ。

平将門討伐は史実であるが、多少潤色が加わって物語説話になっている。

将門は全身鉄でできた強力な武将で、矢や刀も刃が立たない。しかも六人の影武者も使っており倒すのは不可能に近い怪物武将である。

しかし本物の将門には影があり、また唯一の弱点としてこめかみがあった。

秀郷は将門の愛妾の桔梗からこうした情報を得て、こめかみに矢を射ちこんで倒し、ようやく東国の反乱者を鎮圧するという結末になる。

源義家は古来より弓の誉れが高く前九年の役を描いた『陸奥話記』には堅い鎧を三領も木の枝に重ねて吊るし、その六重を射貫いた話が記されている。

また黄海の戦では父の頼義以下七騎まで追い詰められたが、  
「將軍の長男義家、驍勇絶倫にして、騎射すること神の如し。白刀を冒し、重圍を突き、賊の左右に出でて、大鏃の箭を以て、頻りに賊の師を射る。矢空しく発たず。中たる所必ず斃れぬ。雷の如く奔り、風の如く飛び、神武命世なり」と神業的な弓射で敵を討ち果たしたという。

他にも弓の腕前だけでなく、『古今著聞集』では人柄の慈悲深さをうかがわせる話も残る。

ある時義家は狩りで狐を見つけたが何とはなしに哀れに思った。  
そこで直接射ることをせず、素早く走りまわる狐の前に矢を放った。地面に突き立った矢に激突させ気絶したところを生け捕りにしたというのである。

ここまで弓に巧みであったために、伝説的な逸話も多い。  
堀川天皇を悩ましていた鶴を弓を鳴弦させただけで畏怖させて追い払ったりとか、『古事談』では物の怪に悩まされていた白河天皇の枕元に武具や弓を献上して、魔性を近づけないようにしたという。

他にも怪異退治譚として有名なのは 源頼政の鶴退治だろう。  
原因不明の怪異に近衛天皇が悩まされ、頼政が怪異退治を命じられる。

頼政は警護のために宮中の庭に待機することになるが、丑の刻になると「頭が猿、胴が狸、手足が虎、尾が蛇」の化物が目の前に出現したという。

既に鎮守の社に祈願をすませていた頼政はさらに加護を祈り「南無八幡大菩薩」と唱えて山鳥の尾の鏃矢を射掛ける。  
すると怪物は悲鳴をあげて地面に転げ落ちた。そこを従者の猪早太が頼政から与えられていた短刀「骨食」で何度も突き刺して止めをさした。  
死体は空船にのせて桂川に流されたという。

近衛天皇は頼政に深く感謝し、褒美に「獅子王」という名刀を与えた。

二度目は応保の世、二条天皇が鶴に悩まされており、頼政が再び召し出された。

頼政は退治に向かうも、鶴は夕暮れの黒い雲の中にまぎれて姿が見えない。  
鶴は一度しか鳴かないと聞いていたので、頼政は一計を案じる。  
まず大鏃矢を射って音を響かせて、それに鳴き声が反応した方向にすかさず小鏃矢を撃ち込み鶴を仕留めたのだ。  
天皇は大いに喜んで衣服を賜ったという。

鎮西八郎の 源為朝は 剛力無双の弓の名手であり、義経の叔父にあたる人物だが、その逸話も人間離れしている。

身長からして二メートルを超えており、左腕が右腕よりも四寸 十~~二~~<sup>三</sup>センチ ほども長かったという。  
容易に五人張りや八人張りの弓を引き、保元の乱では一度の射撃で敵を三人射ち抜き、大島に流された際は、追討の兵の乗る船を強弓で何艘も沈めたとの伝説が残る。

平教経も軍記物での活躍が華々しい。  
公家化する平家の中で武士としての勇猛さを保ち、とりわけ弓の腕前は世間に鳴り響いていた。

水島の戦いでは敵の海野幸広を打ち取り、義仲の軍も敗走させるなど、崩れつつある平氏を支え続けた。  
屋島の戦いでは、名のある源氏の武者を次々と弓で射殺し、義経も危うく射殺されるところを部下の源氏四天王の佐藤嗣信が体を盾にして助かったという。

壇ノ浦でも頑強に抵抗し続け、迫る源氏を弓で次々に討ち取っては犠牲を強いた。

しかし既に戦場の勝敗は決定しており無駄な殺生を戒められたために、弓を置いて義経を道連れにしようと試みる。  
勇将として名高い義経も教経にはかなわないと逃げ回り、仕方なく教経は源氏の武者二人を両脇に抱えて海中に身を投じたという。  
別の資料では八島の戦いで討ち死にしたという話もあるが、伝説でも弓の腕前が際立っている。

後醍醐天皇の御代に、弓の名手として親王の護衛も行った 隠岐広有 にも怪異譚がある。

紫宸殿に夜な夜な怪鳥が現れてはあたかも人間の言葉のような鳴き声で上げて人々を悩ましていた。またその怪異のせいか、都に疫病も蔓延していた。

これも鶴の一種だと判明したため広有は勅命によって退治を命じられる。  
広有は弓矢でもってこの鶴を退治したので、五位の位と「真弓」という姓を授かって以後は真弓広有と名乗って更に重んじられるようになったという。

怪異譚というのは様々な断片に尾ひれがついて伝説となっていくのかもしれないが、いずれも弓の名手が退治役として存在感を示しているのが興味深い。

## §コラム　海賊との戦い

人質を片手に銃を振り回す犯人。犯人の居るビルを遠巻きにひそかにライフル。一瞬のタイミングで銃口が火を吹き、犯人は吹き飛ぶ……  
現代の狙撃手は凶悪犯やテロリスト鎮圧にも役割を果たす。

これは弓の時代でも例外ではない。

現在まで伝わる弓射の誉れは、戦場の話ばかりではない。  
狙撃によってくせ者を取り押さえたり、賊鎮圧に見事な手並みを見せた話もある。

ここでは海賊との遭遇から思わぬ功績を立てた人物を取り上げたい。

かどべのふしょう  
● 門部府生　　何よりも弓を好む

（生没年不詳　山城国？　　）

かどべ　門部(内裏の門を守衛する者)　　ふしょう　府生　とぬり　舎人は、若く貧しかったが、的当ての真巻弓　木ど竹を接いだ弓　を非常に好み、自宅に居る時も昼夜の別なく練習に明け暮れていた。

夜間に的が見えなくなると、家中の屋根の柱や板を剥がしてそれを火種として照らした。

そのため屋敷はぼろぼろになって住めなくなり隣人の家を間借りしていた。

妻にも近所の住人にもあきれられたが、府生自身は気にせずのにんびりしたものであった。

ある時天皇を迎えて賭弓の行事があった際、府生は弓の評判から召し出され腕前を披露することとなった。  
府生は見事に的を射抜いて見せて天皇に認められる。全国各地で相撲の人間を集めて回る役目に任じられた。  
府生は派遣された先々でも賭弓で連戦連勝し大儲けしたという。

任務を終えて都に帰還していた時のことだ。  
瀬戸の海を船で横切っている最中、背後に不審な船が姿を現して追ってくる。

船の乗員たちは海賊船だと恐慌をきたしたが、府生一人は落ち着いていたという。  
「海賊が千万人やってこようと心配はいらん。今に見ておれ」  
と、まず競べ射ちの際に使う華々しい正装を取り出してそれに着替えた。その姿で屋形の屋根に上り、片肌脱ぎになって海賊船と対峙した。  
そして従者に海賊船が四十五歩の距離に近づいたら呼びかけるように命じる。

皆が気が狂ったかを見守る中、府生は平静だった。  
従者が「もうすぐ四十五歩の距離です！」  
と叫ぶと、じっと目を見据えて敵海賊の首領を見定めた。

首領は黒ずんだ着物をまとい、赤い扇子を操って指揮を執っている。  
「早く追いついて奪いとれ！」  
と意気盛んである。

府生は愛用の弓を取り出すとゆつくりと構えた。海賊船との間にはそれなりの距離があり、海上なのでかなり揺れている。  
周りの者は恐怖と船酔いで吐いたり、狼狽しているのに府生はまったく動かない。

一息に矢は放たれ首領の左目に命中、首領はその場にひっくり返った。使った矢は儀礼用の矢じりのない神箭である。

海賊たちは府生の腕前に驚愕し、急いで船首をめぐらし揃って逃亡してしまった。

府生は「わしの前に立つなど危ない奴らだ」  
と笑って肩の袖を下ろし、唾を吐いた。  
海上には海賊たちが慌てて落としていった袋があったので、それを拾い上げ余裕で笑っていたそうである。

宇治拾遺物語の巻十五の四にも『門部府生、海賊射かへす事』という記載がある。

ぎょうかい  
● 行　快　　神官にして達人

（生没年不祥　紀伊国？）

行快は第二十二代の熊野別当　熊野三山の神社を統括する役職　であり、母は源為義の娘で自ら丹鶴山に東仙寺を築いた鳥居禅尼とされる。

行快が三河国から熊野に米を運んでいた時のことである。  
伊勢の海上で海賊に遭遇した。

海賊らは「積み荷の米を差し出せ」と要求したが行快は「これは熊野の神社に納める神聖な米である。おまえたち賊の思い通りにできるものではない」と拒否した。  
すると海賊らは「熊野に納める米と見たから、わざわざ声をかけたのだ。そうでないなら何も言わずに船を止めて奪っている」と答えた。

埒が明かぬとみた行快は、鎧の腹巻をまとい、墓目の神頭の矢　射るゝと甲高い音を鳴らして飛び、先端が平たい木製の矢じり　を携えて舳先に立つ。  
「おまえたちの望みはかなえられぬ。止められるなら止めてみよ」  
と言い放った。

賊徒も武装して、戦い前の言葉出しを行った。  
船には幕が引かれ、楯が持ち出され、大勢の賊が臨戦態勢になった。

行快は一の矢を放つ。海賊は素早くしゃがみこみ、その身体の上を墓目の矢は音を立てて抜けた。  
「どうだ、かわしたぞ」  
と賊が気を抜いて立ち上がろうとした瞬間であった。  
行快は既に第二の矢を放っており、賊の眉間に命中して射ち倒した。

あまりの神速の早業に賊たちは驚き、  
「い　っ　い　い　おまえは何者だ」  
と問うた。  
「おまえたちは知らないのか。正上座行快だ」  
と名乗った。そして、  
「ここいらの賊は熊野育ちだろう。多少は手加減してやるからわしの手並みを見せてやる」  
と豪語した。

海賊たちもおそれおののき、  
「最初からそう言ってくればよかったのに。もう少しで過ちを犯すところだった」  
と退散したという。

橘成季編『古今著聞集』の第十二巻でも、鎮西八郎為朝の甥にあたる行快の事跡として出ている。

はなぶさまさよし

- 花房 正幸　　達人は矢を選ばず

大永(四年1524／大永六年1526～慶長十年1605　常陸国？)

花房正幸は常陸の上野氏の流れを汲む家柄と言われる。宇喜多氏に仕えてその勢力拡大に貢献し、和歌の古今伝授も受けた教養人でもあった。

正幸が船で上洛していた折である。播磨沖で海賊に包囲されて戦いとなった。

正幸は得意の弓によって次々に海賊を射倒すが、しまいには矢数が尽きてしまった。

それをみてとった海賊の首領は勝ち誇って射てみよと挑発してくる。  
正幸は、最後に残っていた刃先が四寸しかない雁俣の矢をつがえた。

油断して堂々と身体をさらしている首領めがけて矢を放つ。矢は正確に首領の首を貫き、そのまま相手は海に転がり落ちた。  
「どうだ、射殺してやるから何度でも攻めて来い」  
と花房が海賊たちに啖呵を切ると、残党はみな逃げ去ってしまった。

それからはその土地の海賊は花房の家紋のある船には近づかなくなったという。

いずれも海賊に襲われるが、弓の名手が腕を活かして敵の親玉を倒し、賊一党が恐れをなして退散するという話である。

話の形式としては似ているが、当時は実際こうした事が多かったのか、何か原型となる出来事があったのかもしれない。

■室町・戦国

かきぎよしひろ  
● 蠣崎 義 広            暗闇の中の一矢

（新三郎 文明十一年1 4 7 9～天文十四年1 5 4 5        ）

蠣崎氏はもともと蝦夷代官である安藤氏の配下である。

当時、現地では和人とアイヌとの間で絶え間ない抗争が続いており、その中で蠣崎氏は武功によって勢力を拡大し、最終的には主筋の安藤氏を飲み込む形で、松前藩の大名として成立した。

アイヌとの対立では、和平に見せかけただまし討ちもやっているが、弓の腕前に関しては確かだったようである。  
祖父である武田信広からして弓が達者であり、コシャマインの乱での勝利のきっかけも信広がコシャマイン父子を弓矢で射倒した結果だったという。

義広も西蝦夷のアイヌであるタナカサシを和議の席で弓で暗殺して勝利を得ている。

義広は幼いころから弓術に才能を見せ、長じては三人張りの弓を引くほどの射手になった。

年を取ってから腕前は衰えなかったといわれ、こんな逸話もある。

ある夜、盗賊が居城の洲崎城の橋から侵入しようとした。義広は当時すでに隠居していたものの、賊の足音を聞きつけると、音を頼りに矢を放った。

夜が明けてみて現場を確かめてみると、賊は岸边に矢に射止められる形で絶命していたという。

かつらもとすみ  
● 桂元 澄            狙撃で城を落とす

（明応九年1 5 0 0～永禄十二年1 5 6 9    安芸国）

毛利家家臣の桂元澄は、一般的には厳島の一戦で知られているだろう。  
陶晴賢に偽の内応の手紙を送っておびき出し、勝利のきっかけを作った出来事である。

しかしそれ以外にも一人の武人として、弓の腕前にも優れていたことがうかがえる。  
『陰徳太平記』では面白い巧妙話を載せている。

毛利元就が備後で城攻めを行った時のことである。  
城は險阻で難攻不落、守る兵たちも意気が盛んで、戦況が思わしくなかった。

そのうえ上播州の赤松家から援軍が来るという噂が立ち、毛利側の将兵は動揺をきたしていた。

城の包囲戦までに持ち込んでいるが、このまま撤退するかどうか。  
評定の末に、奇策が提案される。

城の「水の手」を断てば良いという進言である。

城の二の丸と本丸の間には大きな谷がある。行き来が難しい。  
そして二の丸は水源に乏しく、飲み水には苦勞していた。時折本丸との間に綱を渡し、水を入れたひょうたんを行き来させて補っていたのだ。  
これを断てば二の丸は嫌でも窮状に追い込まれる、という読みである。

しかし言うのは簡単だが実行は容易ではない。  
綱は遠く彼方の本丸と二の丸の間にある。張ってあるのは細い綱であるために、矢で断とうと思えば、相当の腕前が必要となる。

何人か腕の覚えのある兵をえり抜き、実際に矢を射たせてみたが、全く当たらない。  
そうこうしているうちに赤松方の援軍の噂はますます信憑性をまし、毛利軍の士気にも影響し始めていた。

そこで元就は元澄を呼び出し、直々に綱を断ち切るように命じた。

主君の命とあれば困難でもやり遂げねばならぬ。  
悲壮な覚悟で元澄は綱に向かった。

弓を持って心を落ち着け、一ノ矢を放つ。

しかし矢は一丈ほど上を超えてしまう。  
そこで元澄は矢を変える。五寸ほどある大雁又の矢を取り出したのだ。

射つ前に心を鎮め、八万菩薩に祈りをささげる。

じっと狙いすまし、心をおちつかせて集中し、二の矢を撃ち込んだ。

結果に一同はどよめいた。

雁又は見事に綱を断ち切って大きく揺らす。  
水を入れて渡す途中であった瓢箪はあえなく谷底へと落ちゆく。

拍手喝采の中、毛利軍は再び意気軒昂となって戦場に向かった。

元就は元澄の腕前をたたえ、古の平能登守教経にも劣らないと評した。そして以後元澄には公式に「能登守」を名乗ることを許したという。



よこいしんすけ

●横井 新助 一門の争いに決着をつける

( 生没年不詳 )

関八州では室町頃から勢力争いが続いていたが、伊勢宗瑞こと北条早雲が関東管領の上杉氏を追放してから、本格的な戦国時代に突入していた。

戦国の世では身内同士でも敵味方に分かれるのは珍しくない。  
下総国の古河で代々公方職を務めてきた足利家でも、兄弟間での内紛が起こっていた。

古河公方の足利政氏の次男の義明は、僧から還俗して武士に戻っていたが、仏門にいたとは思えないぐらい巨漢で豪の者だった。  
関八州の統一を目指す義明は、兄の高基とその子春氏と戦いを重ね、里見家の水軍とともに鎌倉に攻め入って後北条氏をも敵に回していた。

国府台において北条氏綱と氏康、その他同盟軍は、義明らの一党と対峙した。

怪力の義明は自ら三尺七寸 約1(1 0センチ の大刀を振り回して暴れまわる。  
義明に勝負を挑んだ安藤豊後という騎馬武者は、大刀で具足の胴ごと叩き潰され、そばにいた別の武者まで地面に叩きつけられる勢いだった。

そこに義明の暴れ振りを観察している男がいた。  
「関八州無双の強弓」と言われた名手、横井新助である。  
新助は冷静であった。  
「確かにおそるべき豪の者である。しかしわざわざ正面から戦う必要はない」

新助は義明を挑発して、自分に挑ませる。  
義明がいきり立って近づいてくると後退して距離を保つ。義明が離れようとする矢を射かけてさらに挑発する。  
あたかも猪を罠に引き込むように次第に自分の調子に巻き込んでいった。

たび重なる挑発と焦らし作戦に疲弊し、冷静さを失って突出してきた一瞬であった。新助はそれを逃さない。

元より三人張りの強弓に十三束の矢を使うほどの射ち手である。  
一瞬の隙に豪弓からの的確な矢が射ち込まれ、化物じみた公方はその場に崩れ落ちる。

総大将がやられたとあって前線は大混乱に陥る。  
義明の仇を討てと新助には武者が群がってきたので、倒した義明の首をとる間もなく後退する。  
義明の首をあげたのは、近くにいた松田彌二郎という者であった。

最終的に総大将の義明が戦死したため、里見らの同盟軍も国府台から退却して戦場の勝敗は決着した。

かつて義明が奪った小弓城には子息の頼純がおり、義明の遺臣たちに引き連れられ安房に脱出した。  
小弓御所とまで呼ばれた足利義明方の勢力は衰亡し、大将首一つで勢力分布まで変える結果となった。

横井新助にはもう一つ似た逸話がある。

天文二十年 1 5(5 1 三月)、北条氏康は関東管領の上杉憲政の本拠地、平井城を攻めた。  
しかしそこは敵の本拠地である。猛烈な抵抗が止まない。

上杉側には荒井伝八という猛者がいた。大馬にまたがり巨大なまさかりを振るって攻め手を寄せ付けない。  
名うての強者の伝八には、北条方の勇名で知られた武将たちも手を焼いた。  
何人かが伝八に挑んだが通じず、樫の木で殴り掛かった武者が失敗した時点で、新助が後を継いだ。

新助は伝八と対峙すると、本人よりもまず挑んでくる伝八の馬を射た。  
伝八は勢い余って地面に転がり落ちたが、すぐに体勢を立て直して新助に襲いかかってくる。

しかし既に矢は番えられていた。  
伝八はその場で胸を貫かれて絶命し、ここに強力な抵抗者が葬り去られて戦場は一変する。

いずれも横井新助の神速の腕前と戦闘巧者ぶりで勝利した逸話である。

ろっかくよしかた

●六角 義賢 威力を発揮した狙撃軍団

( 佐々木氏 大永元年1 5 2 1～慶長三年1 5 9 8 近江国 )

佐々木氏は京都の六角堂に居住していたため「六角」を名乗るようになったとされる。

六角義賢は名門の守護大名であったが、戦国の世の習い通り武芸にも熱心で特に弓と馬術に才覚があった。

重臣に同じ佐々木一族の吉田重政がおり、この男は日置流弓術を創始した吉田家の子孫であった。

日置流弓術は、儀礼を重んじる小笠原流よりも実戦的であったとされる。義賢は吉田重政に教わって唯一の印可を受けた人物となる 印可(を受けるかどうかで二人の間にはひと悶着あったとされ、将来は重政の子に返伝するという約束で印可を受けている )

義賢は將軍義輝や細川晴元を助けて三好長慶らと交戦したり、侵攻してきた浅井家を撃退し逆に服属させたりと、名家の出身ながら戦国大名としても実力を発揮した。

後年信長の勢力が伸長してくると、一時は敵対するも対抗できずに滅亡に追い込まれたが、個人の武勇だけでなく、軍事的なセンスも優れていたようだ。

永禄四年 1 5(6 1 、細川と將軍義輝を援けに京に侵攻した折のことである。

義賢は、神楽岡で三好配下の松永弾正久秀と対峙した。  
久秀は六角側の勝軍山城を陥落させ勢いに乗っている。このまま六角軍を蹴散らそうと一万の軍勢を率いて接近してくる。

傍目には六角勢は不利に見えたが、義賢には策があった。あらかじめ自陣から三百ほどの弓兵を集めて林に潜ませておいたのだ。

久秀らが何も知らず神楽岡に到着し、攻撃を開始した時であった。林の中の弓兵たちが前進してくる松永軍にいつせいに狙撃を開始した。

射撃は極めて正確で久秀の先陣は次々に撃退されていく。前線は混乱して崩壊寸前に陥る。

焦った久秀は軍を叱咤しなおも強引に突撃を命じた。

しかし突撃すればするほど狙撃隊の良的になる。

何度繰り返しても犠牲が増えるだけで突破できない。遂に耐え兼ねた前線が崩壊、軍勢は雪崩をうって退却した。

わずか三百ばかりの兵だ。少数で万を超える大軍を撃退した華々しい戦果である。  
実はただの弓足軽ではなかった。

義賢が日頃から重政らに命じて弓の鍛錬を施していた特殊な部隊であったのだ。  
いわば弓の名手によって何年もの間養成された精鋭狙撃部隊だったのである。

それを考えればこの結果も納得できるかもしれない。

義賢は晩年寺に隠棲したとも、秀吉の御伽衆の一人になったとも言われ、子の義治は秀頼の弓術師範として仕えている。

おおみやかづつら

- 大宮景連　　秀吉に矢傷を負わせた男

（大之丞　生年不詳～天正四年1576？　伊勢国　　）

永禄十年　15(67　、織田信長は伊勢に侵攻していた。  
現地の北畠家と北伊勢の工藤家に不和が生じており、それに乗じたのだ。

先立って進軍していた滝川一益らの後を引き継ぎ、木下藤吉郎を先鋒に軍勢は七万人に膨れ上がっていた。

伊勢の阿坂城主代、大宮入道含忍斎は信長の降伏勧告を拒否し、木下藤吉郎の包囲下にあった。  
大宮入道は頑強に抵抗し、織田方を寄せ付けない。

あまつさえ城主代の息子であり、武勇で知られた大宮景連は、押し寄せる攻め手を得意の弓で次々に射倒していた。  
大将の藤吉郎は業を煮やして突出してくる。景連はそれをも逃さず狙いを定め、見事藤吉郎に命中させて落馬させた。

幸い藤吉郎の怪我は左太腿　＊1(　を射抜かれたただけであったが、軍勢はたまらず一時後退に追い込まれた。

攻めあぐねた藤吉郎は正面攻撃をあきらめ、巧妙な調略戦にうつる。

城内部に複数の協力者を作り出したのだ。

内通者は城内の鉄砲火薬を水浸しにし、織田方の兵を城中に引き入れ大混乱に陥れた。  
最終的に城中が荒れている間に総攻撃が仕掛けられ、ついに阿坂城は堅固な守りを突破された。

景連自身はなおも北畠の霧山城に落ち延び、抵抗を続けて討死にしたという。  
(生き残って小牧長久手の戦に参加したなど諸説ある)

なおこの大宮大之丞景連の狙撃の逸話が本当であるなら、秀吉が生涯で唯一受けた矢傷になるとの事である。

- ＊1　左肘であったとも。

おおしまみつよし

- 大嶋　光義　　弓一つで大名に

（雲八　永正五年1508～慶長九年1604　美濃国？）

大嶋光義の出身には諸説あるが、幼い頃に父が山形の合戦で戦死し、親類に引き取られたという。

最初は斎藤氏の長井道利に仕えて、十三歳の初陣で敵を射倒す働きを見せる。  
後に織田信長に仕えて弓足軽頭になってからも「射芸の功績」が著しく、若くして知行を与えられたという。

通称が「雲八」というが、これも自身の弓矢の腕前にちなむ。  
主の信長は、光義の射撃にいたく感動して「白雲をうがつような」働きであると評した。そして名前をそれにちなんで改めさせたからという。  
また安土城の矢窓切事の奉行も務めた。

信長亡き後は丹羽長秀や秀吉に従い、賤ヶ岳や小田原征伐で功績をあげたという。その頃には弓大将の地位にあったとされ、戦の度に何千石も加増されたので、よほど拔群の腕前であったのだろう。

関ヶ原では家康の東軍に属し、最終的には一万石を超えて加増され、遂に大名になる。  
生涯の五十三回の合戦で四十一通の感状を得たというから大したものだ。

その射芸には敵味方を越えて天下に鳴り響いており、当時の絵画にも弓を持つ達人と描かれる。「百発百中」と讃える文書もあるのだ。

逸話にも事欠かず、鉄砲と勝負して勝利した、秀次の名で法観寺の八坂の塔の窓に矢を十本射込んで見せた、大木の後ろに隠れていた敵を木越しに射て首を貫き、その技量に感動した敵兵が首が矢に貫かれた状態のまま、木ごと切って首を贈ってきたなど派手な話も残る。

ただ武士としての威名が評判だったが、意外に家族思いの一面もあった。  
幼い頃に父に死に別れたことも影響もあるのか、所領の相続でも四人の息子に平等に分け与えた。  
そのせいで子孫は大名格ではなくなったが、以後は大嶋の四家として名門旗本として存続した。

隠居してからも家康から大鷲を贈られたり、秀忠とも鷹狩りを介した礼状が残る。  
武士として終生弓の名手として敬意を払われていたことはうかがわれる。

弓一つで大名にまでなるもの容易でないだろうから、その実力は確かなものであったのだろう。

ないとうまさなり

●内藤 正成 弓も人柄も剛直

甚一(郎、四郎左衛門。享禄元年1528～慶長七年1602 三河国)

先祖は頼朝の御家人だったと言われ、三河の国に越してから松平氏に仕えた。

内藤一族は家系的に弓の名手を多く輩出しており、正成の祖父も上野城城主で「岡崎五人衆」の一人、義清である。  
義清の嫡男の清長も弓技の名声が高く、織田信秀に上野城を攻められた際は、籠城しながら一人で数十人を射倒したと言われる。  
その清長の嫡男、家長も「無双の弓の上手」を謳われているぐらいなので、非常に弓に秀でた一族であったのは確かである。

内藤正成は十五歳にして上野城で織田勢力を迎え撃ったのが初陣とされ、伯父らとともにその剛弓で織田方を退却に追い込んだという。

家康の父である松平広忠にも弓の腕を見込まれて出仕を命じられたとも伝わる。

家康に仕えるようになってからは忠節でも評価されるようになった。  
有名な一向一揆の際では、一門が一向宗に属しており、伯父の清長や家康譜代の数々の臣も一揆に参加したにもかかわらず、正成は家康の為に一揆の鎮圧にあたっ  
た。

一揆側の有力な武将、渡辺高綱の両膝を射抜き、さらに正確で強力な狙撃で大将の矢田作十郎までをも退却に追い込み、家康から激賞されたという。

神がかり的な弓の凄味を示す逸話も残る。相手の鞍の後輪を射抜くほど威力があったとか、対朝倉の金ヶ崎の退却戦では殿軍で三本の矢で一気に敵六人を倒したとい  
う。

最も弓の技量を示す逸話が、今川方の御油城攻めの際のものである。  
正成の弓の巧みに敵の城兵までも感動し、腕前を見せてくれと鉄の盾を出してきた。射ちぬけるかどうか試させようとしたのだが、実はこれは計略であった。  
盾の陰には伏兵が潜んであり、隙を見て正成を討ち取る手はずであったのだ。

正成は一目でそのはかりごとを見抜く。わざと誘いにのったふりをして、楯に近づき、一瞬でもって厚さ二寸を超える鉄の塊を射抜いて見せた。  
あまりの剛弓に潜んでいた伏兵までも射抜かれてしまったのである。これには今川方も呆然として声もなかったとされる。

また弓の腕前だけでなく、剛直な人柄を示す話も多い。  
城の留守居を頼まれた際には、家康には「自分の顔を直接確認しない限り開門するな」と命じられた。正成はその命を忠実に守り、徳川家重臣の本田忠勝が来ても絶  
対に中に通さず、家康本人が帰還してからやっと忠勝は中に入れてもらったという。

他にも信長から参陣を促す使者が来た際には、その態度があまりに無礼であったので怒鳴りつけて信長本人をよこせと追い出した。

対信玄の戦いで家康が退却すると、自分の息子に家康の命を守るために突撃させて戦死させた。  
家康が天下を統一し、幕府が成立しても頑固で剛直な態度は変わらず、大して戦で功績をあげていない男が自分と同程度の知行をもらってると知ると、激怒してその  
まま隠居した。

ともあれ家康の信頼は厚かったらしく、鷹狩などの際に良い獲物が取れると、家康本人が正成宅を訪問して共に食事をするほどだったという。

後世からは徳川十六神将の一人に選ばれている。

しばたやすただ

●柴田康 忠 六十三人を斃した男

(重政、政忠 孫七郎、七九郎。天文七年1538～文禄二年1593 三河国)

柴田康忠は永禄四年 1561 から徳川家康に仕えはじめたとされ、名字は居地の額田郡の柴田郷から取ったという。家康の下ではその弓の技量によって頭角を顕  
した。

まず最初に名が知られたのは、三河一向一揆の鎮圧戦であった。康忠は自らも一向宗の門徒でありながら、一揆には参加せず、逆に浄土宗に宗旨を変えて家康側に  
回った。  
戦場での弓の巧みさが注目を浴びたという。

康忠の弓の腕前は群を抜いていたため、家康からの信頼が強まり「康」の字を与えられて実名を改名するほどであった。  
それからも旗本先手役の先鋒や部隊の軍監を務めて功績を上げた。

狙撃者としていかに優れていたのは、「名前」にちなむ逸話からも分かる。

ある戦で優れた射撃によってさんさん敵を射ち倒した後日のことである。

康忠は通常戦で使う矢には自らの名前を記している。  
敵側が遺骸を改めていると、同じような名前が書かれた矢に気付く。

他にも近くで戦死した亡骸や負傷した者の矢を集めていると、同じ名前が書かれている。  
驚嘆した敵がすべての矢を集めると、六十三本もあった。

一人で六十三人も倒せるのは尋常ではない。

さすがに敵も感心して、康忠の矢をとりまとめ、射たれた者の氏名、やられた状況などを詳しく記した書状を添えて徳川方に送り返してきた。

家康もわずか一人でここまで功績をあげたことに感心し、「これからは七九郎と名乗れ」と命じたという。この名付けには家康の洒落っ気も入っている。七と九。つまり算法にしたがえば、かけて六十三になる。

仏僧を中心とした五山文学や漢詩や和歌にこの種の言葉遊びがあるが、文人としての教養もあった家康は、そうしたことに理解があったのだ。

抜群の武功に対する面白みある名付けであるといえよう。

§コラム 弓の極意

世に数ある秘伝書には「極意」となるものがある。内容はそれぞれ流派によって多様性があるが、大きく共通するものを見出すことができる。それは彼我の「距離」に関する言及である。

武道は基本的に敵と相対して行うものであり、そこから対峙した時の手法やコツも数多く生まれてきた。当然そこには相手との間隔が重要になってくる。

次の例は実戦で弓射の秘訣が示されたものである。

野田甚左衛門尉は、詳しい経歴は分かっていないが、蒲生氏郷の配下であったとされる。秀吉が豊前の巖石城を攻めた時のことだ。

蒲生配下として甚左衛門尉も従軍し、弓によって手柄を立てた。それは山田の畔に立ち、弓の狙撃でもって瞬く間に五人を討ち取ったものだという。

戦場にあつては首を一つ上げるだけでも一苦労だ。五つの首が秀吉の上覧に差し出されると、皆がその弓の腕前を褒めたたえた。

そしてどうやってそこまで正確に敵を射倒せるのだと問われると、こう答えたという。

「自分のすぐそばまで引き付けることです。敵の鍔先がこちらの拳に当たると思えるぐらいに引き付けておいて、矢を放つのです。そうすればまず外れません」

弓術においては「鍔先の弓」と言われる極意があるが、大体この逸話と似た内容である。

近代の狙撃戦においても「距離」並びに「敵を引き付ける」のは重要な要素だ。弓の時代ならばなおさらであったろう。

「拳に当たる」はいわば誇張的な表現だろうが、そのぐらいの心持ちで引き付ければ確かに命中率も高くなる。

特定の流派が編み出したというより、数ある戦の中で経験的に編み出されてきた極意なのかもしれない。

◇弓による要人狙撃事件 ⑤家のために犠牲になる

とよとみひでよし  
□豊臣 秀吉 羽柴 藤吉郎 天文六年1537～慶長三年1598 尾張国)

しまづとしひさ ほんだごろう ざ えもん  
●島津 歳久、 本田五郎左衛門？

又六郎 天文六年1537～天正二十年1592 薩摩国)

秀吉が着々と天下統一を進める中、最終的な矛先は九州に向けられた。

九州に覇を唱えていた島津氏は、秀吉と戦うか降伏するかの選択に迫られる。

他の兄弟たちは元々は身分の低い秀吉をあなどり、主戦に傾いていた。しかし英明で知られる三男の歳久は逆に身分の低さからも秀吉の実力を評価する。卑賤な身の上から成り上がったのだから、ただ者ではないと考えたのだ。

歳久が和平を主張する中、島津家としては戦いに決着する。

自分の考えには反したものの、一度交戦するとなると、歳久は熱心だった。勇猛な兵を率いて徹底抗戦するが、秀吉の大軍の前にはひとたまりもない。主戦論者だった兄たちは早々に降伏するも、歳久はなおもゲリラ戦という形で抵抗する。

秀吉一行を見通しと足場の悪い道に誘い出し、秀吉の乗る駕籠めがけて六本も矢を射込んだという 実際の狙撃者は家臣の本田五郎左衛門らともいわれる 。 )

しかし秀吉側は事前に襲撃を警戒しており、駕籠は空であった。決死の暗殺作戦も失敗し、島津は完全に降伏し秀吉に臣従することになる。

ここまで歳久が徹底して反逆したのは、戦で婿養子をつった怨みとか、あえて秀吉の敵意を一身に集めることで、島津家自体の存続を図ろうとしたからだとも言う。

■江戸～幕末

太平となった江戸の世では、実戦での狙撃は少なくなり、戦国期の鉄砲の普及とも相まって弓の狙撃事例も減少してくる。

弓も実戦に即すというより、儀礼や精神修養の側面も強くなってきて、明治以後の弓道につながっていく。  
しかし江戸を通して弓の名手が何人も登場したのは見逃せない。

◇ 将軍の弓術

家康

家康は老獯な政治家としての印象があるが、実際は戦いの場に生きただけあって、武芸もかなりの腕前だったそうである。

馬術や鉄砲も免許皆伝までいっているが、弓に関しては竹林派の免許皆伝であった。

実際に『信長公記』では前に立ちふさがった武田の武者を、騎射で何人も射倒した話が載せられている。

後年の太ったゆったりとした姿や「狸親父」の印象と異なり、実像は乱世に生きた武家の棟梁であったようだ。

吉宗

太平が続くと、武士も民衆も弛緩してきた。  
特に江戸幕府は武家政権ながら文治主義で平和主義の一面もあったので、武芸をおろそかにして、文化遊芸に熱心になる者も多かった。

そんな中で八代将軍の吉宗は目立つ。  
「文武」を奨励して煙たがられたのは、川柳でも知られるが、実際に政治改革だけでなく武術教練にも熱心であった。

特に弓は重視したようで、一日に六千本の指矢稽古をこなし、鷹狩りに出かけると、自ら野鳥を射取っていたという。  
流鏑馬が室町で途絶えていたのを復活させ、騎射挟物の式も再編した。この辺りの弓道文化への貢献は大きい。

将軍がそうした姿勢であったために、周囲の意気もあがったようで、弓術のレベルが再向上し、弓始めの儀式では十人の射手が全て命中させるのが当然になったという。

慶喜

不穏な世相を反映してか、幕末には武芸が流行した。  
最後の将軍慶喜も武芸を好んだとされ、馬術はもちろん手裏剣までたしなんだという。

弓に関しては毎日百射はこなしたとされ、流鏑馬を観覧するときは射ち手の巧拙まで論評できたという。

◇ 通し矢に見る射撃

京都には三十三間堂という有名なお堂がある。  
賀茂川の近く、元々は後白河上皇の御所内に建てられた。

横に長いお堂の柱間が三十三ある所から名付けられ、中には千体以上の仏像や、国宝の所蔵品がある。お堂ながら弓射の歴史でもははずせない場所である。  
現代まで続く「通し矢」の行事が生まれた場所でもあるからである。

伝説では、十二世紀頃にお堂の西の縁側で蕪坂源太という者が、この一二〇メートルほどある庇の下を矢で射通した。これが起こりである。

庇から床までは五メートルほどの間隔しかない。それを北に向けてどこにも触れず射通すのだ。  
見通しは良いが、長い距離を一気に貫くわけだから、それなりに筋力と射撃の技術がいる。  
矢数を重ねるとなるとさらに持久力も必要となってくる。

これが「通し矢」の基本である。

桃山時代頃から三十三間堂の通し矢は隆盛を迎え、次第に射った「数」を競うようになる。

通し矢の競技法

元服前の少年らが堂の半分程の距離を射通す「半堂射」。百本で通し矢を競う「百矢」。千本射って数を競う「千矢」。一日でどれだけ本数を射てるか競う「日矢」。  
そして一番圧巻なのが「大矢数」で、これは一昼夜かけて射通した本数を競う。

本数の記録は『年代矢数帳』に記録され、初期は百本程度の矢数だった。

しかし江戸に入ると諸藩の腕に覚えのある藩士や浪人や少年も参加するようになり、立身出世や体面も絡んでくる。そのため競争が激しくなって矢数も激増した。  
中には藩から金銭的な後援を受けたり 参加して競技を行うのに千両近く費用がかかることもあったとか 、失敗を恥じて自ら命を絶つケースまで出たという。

夜間のお堂で松明の明かりがゆらめくなか、鍛え上げた腕に覚えのある男たちが真剣に競う。矢が長いお堂をまっすぐに貫く。  
そこには儀式的な美しさも備えて、世間の注目を浴びたという。

通し矢の実力者たち

江戸を通して勝負が行われたため、名を残した名手も出てきた。  
元服前の少年が行った半堂射も意外に侮れず、中には数千から一万の記録を出す者もいたそうだ。

通し矢で記録を作ったのに以下の人々がいる。

ほしのしげのり

●星野 茂則 二度天下を取った男

（勘左衛門 寛永十九年1642～元禄九年1696 尾張国）

星野家は熱田神宮の神官、千秋氏の流れを汲むとも言われる。父の星野則等は尾張藩主の徳川義直に仕えた。星野家の三男坊であった茂則は、弓に才覚があり、日置流尾州竹林派の弓術を習得してからは徳川光友の弓の指南役も務めた。

当時三十三間堂で射比べは隆盛を極め、中でも尾張藩と紀州藩が互いをライバル視してしのぎを削っていた。その頃ではかつての牧歌的な時代は過ぎ去っており、朝岡平兵衛 記録されている大矢数では最古 が百本中五十一本射通して「天下一」と家康に讃えられた水準を超えていた。

総矢数は一万本近くになり、内六割は成功するのが当たり前になっていたのである。

この状況で紀州藩士の吉見台右衛門は、総矢数で九七六九本、内六三四三本を射通すのに成功、尾張藩の記録を打ち破って「天下一」の称号を受けていた。

寛文二年（1662）、星野勘左衛門は藩が面子をかけて後援する中、大矢数に挑んだ。一昼夜をかけて全力を尽くした結果、総矢数一〇〇二五本、内六六六六本を射通して紀州藩の記録を打ち破る。見事「天下一」の称号を手にし、勘左衛門は尾張藩の弓頭にまで出世し、知行も加増された。

しかし寛文八年（1668）、再び紀州藩士の葛西園右衛門が九〇〇本中七〇七七本を達成、記録は打ち破られてしまう。

この事態に再び勘左衛門は立ち上がる。翌年に三十三間堂に赴き、またもや大矢数に挑んだのだ。

ここでも勘左衛門は意地を見せた。総矢数一〇五四二本中、八〇〇〇本の大記録を達成、なんと再び「天下一」の称号を得たのである。二度の天下には藩中でも大喝采され、再度知行の加増をうけた。

星野茂則は生涯に二度「天下一」の称号を得た射手として名を残す。

わさ のりとお

●和佐 範 遠(大八郎 不朽の記録を樹立

（大八郎 寛文三年1663～正徳三年1713 紀伊国）

和佐範遠は紀州和佐村に生を受ける。父和佐森右衛門は、和歌山藩士で竹林派弓術の門弟でもあった。

幼い頃から体格に恵まれ、成人した時には百九十センチを超えていたとされる。父と同じく竹林派の弓術を学ぶが、体格優良で弓にも才能を見せたため、将来有望と稽古料は藩が負担したという。

成人すると和佐範遠は巨漢にして怪力、弓の腕も十分に挑戦者として不足なしとみられた。貞享三年（1686）、尾張藩に奪われたままの「天下一」の称号を奪回すべく、三十三間堂に派遣される。

しかし夕方六時に始まった通し矢は、朝までぶっ続けである。容易にやり遂げられることではない。

何度も弓を引き絞るうちに、経験したことのない苦しみが巻き起こってくる。集中力が乱れてきて、矢が当たらなくなってくる。そして疲れて腕が上がらず指にもうつ血ができる。しまいには弦をつかむだけで、指に激痛が走り思うように射ることができない。

歴代の挑戦者がくじけた同じ関門であった。

必死になって精神を振るっても痛みが激しい。くじけそうになった範遠の前に一人の男が現れる。

男は小刀を取り出すと範遠の手を取り、うつ血を処置してやった。一番の難関であった指の痛みが消えたことで、範遠は再び調子を取り戻す。

そこからはまた根性で最後までやり通すことができたという。

記録は素晴らしいものであった。一三〇五三中、八一三三本。尾張藩の記録を破っただけではない。まさに前人未到の最高記録であった。新たな天下一である。

そして以後この記録が破られることはなかった。

しかし驚くのはそれだけでない。途中で通し矢の場に現れ範遠を救った男。それはなんとライバルのはずの尾張藩の星野茂則であったのだ。

うつ血の処理も自分の経験からよくわかっていたのである。

記録を作った範遠もさることながら、あえて敵を手助けして自分に挑戦させた星野もフェアな男であったと言えるだろう。近代のスポーツマンシップ以前にある武士の精神である。

通し矢後、記録を達成した和佐は英雄となった。人々から振る舞い酒を浴びせられ、紀州に戻ると藩主の光貞がわざわざ出迎えたという。範遠は加増されて弓術師範の頭役になり、竹林派の師からも印可を受けた。

ここまでは順風満帆だったが、後年に罪を得て幽閉されたと伝わる。本人の女性問題だとも、家族が犯した罪に連座させられたとも言われるが真相はよく分らない。

だが今もってしても三十三間堂で和佐範遠の記録は破られてはいない。

（貴果 早太郎 生年不詳～元治元年1864 三河国）

通し矢を語る上で面白い例がある。  
幕末、新選組の副長格であった安藤早太郎のかかわりである。

安藤は三河国挙母藩の御典医である安藤家に生まれた。  
しかし時代が風雲急を告げてくると脱藩し、文久三年 1863 五月頃に王生浪士組に入隊する。  
のちに浪士組が新選組に改組される時には副長助勤であった。  
局長の芹澤鴨の暗殺後、芹澤派の野口健司の切腹では介錯人をも務めた。

この初期新選組の重要な隊士が、通し矢の記録保持者であるのはあまり知られていない。

安藤は幼い頃に石堂竹林派の戸田市郎兵衛に弓を学び、元服の際には総目録を受ける程の腕であった。  
江戸詰めから帰国すると応心流弓術も修め、猿投神社の流鏑馬にも参加、藩の弓術師範も務めたという。そして安藤の腕前を知った藩主のはからいで、通し矢への参加を許される。

ただ安藤の場合は舞台が京都の三十三間堂ではない。奈良東大寺の大仏殿である。  
西回廊で同じように通し矢が行われていたのだ ちなみに江戸でも行われていたが、天下一の称号が得られるのは京の三十三間堂だけ 。

東大寺の射競べでは、安藤は実に総矢数一一五〇〇本に達し、八六八五本を射通す。  
過去最大の記録を樹ち立てた。

おそらく弓の腕前で言えば新撰組随一であったろう。しかしそれが活かされることはなかった。

元から性格的に激しい所があり、他者と衝突することも度々であったという。  
脱藩して新選組に入ってから是有名な池田屋事件では襲撃班にも参加した。  
池田屋裏庭の警護を担当するも、抗争が元で負傷、その傷が元で同年に死去した。

## §コラム もし新選組の安藤が生きていたら？ 弓の可能性

新選組は幕府が崩壊する中あえて幕府側を <sup>たす</sup> 佐け、京都を中心にくつもの肅清と血なまぐさい事件を起こす。

大政奉還後は薩長を中心とする新政府軍との戦いにもつれ込んだが、この時の隊士の記録が武器の移り変わりの証言として興味深い。  
戊辰戦争では時には白刃や鎗でもって戦おうとした隊士もいたという。  
しかし薩長の持つ最新の銃器には無力で、完全に世の中は鉄砲の時代になったと述懐しているのだ。

弓は鉄砲の前には無力か

証言の通り幕末では数々の最新兵器が西欧よりもたらされた。  
ミニエー銃など射程距離が火縄銃を楽に超えるので、遠距離の狙撃戦となると圧倒的に不利になる。

しかし残された記録を詳しくたどると意外に弓の役割も再評価できる点があるのだ。

### 幕末の主要銃器

近代には小型火器も著しく発達し、新型銃器が大量に日本に流れ込んできた。  
しかし新式といってもまだ前装式 筒の先から火薬や弾丸を入れて索杖で押し込む で装填時間がかかり、射的距離と精度に限界があるのが多かったのだ。

特に幕末だと藩によっては旧式の火縄銃のままの所もあった。  
また日本の場合、平地だけでなく木々の多い山地や遮蔽物の多い市街戦も多い。

維新後の西南戦争の有名な田原坂では、地形上の理由から十メートル程度で激しい銃撃戦が行われ、白煙や物陰に隠れての抜刀攻撃もあったのである。

弓の問題は熟練するまでに時間がかかることだ。個人の技量によって連射時間、飛距離、狙撃の精度に大きく差が出てしまう。

しかし新選組の安藤の場合などどうだろう？  
通し矢で見せたように長時間にわたって射撃できる身体能力、飛距離や精度も申し分ない。  
まだ当時の鉄砲に対してなら射程距離も著しく劣るわけではない。

幕末の長英戦争 長州が欧州との兵器の差を思い知らされ、改革のきっかけとなった でさえ、イギリスの外交官アーネスト・サトウが「弓矢でやられた英国兵の死体があった」と書き残している。近代戦の日清や日露、時には日中戦争まで戦場によっては抜刀攻撃があったのである。

ここまで考えると、幕末の混戦で弓が全く無力かということそうも思えない。  
特に新選組には安藤のように身体能力と弓射技術のある人間が存在していたのである。

もちろん実戦では様々な要因が絡む。  
道場の名剣士が必ずしも実戦で無敵とは限らないように、通し矢や平時の腕前だけで独断はできない。

向こうからも弾が飛んでくるし、度胸や状況判断能力も必要になる。  
しかし名射手があえて近代戦の先駆けで弓を使っていたらどうなったか。

遮蔽を巧みに活かしながら、連続した狙撃を行う状況。

もし実現していれば、弓と銃の戦いで興味深い実例を残してくれたかもしれない。



## 第二部　鉄砲の時代

鉄砲は日本に伝来すると目覚しい勢いで普及した。江戸初期までに五十万挺を数えたといわれる。伝来ルートは通説のように種子島だけでなく、倭寇や交易商人がそれ以前から中国や東南アジア経由で手に入れていた説も有力なようである。

いずれにしろ室町以降の戦乱と政治の不安定さと相まって需要が高く不可欠の武器となっていく。

現代銃から見れば当時の火縄銃は射程距離や命中精度でかなり見劣りする。なぜなら銃身内部に螺旋状の施条　ライフル　が無く、火縄による着火形式であり、弾丸の形状も丸いなど、初期の型式である。

それでも命中した時に殺傷能力もあること、弓と違って習熟するのに容易であることなどから戦国後期には弓兵よりも重要性が増していく。

現在残る大名の陣触れ資料を見ても、鉄砲の調達や修練が重視されているのが分かる。

### 日本での銃砲発達の特徴

日本における銃器の取り扱いの特徴としては「命中させる」方面が重視されたことがある。

当時の銃の性能の限界もあってか、ヨーロッパの合戦では集団で鉄砲隊が一定の方向に発砲して弾幕を張る、威圧するという面の戦術が主流であったという。

個人の技量を高める形での精度は、あまり厳しく言われなかったようである。

この点日本の砲術諸流派は命中率を高める修練を重んじ、鉄砲の改良も命中精度を高めることは重視されていた　世界のマスカット銃の中で日本の火縄銃は精度の高さが認められているとか　。　)

江戸時代に火縄式に代わって燧石式　石や金具の摩擦で着火させる　の鉄砲も入ってきたが、これが不評だったのも反動が強く狙点がずれがちになるのも一因であったという。

このあたり文化技術的に「狙撃」と親和性がある部分もあったのかもしれない。

### ◇ 砲術家たちの名手

鉄砲が広く普及すると鉄砲製造を専門に扱う技術者や、射撃に習熟した武者も生まれてきた。

伝来時期が戦乱の世であるため、鉄砲のノウハウの需要は高い。砲術家たちは槍や弓馬と同じく流派を開き、全国津々浦々で砲術を教授してまわった。

江戸時代に入り世が平和になると、実戦より見世物や行事的な側面も目立つようになり、その火薬の知識が花火の技術に応用されたりもした。

一般的には大型砲術や幕末の黒船来航以降の砲術革新が取り上げられがちだが、個々人の鉄砲修練を目指す鉄砲流派も幕末まで存在していた。

それなりに戦国から江戸期を通じて発展し、幕末までに主な砲術流派は二〇〇を超えるに至り、細分化して数えると八〇〇を超えるそうである。

こうした砲術の大元は戦国から江戸初期のかけでの流派である。

戦国の三名人と呼ばれたのは稲富一夢斎、田付兵庫助景澄、泊兵部少輔藤原一火などであり、それぞれ一派を立てている。

江戸初期に著された『武芸小伝』　日夏繁高　では名高い鉄砲の名人としてこの三人の他に、津田監物、井上外記正継、田布施源助忠宗、西村丹後守忠次、藤井河内守一二斎、三木茂太夫などを挙げている。

こうした世評に高い人々が和流砲術の大元となった。

ただし当時の常として、流派ごとに内輪に伝承されて詳しい内実が知れない点や、資料的な問題で狙撃の技量を知りたくてもいまいち話が残っていないのは残念である。

いなどみいちむさい

●稲 富一夢 斎　　　　毀誉褒貶する砲術の大家

（祐直　天文二十一年1552～慶長十六年1611　丹後国）

日本の砲術史を語る上で欠かせないのは稲富流である。

戦国の世を生きた稲富祐直は祖父のすけひで祐秀から砲術を学び、それを発展させ独自の稲富流砲術を完成させた。全国の有力大名に教えを授けて「天下の砲術師」の異名をとり、江戸幕府お抱えになってからは格式も高まり、秘伝書は世の砲術家にとっても教科書代わりにもなった。

稲富家は祖父の代から丹後守護一色家に仕え、祐直も丹後弓木城の城主であったとされる。一色家が細川家に滅ぼされると、迫りくる細川忠興の軍勢に対して弟子たちと弓木城に籠城し、少数でもって何度も撃退した。そのため忠興は和議でもってようやく開城させたという。以後は細川家に仕えた。

鉄砲の腕前も抜群であったとされ、針の先に刺した虱を撃ち抜けた、夜間ふくろうの鳴く声の方角に弾を放って撃ち落とせた、目隠しをしても標的に命中させたなど優れた技量をうかがわせる話が豊富である。

稲富の技芸に関する考えを示す逸話も残る。

稲富は後年徳川家にも仕え、尾張藩主となる家康の四男、松平忠吉にも砲術を教えた。忠吉は砲術の習得に非常に熱心であり、稲富から免許皆伝を受ける腕前であつ

た。

ある日忠吉が狩りに出かけた時のこと。獲物に雁を狙ったが、なぜかその日は鳥の警戒心が強い。鉄砲を携えただけで逃げてしまう。

そこで付き添っていた稲富の弟子が「こうすればよいです」とやってみせた。まず文箱を鉄砲にくくりつけ、ただの通行人のように歩いてみせる。その姿にはさすがに雁も飛び立たない。弟子はそのまま距離を縮め、振り向かずに背中越しに雁を撃ち落として見せた。

驚嘆した忠吉は稲富を呼び出し「免許皆伝と言いながらあんな技は教わっていない」と詰ると、稲富は言を否定してこう話したという。「それは場に合わせて行った『工夫』であって秘伝ではありません。習った秘伝をどのように状況に応じて工夫するかが大切なのです。秘伝が「芸」にあたるとすれば、工夫は「術」にあたります。技術のまとまりである「芸」をどのように用い、使っていくかが「工夫」なのです。

状況によってそれは違ってくるのですから、あらゆる物事に工夫を伝えることは無理です。学んだ技術だけでなく、それをどのように工夫するかが修行なのです」

確かに現代から見ても納得できる考えである。さすが名人の考えは深い、とも言いたくなる話だが、実は稲富は否定的な逸話も多いのが特徴なのだ。

稲富の生涯で必ず持ち出されるのが関ヶ原前の細川忠興のガラシャ夫人にちなむものだ。

開戦前、多くの大名たちは石田三成と家康の間で去就を定めかねていた。三成は強引に妻子を人質に取ってでも味方につけようと、細川家の大阪屋敷に兵をさしむけた。ガラシャ夫人は捕われるのを潔しとせず、家来に命じて自分を殺させた。

警護の者たちも多くは三成の兵と戦って死んだり、ガラシャ夫人の後を追って殉死した。この時に稲富佑直も警護を任された一人であり、得意の鉄砲で防御に活躍することを期待されていた。それが稲富は早々に現場から立ち去ったという。一説では才能を惜しまれて逃がされたとか、包囲側に稲富の弟子がいて、手引きして逃亡を助けたともいわれる。

それでもこの稲富の態度は卑怯として問題になった。特に主君の細川忠興は許せなかったらしく、追手をさしむけただけでなく、あちこちの家中に奉公構え その相手を手を雇わないようにすること の要請を出した。

一時は井伊直政に庇護されたが、なおも忠興の怒りは解けない、家康の仲介でようやく許されたという。それからは家康や徳川義直などの砲術師範となる。

戦国時代は江戸の忠孝などの儒教道徳にさほど縛られていない時代である。細川家も元は稲富の主家を滅ぼした相手である。そこに殉死する義理を見いだせなかったのかもしれない。しかし武士に「臆病」の評判は当時でも致命的であり恥でもある。稲富にしばしば否定的な評価があるのはこの辺にあるのかもしれない。

他にも加藤清正が稲富と関わった話がある。清正が尾張公の元に行った折、旧知であった稲富に扶持米をやって家臣らに鉄砲の稽古をつけてもらった。それが無手構え 鉄砲なしでやる基礎的な構えの練習 だけで終わったので家臣から「あれじゃ上手くなりませんよ」と言われると清正は笑ったという。「鉄砲は自分で稽古すれば上手くなる。稲富は売名家だから、われわれに稽古をつけてやったと言って回るだろう。加藤家は天下の砲術師に教えを受けていると広まればそれだけで宣伝になる」と、どちらかというとあまり評価していない話である。

極めつけは立花宗茂配下のの ときみつや 十時三弥との競べ撃ちの一件だ。

朝鮮出兵の際、滞在している大名や武士たちの間で虎狩りが流行した。細川忠興にしたがって従軍していた稲富は、ある時に立花家の十時三弥と同時に一匹の虎を狙った。二人は同時に発砲したが、稲富の弾は外れ十時のものは命中して虎を倒した。しかも距離は稲富の方が近く、鉄砲に関しては十時はほぼ素人であったという。

これなどは「天下一」のはずの腕前が怪しくなりそうな内容である。ただこの逸話がどれだけ信用できるかわからないし、清正や立花も細川と同じく九州大名なのを考えれば、ガラシャの一件から発した低い評価が影響しているのかもしれない。

また射撃は鉄砲の調子や弾丸火薬の質によっても左右される事があるし、特に当時の火縄銃だと安定してると言い難い。

稲富は普段から鉄砲の弾を防ぐために鎧を二枚重ねにしていって「二領具足」とも呼ばれていたというから、用心深い性質でもあったのだろう。現場で危険な虎というプレッシャーがあった可能性もあるし、もしそうならいざという勝負に弱い所があったのかもしれない。

稲富流その後

稲富家は男子が少なく、しかも夭折したため主に弟子や養子の系統が存続した。徳川家お抱えであったので砲術諸流派の中では格上だったようである。

大阪夏の陣では弟子筋の稲富重次が淀君や片桐勝元の居室を大型鉄砲で狙撃した。国友とのパイプを生かして大砲の調達にも協力し講和成立に力を果たしたという。

ただ稲富流はどちらかというと火縄銃による個人技が主体であり＊１、他の大型の大砲を中心とする砲術とは一線を画していた。奥義書の内容も個人を主体とする記述が多い。

時代は朝鮮出兵や大阪城攻め、島原城攻め、長崎出島警備等などで大口徑砲の需要が高まっており、幕府でも井上外記の井上流が主流を占めるようになっていた。稲富家は途中から鉄砲方を辞して通常の番方に移行したともいう。明治頃まで稲富家は存続していたそうだが、「砲術家」としてはほぼ名前だけのような形になっていたという。

江戸に入ってから家康が鉄砲技術の開発や改善に規制を加え、砲術は限定されたものになった。砲術家は火薬の知識を花火業者に継承させた者もあり、現代にまで稲富流の痕跡が残っているそうである。

＊１ 後年の稲富流砲術の後継者が井上流砲術の創始者である井上外記正継と抗争を起こしたもこの辺りに一因もあるらしい。

ある時稲富直賢が五貫目の玉での町打ちの許可を幕府に求めたが、それを正継が「田付ならともかく稲富には無理だ」と侮辱したという。これによって両者は喧嘩になった。

一度は長坂丹波守などに仲裁され、長坂邸で仲直りの会がもたれた。しかし事が決着して正継が退出しようとした時に長坂から「もっと居ればいい。和解したんだからもう怖いことないだろう」と軽口を叩かれた。これに井上は立腹、脇差で長坂や直賢、他の者まで斬りつけて数人を殺害した。自分自身も幕府の捕り手と闘って、全身に二十三箇所もの傷を負いながら死去する。両成敗で結果として直賢も改易となった。

§コラム 弓対鉄砲 どちらが有利か

現代で「弓と鉄砲はどちらが有利か」と聞くと一笑にふされるかもしれない。「いったい何を言っている？ 弓は古代の武器、鉄砲に決まってるだろう」と。同じ「飛び道具」として見ても鉄砲の方が圧倒的に有利と見られる。しかしそれは何百年もかけて発達してきた現代の鉄砲しか知らないからである。

意外ではあるが、歴史を見ていけば鉄砲が発明されてからも弓は活躍できたのである。新選組の早川藤太郎のコラムでも少し述べたが、状況や使い方では逆に鉄砲が弓に後れを取ることもあった。無敵の兵器ではなかったのである。

火縄銃の限界

火縄銃は、種類としては前装式のマスケット銃に分類される。通常筒先から火薬や弾丸を入れ、索杖で突いて押しこむ。そして火薬を火皿に入れ、引き金を引いて火縄の先でそこに点火するのである。

この装填から射撃までの一連の作業は、どんなに手馴れていても最低三十秒はかかるとされていた。時間をかけて装填している間は無防備で他の武器も手にしにくい。手間取っていると騎兵や歩兵に突っ込まれて蹴散らされるし、弓よりも機械的な不具合が発生しやすい。

これは見過ごせない欠点であり、そのために装填の間の遮蔽物や戦術の工夫が発達することになる。

もう一つの欠点が当時は「滑空銃」という事実である。火縄銃には現代の銃と異なり、銃身内部にらせん状の施条 ライフル が無い。螺旋の刻み＝ライフルは発射された弾丸に回転を与えることで精度と威力を高め、有効射程距離を著しく伸ばす働きがある。これに尖頭タイプの弾 弾丸が椎の実のような形で先が尖っている が使われることでさらに速度と威力が高められているわけだが、当時は円形の弾丸である。前方の大きめの筒先から押し込むために、極端な場合下に傾けたら弾が転がり落ちたり、鉄砲によって弾道も安定しなかった。

一方弓は熟練兵ならば一分間に五、六発、多い時は十発程度も射撃できたそうである。また昔は鎧を貫く威力を得るために重たい矢を使っていたが、戦国時代でも一〇〇メートル程度の試し射ちは珍しくないし、世界史で長弓兵が活躍したことで有名なクレシーの戦いでも最高距離は250mほどあったそうである。（現代弓道では成人男性なら二〇〇m程度は射撃できている。また三十三間堂の射競べでも現代の矢より重い30～40キログラムほどある矢を一〇〇メートル以上飛ばしていたのである。

速射性、射程距離、威力などで考えれば弓もそこまで銃に遜色はない。

宮本武蔵の論考

兵法家宮本武蔵は、戦場での弓の確実な射程距離を二十間 約36m する。対して歴史家によれば50m程度が現実的なところではないかとする試算もある ちなみに火縄銃の狙撃事例では、時に名手もこれ以下の距離で失敗している 。

他にも武蔵は弓の利点をあげ、必ずしも銃より劣るとはみなさない。例えば城攻めには向かないが野戦と塹壕の防衛戦ではむしろ銃より優位だと述べ、速射可能なこと、武器の切り替えがしやすいこと、撃った矢が目に見える、戦場のかけひきに使えるなどをあげている。

武器の切り替えに関しては、後の銃剣の発明の経緯を思い出せば納得がいくだろう。軍事史では銃剣の発明によって鉄砲の欠点が補われたとする。つまり射撃準備が整わなくてもすぐに白兵戦に移れるようになった点が評価されているのだ。

つまり地形や状況にもよるが、熟練した弓兵などは十分に銃兵にも比肩できる戦力になれたたと言えるだろう。戦国時代の動員記録でも、鉄砲が増える中で弓兵も一定数存続しているし、実際に弓の有用性を裏付けるような逸話もかなりある。

鉄砲と弓の一騎打ち

永禄元年 1558 、信長が尾張統一の途上だった時のことである。尾張上四郡に根を張る岩倉織田氏と浮野の地で決戦になる。敵総大将は 親族の織田信賢であり、当初戦は互角であった。しかし犬山城の織田信清が信長の援軍として介入すると信賢勢は総崩れになる。

清州側には信長が十六の頃から鉄砲師範を務めていた橋本一巴が従軍しており、一巴は追撃戦のさなかに敵側に林弥七郎という男を見つける。

弥七郎は近郷の浅野村出身の武芸者で弓と剣術の達人として知られていた。一巴も砲術にかけては名人として天下に名が鳴り響いていた男である。近隣の武芸者同士として二人は見知った間柄であつたらしい。

しかし二人がいるのは戦場である。顔見知りという情は捨て置いて、「弥七郎、勝負せよ」と一巴は挑んだ。弥七郎もまったく引くことなく「承知した」と受けて立った。

ここに歴史的にも珍しい弓と鉄砲の一騎打ちが始まったのだ。

弥七郎は四寸のもの太い矢じりの矢をつがえながら戦場を走る。それを追って一巴も距離をつめた。勝負できるギリギリの距離に来た一瞬、弥七郎は身を翻して神速の矢を射込んだ。しかし一巴もすでに二つ玉（杉谷善住坊も信長狙撃で行った弾二つ込み）を装填済みで、弥七郎が振り向くと同時に銃撃していた。

結果は両者とも一流武芸者と証明するものだった。  
一巴は弥七郎の矢を脇下受けて絶命、同じく弥七郎も弾丸を撃ち込まれ瀕死の重傷であった。

弥七郎はそのまま信長の小姓の佐藤藤八に組み伏せられ、しばし刀で斬りつけて抵抗するも結局首をとられた。

この逸話で注目すべきは、名手同士が撃ち合っても相打ちだったという点だ。  
どちらも一方的な優位は占めていない。

一巴を一撃で絶命させたのはさすが弓の名人である。しかし自分も致命傷に近い傷を負っている。

遠距離で戦ったとしても、当時の鉄砲の性能では有効射程が弓と大差がない。下手に一撃目を失敗すると装填のさなかに矢を撃ち込まれるリスクもある。  
だからこそ一巴もぎりぎりまで距離をつめたのであろう。

この命を賭けた実戦からも、当時の火縄銃と弓の世界がうかがえる。

## 弓と鉄砲を賭ける

もう一つ別の逸話をあげたい。  
黒田長政と立花宗茂の勝負である。

朝鮮出兵の折り、碧蹄館の激戦に勝利して諸将は宇喜多秀家の陣で宴を催していた。  
その際に黒田長政と立花宗茂の間で、鉄砲と弓のどちらが有利だろうかという話になった。

長政は、矢は風で簡単に逸れて正確に当たらない、銃が有利だと言って譲らなかった。しまいにはもう弓は必要ではないとまで主張したという。

しかし弓と鉄砲両方の名手として知られる宗茂は、どちらにも状況に応じた利点があると語った。  
例えば鉄砲も雨では使えないといった欠点をあげた。

どちらも自説を主張して譲らず、そうこうするうちに戦国の世らしくその場で勝負してみようとの話になった。

直家が審判となり、標的として　こうがい　筭（髪結いの道具。外見は簪に似ている　を選んだ。負けた方が相手に武器を譲るという約束である。

ちなみに宗茂の弓の腕前は免許皆伝であり、浅野長政を饗応した時には数十メートル先の鴨や鳥を一矢で落とした話がある。  
また黒田長政も鉄砲の腕前はなかなかの練達の者であった。

技量的にはどちらも大差はないと言ってよい。

しかし実際勝負してみると弓を使った宗茂の勝ちに終わった。

約束通り長政は愛用の名銃の「墨縄」を立花に渡した。器量の優れている宗茂も愛用の「立左」の弓を贈ったという。

ここでも銃は単純に優位は占めていない。また宗茂の考えに共感する同時代の人も居ただろう。  
当時では弓も銃もそれぞれ利点があったのである。

## 隙間を縫う巧みな射撃

慶長五年、出羽国では「東の関ヶ原」とも言われる最上勢と上杉勢の戦いが起こっていた。  
最上側の立て籠もる谷地城は、包囲されて危機に陥っていた。

元より多勢に無勢、谷地城も小城である。  
中でも城の一面では攻め手の鉄砲兵によって、守備側がおびたらしい犠牲者を出していた。

攻め手に優れた狙撃者がいたのが原因で、その男は畑作業で使うもみ臼を防壁として持ち出していた。

構造上身体全体を覆えるだけでなく、底の穴が銃眼の代わりになって射撃できる。  
むやみに接近してくる兵は、守備隊も矢狭間から射ることができるが、臼に身を隠されるとやりづらい。  
しかも相手はやすやすとこちらを攻撃できるのだ。

鉄砲戦術で「土遁」の手法として穴を掘ってそこから射撃する手法は既にあつたが、それだと自由に動けない。  
普通の盾だと身を隠しにくく、射撃の際には自分の身体をさらしてしまう。

農民の使う臼とは盲点となる防御手段で、実際にあなどれなかった。  
臼越しに矢狭間を銃撃されて次々に守備側の弓兵は撃ち取られていた。

しもひでひさ  
そこで　下秀 久配下の大井右近という弓の名手が呼び出された。  
あの厄介な臼に隠れる狙撃兵を何とかできないかという相談である。

右近はじっと狙撃兵の様子を観察した。  
臼の影に隠れて容易に姿を見せない。あれではこちらが攻撃できないのも無理はない。

右近は考えた末に弓を携えて狭間の影でじっと待った。  
目は臼の中央からじっと離さない。

何度か射撃が繰り返され、相手は弾込めを行っている様子であつた。  
装填が終わり、臼の穴が暗くなる。その一瞬であつた。

銃口が穴にさしこまれる寸前、神速で矢を射て臼の中央に叩き込んだ。相手は臼の陰で射たれて倒れ込んだ。

これにより甚大な被害をもたらしていた狙撃者は倒され、一時その方面でも勢いを取り戻したとのことである。

この話には異説もあるが、やりようによって弓もなかなかに対抗できる証拠の一つである。  
戦国期にはこうした鉄砲とよくやりあった逸話も多いのだ。

鉄砲の一番の有用性

それでも銃が普及するうで果たした重要な役割も見逃せない。  
それは性能的なことではない。

鉄砲の圧倒的な強みとして「上達は何十年も必要としない」「身体能力による違いが少ない」といったことである。

弓というのは上達に年数がかかる。一人前の射手になるだけでも容易ではない。  
逆を言えば名人クラスの技量にはそれに見合う素晴らしさもあった。

弓は武器として遠距離を求めたり十分な貫通力を得るには、それなりの弦の張りや矢の重量も要求される。  
その弦をどの程度扱えるかは、個人の筋力体力の違いなど身体的な資質も関係してくる。  
(義経が壇ノ浦の合戦で弓を落として危険を顧みずに取りに戻るシーンがある。これは大将の自分があんな弱い弓を引いてると知られたら恥だという意識に基づく)

時に戦場では何十本、何百本も射るし、それに見合う体力的な持続力や連射に耐える身体も必要だ。  
強弓を十本以上を速射すると腕が張れあがるような感覚になったそうである。  
古代で女性の弓兵が少なかったのもこの辺にも一因があるだろう。

専門の弓兵は、長年の修練で左胸や指が肥大していたとか、右半身と左半身のバランスがおかしくなっていたとの記録もある。  
ちなみに現代の弓道やアーチェリーでも右腕だけ太くなり、シャツに袖が入らないケースもあるとのことだ。

明治時代に旧武士には体を右に傾ける癖があつてすぐに分かったという話　左腰に大小二本の重量があるため、バランスを取るため　を思い起こせば、ありそうな話だ。

その点銃はまだ楽である。  
修練が必要でもモノになるまでそこまでの年数も身体能力もいらない。長時間の使用でも弓ほどは疲労は大きくない。

特に西洋では火縄銃は集団運用が多かった。映画にもよくあるが集団で隊列を組んで動いていくやり方である。  
これだと狙撃練習や標的戦術にもあまり重きを置く必要もなくなり、さらに兵員養成がやりやすくなる。

つまり実地に使える兵隊とする点では、やはり鉄砲の方が手っ取り早い。

銃の速やかな普及の理由の一端もここにありそうだ。

◇ 大名と狙撃

「鉄砲足輕」というように前線でドンパチやるのは下級武士のイメージがあるが、武芸は大名にとっても嗜みであり、戦国では現実問題として関わってくる。砲術も例外ではない。

足利将軍の**義輝**は塚原卜伝に学んで剣術は免許皆伝、暗殺される間際の派手な立ち回りで有名だが、鉄砲にも著しい興味を持っていた。

南蛮流を創始した藤井一二斎について砲術を学んだだけでなく、国友衆を通じて鉄砲の入手に熱心で、細川晴元に鉄砲隊を組織させたりもした。

お気に入りの上杉謙信が腫れ物の病気で伏せていた時は、大友宗麟から献上された化薬調合の秘伝書『鉄放薬方並調合次第』を見舞いに送ったことが記録に残っている。

江戸期、寛政の改革で知られる松平定信も、生真面目な官僚的なイメージと異なり、実際はかなりの武人らしい一面があつたとのことである。

起倒流柔術では同輩の弟子の中で筆頭クラス、弓でもほぼ免許皆伝、居合術も嗜んだという。  
またそれぞれの武術で失われた秘伝を復元させたり、自ら新しい技を開発するなど実力と創造性を兼ね備えていた。

砲術にも熱心で、荻野流をはじめとして四つの流派を習得し、各流派の優れた点を合わせて新しく「三田野部流」という一派まで編み出した。

このように意外にも大名や老中など高位の人物でも、実践的な鉄砲巧者は少なくないのである。

おだ のぶなが  
●織田 信長　　個人でも戦術でも巧み

三郎(天文三年1534～天正十年1582　尾張国)

信長が鉄砲の稽古を始めたのは十三歳頃と非常に早い。信長は鉄砲には非常に熱心であつたのである。  
鉄砲の腕前については次のような記録がある。

天文二十三年　1554　、信長は今川方の侵攻を迎え撃つ。  
当時二十一歳の信長は、今川方の出城である村木砦への攻撃を行った。豊富な鉄砲隊を使い、果敢な力攻めを続けたが敵の抵抗も激しい。

信長の本隊は一番防御の固い南側を担当していたが、城中の鉄砲狭間からの迎撃が激しく、両軍ともに激戦に陥っていた。

そこで信長は「堀端に御座候て、鉄砲にて狭間三ツ御請取りの由仰せられ、鉄砲を取替え取替え放させられ」　信長公記　たという。  
これを自ら銃撃を行ったと読むなら、一番抵抗の激しい狭間をつぶすのに身の危険も顧みず果敢に狙撃を続けたことになる。  
そうした甲斐もあつたか村木砦は夕方までに落城した。

信長は後年の長篠の鉄砲戦が有名だが、普段から鉄砲鍛冶の国友衆を保護したり、旧六角遺臣の滝川一益を鉄砲の腕前を評価して登用したりと、個人の鉄砲技術を評価し戦略的な鉄砲への関心も高く、また自ら狙撃の訓練も怠らなかった優れた鉄砲大名であった。

あさのよしなが  
●浅野 幸長            鉄砲の有難みを知る

（長満    天正四年1576～慶長十八年1613    近江国）

浅野幸長は大名でありながら鉄砲師範の稲富に「天下一」と絶賛されるほどの腕前があったという。幸長が一番鉄砲のありがたみを感じたのが、朝鮮出兵の時だったと言われる。

前半では優勢だった日本軍も明の来援と半島住民の武装蜂起に悩まされるようになっていた。慶長二年（1597の）二月から日本側は蔚山に籠城して援軍が来るまで持ちこたえねばならなかった。寒冷な気候と食料の欠乏に苦しむ中、明と朝鮮の連合軍五万人以上と激戦に陥る。

この一戦では城中の将に加藤清正や幸長など鉄砲の名手が数多く存在し、鉄砲が非常に存在感があった一戦であった。

ある夜、城外の陣営に居た浅野は夜間の敵の奇襲で防衛戦に追い込まれた。敵は三方に分かれ、密集した隊形で襲ってくる。幸長ら日本側は正確な射撃によって敵に打撃を与えたが、西北の柵が突破され、一時は幸長自身も敵と戦った。命をとりとめたものの、馬を失い徒歩で城内に戻ったという。

籠城戦でも激戦が続き、一時は撃って出て敵の攻勢を中断に追い込む。

しかし敵将は再度三手に分かれて城を包囲し再び危機に陥ったという。この危機を救ったのがまたもや鉄砲であった。

清正、幸長ら大将クラスも一兵士となって城壁から狙撃を浴びせ続ける。射撃が正確であったため明軍も侵入に成功できず、しまいには将の李覲が本山弥三郎に射殺されるなど、多大な被害を出す結果となる。

結果として大軍は日本側の鉄砲の運用と防御に阻まれ、日本側の援軍到着によって明と朝鮮連合軍は敗退に追い込まれた。

戦後幸長は鉄砲の師である稲富一夢に手紙を書き、「あなたの所で稽古したおかげで、よく鉄砲を打てて唐高麗にまで鉄砲の腕を響かせることができた。家中のものはみな鉄砲の練習させている」と感謝の言葉を述べている。

半島滞在時の父の長政への手紙でも「こちらに来るなら何も準備はいらないから、とにかく鉄砲を少しでも多く持ってきたがよいです」との意味合いの文面が残る。

堅城に豊富な鉄砲と優れた狙撃手がそろっていると、大軍が数の力でせめても勝利は難しかったのである。

とくがわいえやす  
●徳川 家康            幕府創設者は実戦でも有能

元信（ 天文十一年1543～元和二年1616    三河国）

とくく藩主の記録などは、過剰に美化されてどこまで信用できるか疑わしい。特にそれが幕府二百年の創立者ともなれば格別である。

家康は江戸時代において神格化されていて、個人的な武勇の話も大げさなきらいがあるが、詳細にたどっていくとそれなりに武芸達者だったようである。

砲術に関しては、最初は美濃の斎藤内蔵助の門人に学び、後年稲富一夢を庇護したのが縁で稲富流を習得し免許皆伝まで至った。

浜松城に居る時に五、六0間（約400メートル）ほど離れている櫓上の鶴を狙撃して命中させたとか、鳶を何羽も続けて撃ち落とせた、周囲が誰も当てることのできなかった的の中央に命中させたなどの話も伝わる。

さすがに多少の誇張も含まれていようが、剣術も新当流の皆伝、弓術は竹林派の免許、馬術は大坪流と八条流共に印可皆伝、水術も一流の域に達していたと言われる。実際に『信長公記』にも前に立ちふさがった武田の者を騎射で何人も射倒した逸話が掲載されているのだ。

豊臣家に圧力をかけた老獪な政治家としての家康や、やや肥満した晩年の図像（若い頃は痩せていた）のイメージから、猛将や練達の武芸者というイメージは乏しいが、実像はやはり戦国に生きた武家の棟梁であったようだ。

もうりたかまさ  
●毛利 高政            一流に数えられた名手

勘八郎（ 永禄二年1559～寛永五年1628    尾張国）

毛利高政は、秀吉の近習から才能を認められて取り立てられた。秀吉の中国大返しの時に高松城に入り人質となる。一説には秀吉の妾の子という。元は森姓だったが、人質の時代に毛利輝元に気に入られて名字をもらい、佐伯毛利家の始祖になる。

幼い頃から武芸をたしなみ、特に砲術に才能があったとされる。その熱心さを伝える話として、青年時代に鉄砲の練習に使った弾薬が帆船一艘分ぐらいにもなったというのがある。

鉄砲の技量だけでなく、砲術全般にも知識があったようで、朝鮮出兵の際は蔚山の籠城戦で「閻魔王」と名づけた大筒を使い、遠距離にも関わらず正確な砲撃で敵を

混乱に陥れて勝利に貢献したという。

大阪の陣では東軍に属し、大阪城を「四海波」と名づけた大筒で正確に攻撃し、功績を立てた。

自身は二万石の大名でありながら砲術を体系化し、その技量から天下に「伊勢流」として知られる砲術の大家ともなった。

砲術の教授法にも才能があったそうで、仙台藩主の伊達忠宗も自ら弟子入りして免許皆伝に至っている。  
高政の指導のおかげで忠宗は十五間　約二十七m　の距離で下げた針に命中させられるほどの腕前になったという。

とくがわりあき  
●徳川 斉昭　　一日に射撃訓練千発

（虎三郎、敬三郎。　寛政十二年1800～万延元年1860　常陸国）

徳川斉昭は常陸水戸藩の第九代藩主であり、將軍慶喜の実父でもある。  
「烈公」として仇名されるほど独特のカリスマ性と行動力があつた。

藩政改革では、従来の身分にとらわれず、藤田東湖、安島帯刀、武田耕雲斎など有能な人材を登用し、幕末の騒乱の中で大老井伊とも対立した。

斉昭は武芸にも熱心で、自ら常山流薙刀術を創っただけでなく、九歳の頃から十刃筒で砲術にも習熟し、時には早朝から夕暮れまで一日千発も銃撃の稽古を行ったという。

藤田東湖は『烈公行実』では「衆人皆其の精緻に驚き、是より本藩諸士往々公之為す所に倣い、鉄砲を研究し、百発百中の者有るに至る」と藩への教育的影響も認めている。

また自分でも砲術一派を創始し「神発流砲術」と名付けた。

折しも幕末で外国の脅威も高まっており、斉昭は「狩」の名目で大規模軍事訓練を行ったり、寺院や地蔵の金属までも使って砲弾や砲を製造した。

こうした行為が井伊大老に目を付けられ、方針の違いをもつて最終的に永蟄居を命じられるが、藩主ながらもかなり武断的な人物であつた。

## ◇狙われた大将たち　　今に残る狙撃伝説

現代の狙撃ではまず高級指揮官、連絡将校など「すぐには取替がきかない」相手が狙われやすい。  
そうすることで戦況に強い影響を及ぼすことができるためである。  
日本の合戦でも「大将首」は狙撃でなくとも価値のあるものであつた。

名のある將軍や独裁的な大名ほど、その権力が失われると影響も大きい。近代に何度も独裁者の暗殺が図られているのも同じ理由だ。

日本に火縄銃が登場すると、鉄砲を使った狙撃事例が増えてくるのも当然と言えよう。

有名大名が狙撃の標的となった話は多い。虚実取り混ぜていくつも残る。

武田信玄が三河の野田城の攻略にあたつた時のこと。  
城内から毎晩美しい笛の音　尺八とも　が聞こえてくる。ついその音に誘われて近づいた信玄が、待ち構えていた鳥居三左衛門に狙いすまされて銃撃され、その傷が元で志半ばで死去してしまった……  
これはしばしば講談で取り上げられる有名な逸話である。だがこれはあくまで伝説であつて信憑性は薄いという。

秀吉も弓だけでなく鉄砲での狙撃の標的になった逸話が残る。  
九州征伐の折に、豊前街道の八丁峠を通過していたところ、松浦党の残党の波多親らに輿を狙撃されたという話が現地で伝わる。

戦国最後の覇者、家康も同様である。  
関ヶ原に向かう途中、岐阜の揖斐川付近で西軍に狙撃され、危機一髪で近くの屋敷に逃げ込んだ一命を取り留めたという。  
地元に残されている伝承である。

また三河の一向一揆の際にも狙撃されたが、分厚い南蛮胴を着込んでいて助かつたとか、彦根で旧真田の遺臣に狙撃され、犯人が井伊直政の差し金という告白をしたがそれを謀略と見抜いた話など、小さな真偽不明の逸話まで含めると様々である。

ここではなるべく信ぴょう性の高いものを取り上げていきたい。

みよしよしかた  
□三好 義賢　　火縄銃よる初の総大将の戦死

●往来右京？　根来衆？

下克上の世は將軍といえど例外ではない。

ながよし  
三好 長慶は將軍の義輝を殺しただけでなく、管領の細川晴元と対立し、和議の席で晴元とその子信良を城に幽閉してしまう。

細川家の将兵は、六角義賢や長慶との対立していた畠山高政と連合を組んで討伐の兵をさしむけてきた。

畠山高政に自分の岸和田城を包囲されたため、長慶は救援に弟の義賢を総大将にして現地に派遣した。  
両軍は小競り合いを繰り返したあげく、久米田寺周辺で激突する。  
貝吹山城に三好側が布陣し、そこに畠山の軍勢が攻勢をかける形であつた。

高政は春木川を越えて攻勢に出てくるも、三好軍の弓隊に苦しまられ、前線を突破できない。結果として背後に川を背負う形でじりじりと防戦に追い込まれた。

畠山軍は粘り強く防御したが、次第に中央の第一陣や第二陣が押され始めた。そしてそれに誘われる形で、三好側の前線の一部も突出する。自然に前線は畠山側に取り込まれ、自軍との距離が開いてしまった。

畠山の第三陣はそこを見逃さない。突出する三好勢の前線背後に回り込もうと進撃する。

義賢の反応も早く、それを防ぐために後詰と本陣から兵を引き抜いて阻止を図った。これが結果として致命傷になる。本陣が馬廻りだけで手薄になったのだ。

実は畠山側は紀州の根来衆に支援を仰いでいたのだ。根来衆は貿易の関係で鉄砲に一早く接しており、粒よりの鉄砲隊で有名だった。

一瞬の隙をついて根来の鉄砲隊が義賢の本陣背後を急襲する。鉄砲巧者が多い根来衆の狙いは正確だった。迎撃しようとする三好の馬廻りは次々と撃ち倒されていく。

焦った義賢は騎乗し、僅かな手勢とともに根来衆に突っ込んでいく。

その好機が見逃されるわけもない。根来の鉄砲の名手、往来右京は義賢を捕捉しじつくりと狙いを定めた。その高名にたがわず、一撃で義賢は馬から崩れ落ちた。しかもそのまま襲撃され首まで取られてしまった。※

総大将が戦死するという最悪の事態に三好軍は総崩れとなる。義賢の馬廻りや近習も義賢の戦死に衝撃を受け、ほぼ全員が根来衆らに切り込んで討ち死にしたという。

義賢は長慶に四国の統治を任され、三好の分国法の制定に影響力があつたとされる有能な武将であつた。その喪失は長慶と三好家にとっても大きな打撃であつた。

一連の戦いで三好側は一族の有力な部将を失い、嘗て「日本の副王」とまで称された影響力を喪失、以後衰退を強めていく。

※ 一撃で射殺されたという話から、既に銃撃されて傷つき落馬していたのを、往来右京に襲われ、刀で抵抗するも首を取られたという説もある。 他にも槍で馬から突き落とされて殺された話など諸説　。）

もしこれが通説通り狙撃による戦死なら、日本史上初めての火縄銃による総大将の犠牲者になるそうである。

- 往来右京
　正確な経歴は分かっていない。
　資料の断片的な記述によると、若い時に根来寺に入って武芸の訓練を受け、頑健で強力な法師として名を知られて紀州の争いごとに参加していたという。雑賀衆の佐武伊賀守と戦って討ち取った逸話が残る。

みむらいえちか  
□三村家親　　～やって来た兄弟の刺客～

えんどうきょうだい  
●遠藤　兄弟

- ひできよ
　・秀清( 又次郎　河内守　生年不詳～慶長九年1604　阿波国)
　としみち
　・俊通( 喜三郎　修理亮　天文二年1533?～元和六年1619　阿波国)

遠藤家は生国は阿波国、諸国を転々としたというのが最終的に宇喜多家に仕える。

遠藤兄弟は勇敢かつ鉄砲の名手であつたとされ、諸国遍歴の経験から他国の事情にも明るかつた。過去に備中に滞在した折、現地の統治者の三村家親の顔も見知っており、それが宇喜多秀家から大任を預けられるきっかけともなる。

当時勢力を伸長させていた宇喜多家は毛利と衝突を重ねていた。毛利側は備中松山の城主、三村家親に命じて美作の三星城を攻撃させていた。

宇喜多直家には、正直手ごわい三村家親とは正面衝突を避けたい気持ちがあつたという。

そこで策が練られて秀清が呼ばれた。「美作に侵入して三村を討ち取ってほしい」極秘の大仕事であつた。秀清の顔も緊張で引き締まる。

秀清は射撃に長け、三村の顔も見知っている。刺客としてうってつけだと説得された。

大任に秀清は勇み立った。もし失敗した場合は生きて帰れない。残された家族の世話を頼むと直家も快諾する。

兄から話を聞いて弟の俊通も立ち上がった。命懸けなら二人でやろうと兄を説得する。

二人は目立たないように一尺二寸の短筒を手に入れて、家親のもとに向かう。家親は山寺の興福寺に滞陣していた。

伝説では以下のような経緯である。

兄弟は夜にまぎれて警護の兵を避け裏の竹林から忍び寄る。

すると遠目に屋内の柱によりかかる三村の姿を認めることができた。

はやる気持ちを抑えて兄の秀清は鉄砲を取り出したが、なんと火縄が消えてしまっていた。なんたる失態かと呆然としていると、弟が火縄を手取る。



そのままだが堂々と寺の警護の中に入っていき、かがり火の炎を羽織の裾につけ、あまつさえ周りに「しっかり見回りを」と声をかけて戻ってきた。

大胆不敵なわざであった。  
弟の胆力のおかげで秀清は火縄を手に入れることができた。  
そのまま三村のいる部屋に接近し射程距離内にとらえる。  
射撃の名手である。どれほどの距離が必要か、射撃の具合も十分に飲み込んでいる。

思い切って忍び寄って家親の至近距離まで近づき、一息に銃撃する。  
轟音とともに弾丸は胸を撃ち抜き、周囲は大混乱に陥った。

そのまま兄弟は捕縛されることもなく逃走する。  
しかしこれほど大それたことをしたというのに、追手もやってこない。  
様子を確かめるも思ったほどの騒ぎにもなっていない。

途中で秀清が鉄砲を落としたことに気付き、取りに戻っても無事であった。

数日後、三村側の軍勢は引き上げを開始する。  
しかし総大将が撃ち倒されたはずなのに、軍は整然としまつたく混乱も見られない。

この事態に直家も暗殺に成功したという兄弟の報告を疑いはじめた。

実は裏事情はこうであった。

家親が狙撃されて死んだことを知ると、三村家の人々は浮足立った。  
しかし重臣の三村孫兵衛が慌てふためく人々を制し、情報が漏れないように統制を図った。

大将がやられたと知られば軍勢も浮足立つ。混乱した中で慌てて兵を退けば、城方から追撃されて壊滅する危険性がある。  
そのため表面は何事もなかったように取り繕うのが大切だという主張である。

家臣たちも納得し、家親は体調が悪いという名目で軍勢を引き上げさせた。  
被害を最小限度にとどめることができたのである。

撤退が完了してからようやく家親の死は公表された。  
ここで遠藤兄弟も大いに賞され、兄の秀清は千石の知行と「浮田」の名を与えられ城持ちとなった。また直家から「家」の偏諱ももらう。  
以後兄弟二人とも宇喜多家の有力家臣として直家の子の秀家の代まで仕え、加増も受けた。

これが記録された鉄砲による狙撃事件として史上初である。

ちなみに三村家親を撃ち抜いた弾丸は、後ろの柱をも貫き、後々までその痕を見ることができたという。

おかみはるすけ

□岡見治資

天文元年1532?～永禄十二年1569 常陸国)

ねごろほうし おおくらぼう

●根来法師 大蔵坊 新兵器による勝利

(生没年不詳 紀伊国?)

突如響いた轟音に兵士たちはどよめいた。

筑波山の東方、手這坂には三千余りの兵が一方の旗の下に集結している。  
本来、常陸の名族である小田氏治の軍勢は、近年煩わしく自領に侵入してきては挑発行為を繰り返す佐竹に反撃の一撃を喰らわせるはずであった。

眼前には、自分らから離反して敵に回った太田資正らの軍勢。総勢六〇〇程度しかいない。

これまで佐竹の乱暴狼藉を許してしまい、自城も包囲されている。  
防戦からの反撃、裏切り行為に対して大勢で報復の一撃を加える手はずであった。  
大軍で鎧袖一触、敵根拠となる二つの城も勢いをもって陥れる積もりであったのだ。

敵前面に居た兵たちが何人か倒れ伏している。幾人かはもがき、幾人かは既に事切れている。  
弓矢ではない。何が起きたのかさっぱり分からない。

その時脳裏に兆したものがあつた。  
(まさかあれが噂に聞く鉄砲というものではないか。確か北条家中にはその新しい武器が伝わってるということだが……)

東北の奥地、中央から交通の便は遠い。鉄砲が渡来した九州や畿内からは程遠い。  
近辺ではまだそうした兵器は使われていなかった。

一般の兵たちとなるとなおさらである。  
わけの分からぬ騒音がしたかと思うと、目の前の仲間たちが何人も倒れ苦しんでいる。  
状況が理解できずにパニックに陥った。

大軍の勝ち戦のはずであった。それが勢いを削がれて逃げ腰になっている。

再度の轟音が響く、何らかの物体が飛来したもや兵たちが倒れる。  
やはり何かがある。  
恐怖にかられて逃亡する足軽たちが続出する。

鉄砲を持ち込んだのは、真壁城の真壁氏幹の軍勢であった。

元は太田資正らと同じく小田氏治に帰属していた国人である。今は佐竹と手を結び、太田らと連合して宇治に敵対している。後年「鬼真壁」との異名をとるほど武名をあげる人物であり、武器への関心も強い。

狙撃を行ったのは、戦に備えて召し抱えていた根来の鉄砲衆であった。

勢いを削がれて、軍勢は崩れようとしている。  
「怯むな！ 進め！」  
将たちは兵を叱咤激励して支えようとする。  
何しろ数でもってすれば自軍の方が圧倒的に有利なのだ。怖れずに進めば勝機はある。

その時であった。  
根来衆の一人、大蔵坊が鉄砲を構える。  
目の前には盛んに叱咤し、迎撃しようとする立派な武者姿の男。  
あまりに警戒が薄すぎた。この土地の者は鉄砲の威力を十分に知らない。

大蔵坊の放った弾丸は正確に武者の胸板を撃ち抜いた。  
相手は胸を押さえて馬から転がり落ちた。  
近習らしき者たちが慌てて駆け寄るが、即死であった。

男の死に陣営は動揺をきたして混乱し始める。

戦の場にあつてそうした隙が見逃されるわけではない。  
勢いに乗って真壁の兵たちは小田方に斬り込んでいく、

寡兵ながらの圧倒的な勢いに小田方は崩れた。雪崩をうったように退却に追い込まれた。

根来法師大蔵坊に撃たれたのは他にもない。  
岡見治資。小田氏十三代当主の小田治孝の子で谷田城主でもあった。

そのまま小田氏は戦線を崩されただけではない。  
居城も陥れられ、以後没落していく。

鉄砲という新式の兵器が戦に影響を与え、狙撃によって勝敗すら左右する力があるのが証明された一件であった。

□ 織田信長 稀代の権力者を狙撃した男たち

すぎたにぜんじゅぼう

● 杉谷 善 住坊 悲愴な報復を喰らった暗殺者

（生年不詳～天正元年 1 5 7 3 伊賀国？）

元亀元年 1 5(7 0 五月)十九日、善住坊は千草越の岩陰に潜んでいた。  
この道は一部の行商人などしか利用しない難所である。

越前の朝倉攻めで信長は浅井に裏切られ、すんでのところで包囲殲滅されるところだった。  
命からがら落ち延びてくる途中では、通常の街道は使えない。岐阜に戻るにはこの裏道しかなかった。

将軍や公家をもないがしろにし、武力で天下を統べようとする信長は、旧勢力からも大きな脅威に見られていた。

善住坊の手元には愛用の火縄銃。  
この銃で天下の危険人物を取り除けと申し渡されている。

この狙撃が成功すれば間違いなく天下は変わる。

蹄の音が空気を乱し、善住坊は息をひそめた。  
鉄砲を握る手に力を込め、ゆっくりと善住坊は身体を乗り出した……

杉谷善住坊。  
通俗的なフィクションにもよく取り上げられ、おそらく戦国の狙撃者としては一番有名かもしれない。

相手が信長という有名人であることや、物陰に潜んでの要人暗殺という近代的なスナイパーを髣髴させること、また最期の悲劇的な逸話も一役買っているのかもしれない。

ただ、ここまで有名でありながら、意外にも本人の経歴などは分からないことが多い。

当時から「飛ぶ鳥を狙撃して落とすことができた」「国一番の名手」など「鉄砲の名人」として名があつたのは確かなようである。

だが生年や生国も確実ではない。

忍者という説も根強く『甲賀郡誌』では甲賀五十三家の一つ、杉谷家の出身で <sup>すぎたにとようじ</sup> 杉谷 与藤治<sup>\*</sup>の子とする。甲賀で苗字帯刀を許されていたのは古くからの名家で、その中でも「甲賀の二十一家」の一員であったという。

『信長公記』や『総見記』では比叡山の僧侶とする。『改正三河風土記』では伊勢の明宝院出身の悪僧としている。

鉄砲の腕前や善住坊という名前、僧関係という連想から根来や雑賀衆などの推測もある。  
信長を狙った大罪人でその悲愴な最期から、当時の関係者が怖れて痕跡を抹消した可能性もあるかもしれない。

決行の日、善住坊は万全を期して弾丸が二つ連なる「二つ玉」で狙撃を行ったとされる。  
これは弾が二つになる分、命中率は高まる。しかしその分火薬の量も増やさねばならず射撃の精度も落ちる。

暗殺が失敗に終わったのもそれが原因だったのかもしれない。

信長は騎馬の一团を護衛を伴って近づいてくる。  
十三間ほどの距離　約23メートル　まで善住坊は引きつけた。当時の火縄銃でも十分に有効な射程距離内である。  
「甲賀忍者一」との評判の善住坊には容易な訳のはずであった。

運命の一瞬であった。  
信長の姿を視界にとらえ、引き金に力を入れた。  
轟音が響いて周囲の鳥が飛び立つ。

硝煙が立ち上る中で信長は無事であった。馬上で驚愕の表情を浮かべているだけであった。

すいか  
誰何する声が怒声とともに響く。舌打ちして善住坊は林の中に逃亡した。

まったく外れたわけではない。  
弾丸は信長の羽織の袖を貫いただけだとも、服の下に入れていた餅が命を救ったなどともいう。  
いずれにしる信長の生命どころか、手傷程度さえ負わせられなかったのが史実のようである。

悪運が強かったのか、二つ玉がよくなかったか、稀代の権力者を目の前にして善住坊も上がったか、本当のところは分からない。

信長は激怒して犯人の徹底搜索を命じたという。  
三年の間、善住坊は逃げ回った。しかし勢力拡大する信長には地場勢力が次々に寝返る。

善住坊の情報は続々ともたらされ、遂に近江の阿弥陀寺で領主の磯野員昌によって捕えられてしまう。  
織田側に引き渡されてからは激しい拷問を受け、最後は直立した状態で土中に埋められる。  
しかも処刑の方法は竹のノゴギリでもって十日間ほどかけて首を引かれるという悲惨なものであった。

善住坊が狙撃を実行した動機は、六角義賢の依頼というのが有力である。  
他にも身内を戦で信長に殺されたとか、信長の首に賞金がかかっていたなどの話もある。

宣教師のフロイスはこの鋸による処刑に触れた後で、「この仏僧は書状でもってある一つの城を信長に敵対させようとしていた」と記している。

六角義賢も伊賀の者を使って一揆の扇動も行っていたとされる。善住坊の所業も、当時の反信長の大きな枠組みの中で捉えられるべきなのかもしれない。

現在、東近江市にある雨乞岳の麓には、善住坊が潜んだと伝わる「隠れ岩」が残されている。

きど や ざ えもん  
●城戸弥左衛門　　信長を二度狙撃した忍者

（生年不詳～1581？　伊賀国？）

忍術書の秘伝書でもある『萬川集海』において、通称「音羽の城戸」は忍術の上手の一人にあげられている。  
十一名人の一人であり火縄銃の名手としての評判があったという。

伊賀の音羽出身とも言われ、忍者らしく別の素性があるという説もあるが、定かではない。

中忍　下忍をとりまとめて任務を行ういわば中間管理者。統括者である上忍から命令を受ける　であり、熱心な一向宗の信徒であったそうだ。

そのためか信長の残虐な一向宗弾圧や伊賀忍者の圧迫などに強い憎しみを抱いており、石山本願寺攻めに伴い、本願寺顕如らから信長暗殺の依頼を受けた。

天正七年　1579　、信<sup>ぜ</sup>長は京都に向けて近江の膳所を通行中だった。  
馬上の信長には伴の者が唐傘をさしかけている。城戸は森の中に潜んで慎重に銃口を向けたが、名手の放った弾丸は惜しくも傘を破壊しただけであった。

そのまま追跡を受ける身となるが、森の中からの狙撃であったため氏素性はばれずにすんだ。

並の狙撃者と違うのはここからだ。  
忍術の名手としても名のある城戸は、隠形の術も会得している。姿をつくろうぐらい造作ない。  
なんと大胆にも菓子を献上すると称して信長に近づき、自ら様子を探りにいったのだ。しかも気づかれてないと分かると、自分に襲撃事件の犯人探索をやらせてくれと申し出たのだ。

信長もさすがに目の前の男が狙撃犯とは気付かない。逆に感謝して調査を頼んだという。

二回目の狙撃は天正九年　1581　にめでさかのぼる。  
信長の伊賀討伐によって忍者のふるさは踏みじられ、抵抗する者は虐殺されてしまった。故郷をめちゃくちゃにされて忍者らも黙っているはずがない。  
制圧した伊賀を検分に来る信長を、城戸は再び標的に定めた。この経緯は菊岡如幻『伊乱記』にも残されている。

信長は近習を引き連れて伊賀の一の宮神社　現・(敢国神社　で)休息していた。  
城戸はこの前の失敗を鑑みて、原田壱三と印代村の印代判官という二人の協力者を引き連れていた。武器も大型の大鉄砲を準備する念の入れようである。

信長は大木の影で一息入っていた。油断しているその一瞬がチャンスであった。  
憎い侵略者めがけて三人は一斉に銃撃した。しかし吹き飛んだのは周りの七、八人、信長はまたもや悪運強く無傷だった。

弓を取って怒号を上げる護衛たちの手を逃れ城戸は姿を隠す。しかし配下の宮田某によって裏切られとうとう捕縛されてしまう。

暗殺の嫌疑で激しい拷問を受けるも城戸は雇い主の顕如らの名前は絶対に出さず、忍者としての矜持は守った。

監視の隙を見て一度は逃走するも、信長に寝返った忍者たちの激しい追跡を受ける。包囲されてからも奮戦したが、もはや敵わずと判断すると自害して果てた。

おかよしまさ  
●岡　吉　正　　信長に傷を負わせた雑賀衆

（太郎次郎　生没年不詳　紀伊国）

对本願寺戦は信長の生涯の中でももつとも苦勞した戦ではないか。

現在の大阪城のある地に建てられた石山本願寺は難攻不落の城塞でもあった。

法主の顕如もただの僧侶ではない。  
外交手腕と権謀術数に長け、各地の諸大名と盟約を結んだり、信徒たちに一揆を扇動したりと戦国大名と変わる所はなかった。

特に一向一揆は信仰の支えのある強力な軍事集団でもあり、その死をも怖れぬ強硬な戦闘姿勢は名のある戦国大名でさえ手を焼いた。また構成員には根来や雑賀など名うての鉄砲集団も揃っており、信長を悩まし続ける存在であった。

天正四年　1576　、毛利家に客分として居る將軍義昭と結んで顕如は再び蜂起する。  
信長は光秀を大将に石山に侵攻させ、本願寺を包圍させた。

しかし本願寺側も毛利などから海上経由の補給を受け、備えは十分であった。逆に撃って出て光秀の軍勢を天王寺砦に追い込む。

光秀の援軍要請に信長は急遽招集した三千で現地に急行する。自ら包圍を突破して城中に合流した。それでも城外の分厚い包圍は変わらない。  
五月七日、本願寺側の意表をついて信長は外に奇襲を敢行する。  
この読みは正解であった。長期の籠城戦になると油断していた本願寺側は大混乱に陥る。ついに分厚い包圍を解いて退却を開始した。しかしただでは退却しなかった。  
雑賀衆は戦国最強の傭兵とまで呼ばれた男たちである。従軍する者にも鉄砲の手練れは数多い。その中に名人とまで呼ばれた岡吉正が居た。

混乱する戦陣の中、信長は陣頭で指揮をとって前進し続けていた。周りの本願寺勢が退却する中で、岡は大木の影に潜んで冷静に距離を計っていた。

傭兵としても手馴れたこの鉄砲の名手は、勢いに乗って前進する信長を指呼の距離に捉える。そのまま十分に引き込んでから銃撃した。

さすが名手であった。戦中の混乱にも乱されず、弾丸は信長の右腿を撃ち抜いた。

急を聞いて家臣らが信長の周りに集まる。味方の軍勢も混乱に陥り、それ以上の追撃戦も不可能であった。

一撃は浴びせたものの、傷は致命傷とまではいかなかった。  
悪運強く信長は生き残り、再び本願寺の鎮圧戦を続けることとなる。

この第二次の石山合戦では、先んじて三津寺攻めを行っていた大将の塙直政が、鈴木重秀率いる雑賀衆の伏兵に狙撃されて戦死しており、からくも雑賀衆の鉄砲の腕前を思い知らされる一戦ともなった。

信長が本願寺勢力を無力化するまでには十年以上の月日がかかり、紀州の雑賀衆を軍門に下すには秀吉の代まで待つ必要がある。

とよとみひでよし

□豊臣 秀吉　天下人を倒そうとした男たち

とみおかとうたろう

●富岡 藤太郎　狙撃も拔群な鉄砲鍛冶

（国友　生没年不詳　近江国？　）

国友衆は戦国の優れた鉄砲技術者たちであった。  
堺と同じく鉄砲を重視した信長の重要な仕入れ先の一つであり、対武田戦を始めとして数々の鉄砲は、国友衆の製造による。

鉄砲づくりを主な生業とする以上、自然と諸般の鉄砲技術にも詳しくなる。  
また鉄砲の売り込みや質を保証しようと思えば、射撃の程も示して見せねばならない。

自然と射撃に長けた人物も輩出されてきた。  
そこは根来衆や雑賀衆から鉄砲巧者が出てきたのと似ていた。

国友の藤太郎は鉄砲鍛冶の技術者だけではなく、射撃の名手としての呼び声も高かった。

信長と浅井の抗争中、宮部継潤は織田方に寝返り、野村兵庫守高範の守る国友城の攻略に押し寄せていた。

両軍は姉川付近で激突する。  
戦況はじりじりと宮部側の優勢となっていき、野村側は退却の瀬戸際に追い込まれていく。その時であった。勢いにつて突出してきていた宮部が一発の銃声とともに落馬する。  
太腿から大量に出血して動けない。  
これぞ国友随一の鉄砲の名手、藤太郎の放った一撃であった。

危うく宮部はそのまま藤太郎に首を取られるところだったが、側近の友田近右ヱ門が藤太郎を突き倒して救出し、後方に連れだしたため危うい所を免れた。

この功績で藤太郎は野村高範の娘を貰い受け、以後富岡藤太郎と名乗るようになる。

藤太郎が圧巻なのはさらに秀吉にまで狙いを定めたことである。  
元龜二年　1571　の五月、秀吉を多田幸治山の近くで狙撃したが、弾丸は命中せずに秀吉は命脈を保ったという。　　1＊

ただ興味深いのはこれから後も秀吉の元で国友衆は鉄砲の生産を続け、藤太郎も格別処罰されていないことである。

狙撃事件が事実であるなら、結局真相が判明しなかったのか、秀吉が信長と違って執拗に犯人を追い求めなかったか、統治者としての器量もあるのかもしれない。

＊ 1 琵琶湖において狙撃したという話もある。

●中島晴時 歴史を変えようとした一弾

(元亀元年1570～天正十八年1590 陸奥国)

戦国時代の陸奥国の白河結城氏の家臣で、中島晴常の子で中島晴辰の弟にあたる。

北条の小田原城を陥落させた秀吉は、天下統一の最後の仕上げとして小田原に参陣しなかった奥州大名の制圧、いわゆる奥州仕置を行う。

伊達家に服属していた白河結城氏は伊達政宗に秀吉への贈り物を託していたのだが、許されなかった。  
戦後に改易となり、父方は結城氏の庶流につながる中島氏も追放となったのだ。  
当主であった晴辰は落ち延びる途中で落ち武者狩りの者に討ち取られた。

弟の晴時はそのまま唯々々と秀吉に屈服する気はなかった。  
奥州仕置の途中、会津に向かおうとする秀吉を勢至堂峠の馬尾滝で待ち伏せた。  
手ずから狙撃して怨みを晴らそうと思ったのだ。

もしこの時事実上天下人となっていた秀吉を撃ち倒すことができていれば、東北だけでなく日本の歴史も変わっていただろう。

しかし秀吉はまだ幸運に恵まれていた。  
晴時の放った弾丸は秀吉にはかすりもせず外れてしまう。晴時はその場から逃亡し、名前を隈井に変えて蒲生氏郷を頼る。

後に東北では九戸政実の乱が勃発した。  
これには反中央の意味合いもあり、晴時も身を投じた。しかし秀次を総大将とする大軍が派遣されてくるとひとたまりもなかった。  
あっけなく乱は潰され戦の渦中で晴時もそのまま討ち死にした。

晴時の子晴俱は、相楽氏に預けられていたために無事で血脈は絶やさずにすんだ。  
子孫は水戸藩などに仕え江戸時代を生き延びた。

芭蕉と親交があった俳人、相楽等躬は子孫と言われている。

なんぶのぶなお  
□南部 信 直

亀九(郎 田子九郎 天文十五年1546～慶長四年1599 陸奥国)

くどうすけつな  
●工藤業 綱 暗殺相手に召し抱えられる

成綱( 右馬介 生没年不祥 陸奥国？ )

九戸城は重包围されていた。  
この奥州の奥地には豊臣秀次を総大将として六万もの大軍が集結している。  
従軍する将には石田三成や浅野長政など錚々たる有力者たちまで居るのだ。

籠城する九戸政実らは陸奥を統べる南部氏の一族にすぎない。  
それでも南部信直はその勢いに手を焼き、中央の秀吉らに助力を仰いだ。

そもそも発端はその秀吉らとの関係であった。  
秀吉は中央を制し、小田原に侵攻し奥州仕置きも開始するに至っていた。東北の各現地勢力は去就をどうするかを迫られていた。

南部信直は、元より豪族連合の色彩が強い南部氏の中で支持されて家督を継いだにすぎない。  
そこに不満を持たれている中で、中央の秀吉に臣従することを選んだのである。

一族の有力者で跡目争いをしたこともある九戸政実は不満を爆発させ挙兵に及ぶ。

数では劣りながらも、九戸の兵は強兵で有名だった。  
身内同士の争いなので、他の一族の者もいまいち本気で協力してくれない。

手こずった信直は秀吉に助力を求めたわけである。

九戸城にこもる兵たちは勢いが盛んであった。  
その中でも城内には工藤業綱という鉄砲の名手が居ると評判になっていた。

噂を耳にした蒲生氏郷は城中の工藤に呼びかける。  
「そなたはこの傘を撃てるか！」  
従者に大きな傘を開かせていた。  
工藤は進み出る。両者の間の距離は百間 約1(80m ほど)の距離がある。

傘の様子を眺めてから業綱は問い返す。  
「どこを撃てばよい」  
「ここだ」  
氏郷は傘の骨と柄が合わさる島の部分を指差す。

工藤は黙って銃を構える。  
いくら名人と言っても距離がありすぎるのではないか。失敗すると武士の恥になる。  
そう危ぶむ声もあったが気にしない。

一瞬の轟音と同時に傘は吹き飛び、見事傘中央の島の部分が撃ち抜かれていた。

これには一同も敵味方を超えて拍手喝采、古的那須与一にも劣らないと讃えられた。

こうした華々しい場面はあったが、戦況そのものは南部氏の勝利に終わる。  
いかに九戸側の兵が勇猛であっても多勢に無勢であった。  
最終的に業綱の主君の九戸政実らは降伏、斬首されてしまった。

しかし工藤業綱はそこでは終わらなかった。  
愛用の銃を片手に南部信直の所領に潜んだのだ。

正月も過ぎて十二日、信直は正月の儀礼も終えて岩谷の観音堂に参拝に向かった。  
戦も勝ちに終わり、所領も安堵されてようやく身辺も落ち着いてきたところだった。

身廻りの警護の数も多くなく、時は夜半である。  
観音堂近くの白鳥川に近づいてきた時、業綱が大音声で呼びかける。  
「九戸左近配下の工藤右馬助、ただ今旧主の仇に報いる！」

名うての名手の銃口が一行に向けられた。  
皆が大混乱に陥るも、夜だったのが幸いした。

先導していた唐式部は機転をきかせ提灯を振り回す。  
「安心しろ！ 上様はここにおられる」  
影めがけて業綱は発砲。しかし銃弾は提灯を撃ち落としたのみで終わった。

信直はそのまま現場から逃げ延び、命に別状はなかった。

不屈きな下手人を探し出せと家中から人員が動員され、業綱は捕らえられてしまう。  
しかし元から覚悟を決めている。堂々と今までの遺恨と暗殺を企図していたと話した。

しかし信直もただの殿様ではなかった。  
武士として見どころがある事、また二人としない鉄砲の名手であること、それを考えて  
怨みを捨てて自分に仕えよと諭したのだ。

自分を殺しに来たものを召し抱えようとするなど正気ではない。  
周りは止めたものの信直は聞かない。

処刑を覚悟していたのに信直の大器に感じ入ったのか、最後は業綱も同意する。

以後二〇〇石の足輕頭として忠義を尽くすこととなる。

もりながよし

森長可（勝蔵、勝三 永禄元年1558～天正十二年1584 尾張国）

すぎやままごろう

杉山 孫六 小牧・長久手の勝敗を左右する  
（生没年不祥）

天正十二年 1584、小牧長久手の戦はもう一つの「天下分け目」の戦いと言っても過言ではない。

信長亡き後で秀吉は明智光秀を討って旧主の仇を討ち、天下への道筋に邪魔になる柴田勝家や織田信孝も葬り、王手寸前まで来ていた。

形式上は信長の遺児三法師を擁する羽柴秀吉と、織田信雄の後継者をめぐる争いである。  
しかし信雄の背後には家康が控え、事実上秀吉と家康の勝負である。

森蘭丸の兄にして名将森可成の息子、森長可は秀吉側についていた。  
槍の名手でありその勇猛ぶりが信長に愛されて信濃の大名にまで立身した男だ。

意気盛んな長可は、小牧山に陣取る家康への先制攻撃を目論んで兵を動かす。  
しかし家康もむざむざとそれを許す凡将ではない。

動きを読まれた森軍は巧妙に矛先をかわされて逆に家康から奇襲を受ける形となった。  
現場は混乱しそのまま敗北に追い込まれた。

幸先は敗北に終わった秀吉方は、第二戦として三河侵攻を企てる。  
前半は調子よく三河の支城を次々に陥とすが、中途から三河の猛反撃を受ける。

まず攻勢を受け止めきれずに総大将の秀次の軍勢が壊滅、ついで堀秀政も反撃しつつも追い込まれてしまい、現場に池田恒興と森長可が取り残される形になった。

そのまま両軍は長久手で決戦へともつれこむ。

最初は両軍ともによく戦った。  
乱戦状態のまま戦況は膠着しじりじりと一進一退が続いた。

決着がつかないまま両軍は痛み分けとなるかと思えた頃である。  
状況が一変する出来事が起きる。

森長可 ―― 「人間骨無」と書かれた槍を振るい、勇猛果敢で苛烈な性格で「鬼武蔵」の異名を持つ ―― はその勇猛ぶりゆえに目立ち、逆に狙われる。

相手はとある足輕であった。  
「柏崎物語」は伝える。

水野勝成に所属する水野太郎作の足輕、杉山孫六は森長可を見出し、視認する。  
そのまま鉄砲でもって狙いを定め一弾で長可の眉間を撃ち抜いた。即死であったという。＊1

猛将のあつけない最期であつた。

僅か二十七歳の若さで重んじられ大名にまでなった男はこうして戦死した。  
出陣の際には白装束で身を固め、遺言状も残していたというから、先の一戦で家康の実力を分かっていたのかもしれない。

大将の戦死で森隊は混乱に陥り一気に劣勢に追い込まれる。義父の池田隊も大将の恒興とその嫡男の元助が二人揃って槍で討ち取られるという散々な状況である。

最終的に秀吉方は総崩れとなつて勝利は徳川方のもとに転がり込む。

乱戦の最中で長可の首は部下が手ずから持ち去り、徳川方に渡すことはなかったと言う。  
小牧・長久手の戦の結果、家康は野戦の名手として名を天下に轟かす。

秀吉も一日置かざるを得なくなり、最期まで徳川家の力を削ぐことはできなかった。

＊1『小牧陣始末記』によると井伊隊の足輕・柏原与兵衛。

◇ 関が原

しまきよおき  
□ 島 清 興 (左近)  
(左近 天文九年1540～慶長五年1600? 大和国 )

かんまさとし  
● 管 正利 の鉄砲隊 三成の腹心を葬る

石田三成は有能ながら、性格に傲慢無礼な所があり、また基本的に文官であつたので、秀吉の対外出兵を含めて武官との対立を生んでいた。

三成との対立が、かつての豊田恩顧の大名でさえ東軍に回る一因になったともされる。

関ヶ原の一戦は、かかっているのが天下であるのに対して、総力戦とはならなかった。  
西軍の総大将でありながら毛利輝元のように日和見的で煮え切らない者や潜在的な裏切者が多かった。

その中で島左近は、三成が配下でももっとも頼りにする一人であり、宇喜多秀家や親友の大谷吉継とともに一番働きが期待できる人物でもあつた。

有名な「三成に過ぎたるものが二つある」と佐和山城とともに謳われ、三成が俸禄の半分をなげうって召し抱えたとの伝説があるほどの人物である。

関ヶ原の前哨戦の杭瀬川の一戦でも勝利に貢献し、本戦でも戦の行方を左右することを期待されていた。

この島左近隊とぶつかりあつたのが黒田長政の一隊であつた。

黒田長政本人が鉄砲を高く評価していただけでなく、鉄砲隊も重視していた。

三成の本陣は堀や防護柵によって黒田の攻勢を防いでいたが、やがて黒田隊を駆逐するために  
左近自らが槍をもって出撃してくる。  
「かかれ」の絶叫は歴戦の勇将の貫禄十分であり、その姿とともに、立ち向かった黒田武将らは  
恐怖を覚えたと後々まで語り草になったという。

左近隊は百名ほどであつたが、自分含めた数十人を突出させて長政の陣を襲撃した。  
長政も同程度の兵力でもって攻勢を受け止めさせたが、実はこの時に別動隊となる鉄砲集団を動かしていた。

鉄砲隊を率いるのは菅正利。  
黒田二十四将の一人であり、数々の武功で鎧の赤備えを許され、大刀で虎を斬り殺した逸話を持つ男である。

この鉄砲隊もただの別動隊ではない。  
優秀な狙撃を評価された選りすぐりの鉄砲巧者が揃っていた。

菅は別動隊五十人ほどを戦場を見下ろす丘に集結させる。  
そして突出して交戦を続ける島の先鋒隊を狙わせた。

鉄砲隊は技量だけでなく、冷戦に戦況を読む勇士が配されていたという。

命令とともに数十挺の鉄砲が次々に火を噴いた。  
名うての射手が揃っており、左近らは黒田隊を撃退するために戦線が伸びきっていた。

先鋒として黒田隊と交戦していた集団は瞬く間に射ち倒されていき、島左近自身も狙撃されて重傷、戦闘不能となる。

大将がやられて島隊は一気に勢いを失って崩れる。後退を見逃さず黒田隊は勢いにのつて前進、島隊だけでなく三成本陣にまで侵入を許すことになる。

この戦いで島左近は落命したとされ、頼みとする重臣の戦線離脱はますます三成を苦境に追い込んでいく。

いい なおまさ  
□ 井伊 直 政 虎 楸 永禄四年1561～慶長七年1602 遠江国)

かしわぎげんどう  
● 柏木源 藤 主君のための捨て身の一撃

天正七年1579～没年不詳)

既に大勢は決していた。  
天下の行く末を決める関ヶ原の一戦は、小早川の裏切りを端緒として決着した。  
西軍は追い込まれて崩壊寸前である。

島津義弘は気付くと自分が危機的な状況にいるのを自覚した。  
元々東軍に付くことも考えていたぐらいで、この一戦でも夜襲の進言をしたのに受け入れられなかった。  
あまり積極的に動く気にはなれなかったのである。  
それが状況によって追い込まれて、自軍崩壊の瀬戸際にある。

すでに合戦の原因であった石田治部少輔も逃亡し、総大将を任された毛利の軍も退却をやむなくされていた。

もはや戦場に留まっていても無意味である。しかしここで無様に敗北したとなると、島津の名折れになる。  
一度は自害をも考えるが周りに制止されて退却を決意する。

決断は壮絶なものであった。

あえて家康本陣に突っ込む形で敵中突破を図る。  
有名な「島津の退き口」である。

猛烈な勢いで島津軍は前衛の福島正則の陣を突破した。  
しかし撤退する島津の背後を井伊直政と本多忠勝が追撃する。あえて危険なやり方を選択しているのだから、多大な犠牲が予想される。

そこで取られた戦術が「捨てかたまり」である。

しんがり  
殿 となる者たちが決死の覚悟でひとかたまりとなる。そしてその場で死に物狂いで追撃してくる敵と交戦する。  
最悪はそのまま玉碎するか、もしくは後ろに撤退して次のすてかたまりに合流したり新たなかたまりを作る。  
それを何度も繰り返し抵抗を続けて大将を逃す。  
死を覚悟の決死の戦術であった。

関ヶ原では捨てかたまりの兵は狙撃戦にも従事した。  
まず道にあぐらをかいて敵を待つ。これは狙撃を安定させるためと、敵に姿を確認されにくくするためだ。

追撃の猛攻を銃の名手たちが狙撃でしのぐ。  
狙うは敵の大将である。

時には多勢に無勢で撃破される。しかし効果はあった。

義久に迫いすがる井伊直政らの軍勢。「討ちとれ！」と直政自身が先頭になっている。  
義久は寡兵であり、まともに抵抗すれば勝ち目はない。  
危機的な状況である。

その一瞬の出来事であった。

島津の川上忠兄の郎党、二十二歳の若輩の柏木源藤はすすきの影にひそんでいた。  
そのまま銃を構え、突撃してくる井伊直政を狙撃した。  
弾丸は直政の右腕 諸説ある に命中、直政は耐えきれず落馬した。大将が負傷したことで井伊方の追撃も止む。

なんとか窮地を脱したのである。一年半後、直政はこの傷が元で死去した。おそらく破傷風だったと推測されている。

しかし島津側の被害も甚大であった。義久の甥、佐土原城城主の豊久は、義久の鎧兜をまもってなりすまし、全身に矢を射られて戦死したとも伝説にある。**＊1**  
家老で義久の信頼の暑かった阿多盛淳も身代わりとなって壮絶な討ち死に遂げた。

義久が薩摩に帰りついた頃には身の回りには八十数名しか残ってなかったという。

関が原は銃砲が存在感を放っていた戦いだとも言える。  
有名な小早川への合図の銃撃から、三成の最も頼りにしていた島左近は鉄砲隊の射撃によって負傷し早々に戦線離脱した。これは黒田長政の部下、菅和泉が率いた選り抜きの鉄砲部隊五十人による狙撃であった。

家康の四男で尾張藩主の松平忠吉の死因も、関ヶ原の狙撃が原因であったという。  
本多忠勝も愛馬の「三国黒」が銃で狙撃されて 弓との話も 危ういところだったとか、とかく狙撃の話にも事欠かない。

**＊1** 落ち延びて近くの村で自害した説もある。

もがみよしみつ

□ 最上 義光

みずはらよしのり

● 水 原義 憲 の鉄砲隊 兜が救った命

一般的なイメージとしては、最上義光は伊達政宗のライバルとしての印象が強いだろう。  
戦国東北の雄であり、没落しかけていた最上家を隆盛させた。

また生き残りに様々な謀略も駆使したことから「羽州の狐」という異名もある。  
戦場では刀よりも長大な鉄棒を振るっては敵と渡り合うなど、豪快な武人として一面もあった。

その義光が鉄砲にも並々ならぬ関心を抱いていたのはあまり知られていない。  
酒田の港を整備し、交易の中で鉄砲も大量に購入した。数千挺を数えたといわれる。

当時最上氏は伊達家に臣従していた。  
過去の敗戦が原因であり、国内での威信も地に落ちていた。そのため一族や国人に統制が効かず、争いを繰り返す毎日であったという。

義光は外交と合戦で敵対勢力を潰していったが、寒河江の大江氏とは最も険悪な仲であった。大江氏はなかなかの戦達者で、兵数で劣っていても上手に最上に抵抗し



また伊達正宗の「騎馬鉄砲隊」も浪人していた雑賀の当主、鈴木重朝が伊達家に雇われるにあたり、伝授したものとの話も伝わるのだ。

## 雑賀孫一

雑賀衆の頭とされ、鉄砲撃ちとしても有名である。しかし知られている割には資料的に不確かなところが多い。

「雑賀孫一」という名前からして謎がある。一族の当主が代々使っていたものであるとか、鈴木重意、重秀、重朝ら複数の人間の事績が集約されているなど諸説あるのだ。

畿内では根来や雑賀と伊賀も行き来があつたとされ、一説には忍者とも関係したという。

脚色もあるだろうが、雑賀孫一の事績として伝わるのは、二段射ちから忍者のような策略、無人鉄砲塹壕のような忍術のような仕掛けまでバラエティに富む。

「孫一」という名前も、いわば素性を秘匿する戦術的な意味合いがあつたのかもしれない。

## §コラム　さまざまな鉄砲の「初」

合戦だけでなく鉄砲は時に文化的なことまで影響を及ぼした。狩猟のやり方、城郭の構造、軍装、儀礼……

鉄砲の導入によって新しい事柄も生まれた来た。そうした記録に残る「鉄砲を介した初」を研究してみよう。

### 鉄砲による暗殺

これは狙撃事例で取り上げたように、永禄六年　1563　の遠藤兄弟による三村家親の暗殺である。短筒を使った夜討ちで、宇喜多直家からの依頼であつた。

※ただし別説もある。

美濃国郡上の篠脇城は代々東氏が治めていたが、城主東常慶の子息常亮は乱暴で常日頃から好ましくない振舞いが多く、人望がなかった。

長じて郡上の木越城主の家柄の遠藤氏の娘を嫁にもらおうとするも、相手側は拒否して別人に嫁がせてしまい、これを恨んで常亮は報復を行った。

八朔のお祝いに東殿山城を訪れた遠藤胤縁を、部下の長瀬内膳に命じて、鉄砲で射殺させたという。

記録された暗殺の日は永禄二年　1559　八月一日。遠藤兄弟の暗殺より早い。

しかし背景には遠藤氏による東氏の追い落としも絡み、どこまで史実か分からない。

### 初めて実戦で使われた鉄砲

天文十八年　1549　五月、薩摩の島津家による黒川崎の合戦と言われている。種子島が領土内にあるだけあって、戦いに用いるのも早かつたのだろう。

肝付兼演の居城、加治木城が島津の家老の伊集院忠朗によって攻められた。『貴久公御譜』の記録によれば「而日日飛羽箭、發鐵炮、經數月驚人之耳目」とあり、それなりの威圧と存在感があつた様子は伺える。

初期はまだ訓練も未熟で戦術としてまだ有効に使いこなせない点もあつたのかもしれない。

### 鉄砲による戦死者

記録に残る初の戦死者は天文十九年　1550　七月十四日条に『言継卿記』に掲載された事例である。

当時三好一族の内紛から発した争いは、管領の細川家や将軍など幕閣をも巻き込んだものとなっていた。摂津の江口の戦いで三好長慶に打ち破られた細川晴元は、京都東山に中尾城を築き、なおも戦争を継続した。

十四日、京都の上京の川端で、三好側と幕府の連合軍は小競り合いを起こす。その際には鉄砲が用いられて戦死者が出たとされる。記事には「細川右京兆人数足軽百人計出合、野伏有之、きう介与力一人鉄　に当死」とある。

ながやす

つまり細川晴元の足軽隊の鉄砲により、三好側の郎党が戦死したと伝える。この「きう介」は「三好三人衆」として力を振るっていた三好　長逸の息子で、三好弓助とされている。

### 有名武将の狙撃による戦死

前に取り上げたようにそれが事実ならば三好長慶の弟、三好実休義賢となる。

### 銃殺刑

フロイスは「日本に絞首刑は少ない」と書き残している。当時の日本の刑罰では死刑は斬首、磔などが多く、鉄砲を使うのはまれである。

記録に残るものとしては天正七年　1579　、荒木村重の謀反による人質の処刑の件である。

信長は村重の謀反に激怒し、女子供だろうが人質は全て殺すように命じた。それは磔や焼き討ち、槍など様々な手段による過酷なものだったが、そこに「火縄銃で撃って」殺したともあるので、これも銃殺と言えるかもしれない。　1＊

他には天正十七年　1589　の十月二十六日の伊達政宗によるものがある。

伊達軍は陸奥の須賀川城を陥落させ、二階堂氏を滅亡に追い込んでいた。捕虜には十六歳の若武者がおり、名を須田秀広といった。二階堂の家老で和田城城主でもある須田盛秀の息子であつた。初陣であつたという。

父の盛秀が佐竹派で強硬な反伊達勢力でもあつたため、政宗は処刑の評決を下した。即席の刑場が作られ、中央には真新しい柱が一本建てられた。そこに秀広が縛りつけられる。領民が見守る中、政宗はわざわざ手ずから火縄銃で狙いをつけ、銃殺したという。

本当に政宗が手を下したなら、大名自身による初の鉄砲処刑かもしれない。

＊1　天正七年　1579　六月二日、波多野秀治は弟の秀尚とともに磔にされたが、これが槍ではなくて鉄砲で射殺されたとの説もあり、それが本当ならこちらが早い。

### 鉄砲を使った自殺

これも荒木村重の謀反に関わっている。

天正七年　1579　十二月初旬、荒木村重は人質を残して逃亡し、荒木一族や信長側近による説得にも失敗に終わった。信長は事の結果に激怒し、荒木の妻子を始

め、女子供含めた人質数百名全員の処刑を命じた。

有岡城に警護役として居た池田和泉守は、前後の悲慘な状況と人質の行く末に絶望し、「露の身も 消えても心 残り行く なにとかならむ みどり子の末」と辞世の句を残すと、火縄銃で自らの頭を撃ち抜いて自害したという。

## ◇ 島原の狙撃手たち 一揆鎮圧の中の攻防

島原の乱は、太平に向かっていた江戸初期での最大の反乱事件である。

一般的には弾圧された切支丹勢力が信仰を守るために蜂起したようなイメージが強いが、実情はそう単純でもない。

一揆側の構成勢力は、元領主の有馬氏家臣を中心とする集団、小西行長ら改易された大名に仕えていた浪人たち、藩の過酷な支配に苦しめられてきた農民など、旧支配勢力の残党から、民衆やキリシタンなど、様々な不満を持つ勢力が結集していた。こうした背景が、単純な農民反乱ではない大規模戦争に至った遠因となる。

元から鉄砲生産で有名なところで、有馬氏など戦国の武士団の遺臣も多い。実際に一揆側は大名勢力と同じように、総大将、鉄砲大将、侍大将、普請奉行などが組織され、鉄砲鍛冶、火薬や火縄製造の技術者から武芸・鉄砲に達者な者など兵站の専門家から軍事技術者まで経験豊富な人材が揃っていたのである 三倉村獵師、懸針金作<sup>さげはり</sup>という射撃の名手も居たと記録にある 。

戦闘が開始されると優勢な火力と巧みな攻勢に、藩側は何度も翻弄され撃破された。時には逆に一揆勢力に島原城や富岡城に追い込まれて包囲される始末で、いわば従来の合戦と変わらなかった。

周辺大名や幕府援軍が来てからも鎮圧は容易でなかったのである。

### 城側の名射手

一揆側は元廃城であった原城に籠城した。包囲した連合軍は様子を伺おうと井楼を建てたが、城内からは正確な射撃が繰り返され、見張りの武士の犠牲が相次いだ。諸藩は鉄の箱を釣ったり、盾がわりの竹束を使ったりで狙撃対策に迫られた。

強引に城壁を登って力攻めしても無駄であった。上方や側面から正確な狙撃を浴びてしまう。また籠城する農民たちも弓矢に石や丸太、糞尿や熱湯に至るまで投下したのでたまったものではなかった。

あの手この手で攻めるも幕府と諸藩連合の犠牲は増え、業を煮やした幕府側は「知恵伊豆」と称された松平信綱を派遣する。現地の指揮官、板倉重昌は面目丸潰れだと焦って力攻めを行い、逆に四〇〇〇人近くの犠牲者を出す。自らも城壁に取り付いていたところを狙撃されて戦死した。

この総大将の戦死という事態に驚愕し、新しく着任した信綱は方針変更する。

まず一揆軍の弱点は補給にあると見た。「干殺し」――持久戦に方針転換する。

城内に物資が運び込まれないよう厳重に監視し、撃ち込む銃弾も鉛から鉄に変えた 鉄だ<sup>て</sup>と溶かして弾丸に再利用するのが難しい）

風聞で同じキリスト教徒のポルトガルの援軍が来るという話があると知ると、あえてオランダ船に大砲の弾を四二六発も打ち込ませて精神的な揺さぶりをかけた。

籠城が長期化すると狙い通り城内の食料と弾薬は欠乏しはじめた。一揆側は食料の確保に打って出るも撃退され、逆に窮状を察せられてしまう。

また重箱山から撃たれた砲弾が天草四郎の袖を貫くなど、宗教的なカリスマで不死身とされていた指導者への信頼も揺らぎ、城内の士気も落ち始める。

頃合と見た幕府側は総攻撃を仕掛ける。双方に多大な犠牲を出しつつも乱の鎮圧は成功した。

ちなみに鳥取藩から慰問使として派遣されていた佐分利流槍術の創始者、佐分利九之丞成忠は狙撃され、大石の投下も受けて戦死した。剣豪の宮本武蔵も参加していたことで有名だが、城内からの投石で負傷し何もできなかったという。

## § コラム 戦国の世の創意工夫 射撃と銃器製造

### 立花家の先進性

黒田長政との腕比べで話のでた立花宗茂は、「東の本多忠勝、西の立花宗茂」とまで讃えられ、文武に才能のあった人物である。新進兵器としての鉄砲に理解があっただけでなく、鉄砲隊の先進的な運用ができたという。

長篠の戦いの三段撃ちは論争がある話だが、立花家では鉄砲隊、槍隊、弓隊と組み合わせて互いの欠点を補わせる柔軟な運用をさせたと言われる。

当時の火縄銃は前込めの滑空銃であり、装填に時間がかかるのが欠点である。ここから射手や装弾の人間を分けた三段撃ちの話なども出てくるわけだが、立花宗茂の父親の道雪は、あらかじめ鉄砲の弾と火薬を小分けして素早く装填・射撃できる早合 早込<sup>はやこみ</sup>を編み出していたとされる。これにより通常の三倍のスピードで鉄砲射撃が可能となり、対峙した敵の鉄砲隊は対抗できなかったという。

本場のヨーロッパでも火縄銃の装填速度の手間がかかる点は問題とされていた。それを補うために集団での一斉射撃が発達したり、あらかじめ火薬と弾丸を一つにした薬包 カー(トリッジ が発明されたわけである。そうしたことを思い起こせば立花家のやったことは合理的で先進的でもある。

また城攻めにあたり鉄砲や弓矢を防ぐ土塁や竹束を設置しただけでなく、時には今で言う塹壕を作って射撃戦を行ったという。

当時としてはすこぶる現代的な戦いを編み出していたといってもいいだろう。

## 装填と射撃

信長の長篠の三段撃ちの虚実とはかく、文献では似たような手法は散見できる。

雑賀衆の項でも触れたが、佐々成政は前列と後列に鉄砲隊を分け、片方の列が片膝をついて射撃し、その間にもう片方が装填して射撃準備を完了させておくという二段撃ちの手法を編み出していたという。

薩摩の島津氏もこの順繰りの射撃方法をさらに進化させていたという。三段の列に交互に射撃させ、同時に隊列をじりじりと前進させていく。それによって敵中突破も可能にするという戦術である。

根来衆や雑賀衆も装填役と射撃役が分かれており、一人が射撃するのに数人の弾込め役がついて、間断なく射撃ができたという。

加藤清正の家臣の加藤安行は、蔚山の籠城戦において四人の従者に二挺の小銃を交互に装填させて、一日に二八〇発もの銃撃を可能にしたという。これが本当なら、場合によっては近代の陸軍歩兵の一日の射撃数よりも多くなる。

上杉家や徳川家の記録にも同様の役割分担の手法がうかがえるのである。

戦国の実戦の中で装填と射撃の時間を短縮させようとする努力は、共通して生まれしてきた現象なのかもしれない。

## 軽量化の工夫

島原の乱で守備側が健闘したのは、そこに優秀な射手と銃器が揃っていた点もある。「島原鉄砲」の名前が残るようい、九州北部には砂鉄の産地があり、鉄製品作りに向いていた。

そうした鉄砲鍛冶が成功した工夫が筒先の工夫である。通常火縄銃は黒色火薬を使っている。発火箇所鉄は厚めにしなければならないが、銃口にかけて細目にしていけば軽くて操作がしやすくなる。日本の火縄銃も後期になるとそうした工夫で出てくる。

欧州はこの方面の改良が遅く、当時の挿絵でも鉄砲の射手がY字型の杖に銃身を載せていたりする。これを江戸の学者が欧州人には身体鍛錬ができていないのであろうかと疑問を記したものがあるが、そうではない。単に鉄砲は重たっただけである。筒先も分厚く重たいままのスタイルだと鉄砲撃ちに負担がかかる。その疲労を軽減するために杖なども使用されたわけである。

## 射撃距離の改善

稲富流を始めとして日本の砲術家の秘伝書は五丁 約五〇〇m までの射撃を普通に扱っている。朝鮮出兵の朝鮮側の文献でも日本の火縄銃の射程距離を数百歩としている。

これは最初からそうだったのではない。天文年間に入ってきたころには最大射程が約二〇〇m程度で有効射程距離はもっと短かったのである。それを鉄砲鍛冶らの改良によって、数倍に伸ばすことができたわけで、このあたり本場欧州の火縄銃の進展より早い点もあったのだ。

## §コラム ～復讐の一弾～ 虚実入り混じる下剋上事件

まつだいらなりこと  
□ 松平齊宣 文政(八年1825～天保十五年1844 江戸)  
●源内 生没年不詳 尾張国?)

遠目に行列の姿が見えると、源内の身体は緊張で張り詰めた。鉄砲を握る手が汗ばむ。いつもならここまで気張ることはない。

源内は山で稼ぐ男である。猪や鳥をはじめとして、山の荒々しい獣と渡りあい何度も危険な目に遭ったこともある。

それでも得意の鉄砲で切り抜けてきた。自慢ではないが鉄砲の腕は名人とまで呼ばれるほどだ。慣れている。

しかし今日は違う。

大勢のお供たちの間に見える駕籠。銃口を向ける先は獣ではない。一人前の人間の男、それも藩を統べるお殿様である。

藩主の松平齊宣。兵部大輔であり天下の征夷大將軍の血を引く。

普通ならそうした雲上人を狙うなど正気を疑われたろう。失敗すれば命はない。それは分かっている。

しかし源内は本気であつた。たとえ自らの生命を危険にさらしてでも射つ。決意は揺るがない。

すべての理由はただ一つ。愛する幼子を奪われた報復であつた。

事の発端は数年前にさかのぼる。

三歳になる娘の小菊。

年端もいかずまだ世の中のことも分らない。

母に連れられて外出した折の事である。  
ちょうど大名の行列とつきあつた。人々は慌てて道を開けて敬意を表する。

たまたま小菊は道をはさんで母と離れていた。  
「そこにいなさい」母は小菊に合図した。

しかし幼い小菊はその意味が分らない。  
偉い人々が近づいて来るというのも理解できない。

愛しい母親の元に行こうと道に飛び出してしまった。

「何をしているか！」  
と伴の者たちは小菊をとらえる。  
殿さまの前を横切るなど大罪、と大騒ぎになる。

母は慌てて平身低頭し詫びを入れる。  
大問題になるもツテのある寺社関係の人などに取り直しを頼んだ。  
「幼いこどものやったことだから」  
とさすがに殿様も怒りをやわらげる。今回は大目にみようという雰囲気になりはじめていた。

たまたまその小菊の父親の話になった時のことである。  
とりなしていた者が、父親は尾張出身だと口をすべらせたのである。

瞬間殿さまの顔色が変わる。  
「斬れ！」  
と無情な命が下る。

周囲はどよめき寛恕を請うた。  
しかし殿様の態度は一変しており、全く聞き入れない。無礼の咎により斬り捨てよと厳命が下った。

哀れな幼子も泣きわめき、母親が嘆願しても無駄であつた。  
こうして生を受けてわずかばかりの幼子は、この世に別れを告げた。

愛し子は二度と帰ってこない。  
いくら身分が違ふ、法度を犯したからと言って許せることではない。

涙と行き場のない憤怒が、歯止めの利かない暗殺者を生んだ……

殿様の駕籠が射程距離に入る。  
獵で鉄砲に慣れた源内にとって、どの程度の距離が最適かは造作もないことだ。

一呼吸して仇の乗る駕籠に筒先を向ける。  
胸の動悸がさらに高まる。  
一瞬のためらいは、脳裏に浮かんだ小菊の顔によって打ち消された。

轟音とともに復讐の弾丸が駕籠を貫く。  
完璧な一撃であつた。

本来近づくことを許されない権力者を手ずから仕留めたのだ。

行列は大混乱に陥り、源内も逃亡する。

殿様は傷が元でまだ二十歳という若い身でこの世を去った。  
奇しくも小菊と同じように年若い身で他者に葬られたのだ。

前代未聞の大罪であるが、殿様が庶民に命を奪われたという外聞の悪い事件である。  
そして事件の背景を探れば主君の狭量で横暴な振る舞いが明らかになる。

藩の名誉を考えた結果、表向きは病死として一件は葬られた。

こうして庶民による一大復讐劇は成功したのであつた……

とまあ、これが現地一帯に伝わる復讐伝説の標準的なストーリーである。  
当時からこの一件に材をとった芝居などが上演され、また殺された幼子を追悼する碑も建立されている。

確かに史実とすれば大変な出来事だ。  
一介の庶民が藩の最高権力者を狙撃によって葬り去るのである。身分の区別がやかましい江戸の世にあつて華々しい下剋上である。  
内容的に演劇に取り入れられたのも理解できる。

しかし詳細を探ると実に曖昧なのだ。

まず子殺しの残虐な処刑を実行したとされるのは、播磨明石の第八代藩主の松平斉宜。  
実在の人物である。

子沢山であつた十一代將軍家斉の二十六男で、明石藩に養子に入つた。  
將軍の息子ということで明石藩の石高は六万石から八万石に加増されたが、  
儀礼的な面でも格上げされたため、出費がかさんだという。

また斉宜の藩主就任は先代の実子を押しのけてであり、本人も將軍の子という威光をかさにきて傲慢な振舞いが多かつたという。藩内には強い反斉宣の感情があつた。

つまり状況背景からして複雑だったのだ。

言い伝えはこう続く。

齊宣の暴挙で尾張藩は激怒。領民を殺された報復として以後明石藩は領内を通過できないとした。どうしても参勤交代で通る必要がある際は、夜間喪服などを着て行うように通達した。

これに加え御三家の尾張領内の出来事であるため、明石藩は領地も半分没収の憂き目にあう。悪評は各地に流れて、名古屋城下などでは船での通行を強いられたという。

一件は平戸藩主の松浦静山も随筆集に書き留め、江戸学の大家とされる三田村鳶魚も記録するなど、史実と見る人々も少なくない。

しかし実証的に探ると疑問が出てくる。

まず犠牲者からして大きく異なる。別の話では小菊という幼い娘ではなく、萩原宿の佐吾平という馬方である。暴れ馬を取り押さえようとして、行列を横切ってしまい、それを咎められて斬り捨てられたと。佐吾平は盲目の母によく尽くした孝行息子であったために、人々の同情が集まり、慰霊の祠まで建てられた。（現在でも戦後に建立しなおされた佐五平の碑が愛知県の旧街道沿いに残り、静岡の三島には小菊の供養のための「言成地藏」――小菊が殿様に「なんでも言いなりになるから許してください」といった言葉にちなむ――が残る）

また参勤交代の行列も斉宣ではなく初代藩主の直明、もしくは二代目直常か三代目直純の藩主とするものや、小菊や佐吾平でなく駿河の浪人の娘を斬ったという伝説も残る。また話の結末も、源内が狙撃したが駕籠の中身は空で藩主の命は助かり、絶望して源内は自殺したなどのオチもある。

つまり加害者と犠牲者、話の筋でさえ諸説あるのだ。しかもそれぞれの話にもっともらしい史跡が現在まで残る。

他にも事後の処置で明石藩の領地が半分没収されたというのは確認されていないなど、事情は錯綜する。

斉宣とされた理由も推測されている。当時將軍の子が大名になった場合、御三家に挨拶するのが慣例であった。御三家の一つである尾張徳川家に斉宣も挨拶に赴いた。しかし加増されたとはいえ、明石は八万石。尾張徳川家で正門を通れるのは十萬石以上の大名のみで、斉宣は側門を通らされる屈辱を味わされたという。（この時の怨みが件の無礼討ちの話に関わる。つまり尾張の住人と聞いて態度が豹変した理由）

研究者の間でもいまいち結論が出ていないようだが、完全なフィクションにしては傍証となる証拠が残りすぎていることや、斉宣が就任後わずか四年、二十歳で「病死」したのも事実である。

こうした背景から何らかの明石藩に関係する無礼討ちのような出来事があったのではないかとも推測されている。当事者が斉宣ではないにしても、様々な話の断片が彼に集約されて脚色された面があるのかもしれない。

いずれにしろ、もし復讐者の源内が事実であるなら、一庶民の狙撃手が殿様を倒した江戸の一大狙撃事件となる。

さかもととしただ	
●坂本 俊 貞	大阪を焼いた乱の鎮圧者
げんのすけ	
(鉉之助 寛政三年1791～万延元年1860 信濃国)	
天保八年 1837 二月十九日、名高い陽明学者でもあり、大阪奉行の元与力である大塩平八郎は、自身が目にした奉行所ぐるみの腐敗、そして飢えと貧しさに苦しむ民衆をよそに高利貸しや商人ばかりが栄える有様を見て世直し決起を図る。	

行動する前にあらかじめ自分の膨大な蔵書や資産となるものを売り払い、その金を窮民に配布したり武器購入にあてた。

平八郎は子供の頃から槍術と中島流砲術を学んでおり、砲や火器に実践的な知識と腕があった。門人に手伝わせて火薬だけでなく、火矢や焙烙玉、大砲に至るまで製造したという。

事前に弟子の中での裏切り者が密告したため、急遽予定を早めての実行となる。

まず自分の屋敷に火を放ってから門人ら二十数名を中心に決起し、富商が居住する家々を次々に砲撃し、火をつけてまわった。豪商から奪った財産は貧しい住人らに分け与えたため、参加者も増えて最終的に三〇〇名程度に達した。

当初、奉行所側の対応が極めて鈍かったため、大塩側はほとんど無抵抗で行動をすすめることができた。最終的に町全体の五分の一は焼けたと言われている。

奉行所も慌てて戦いの準備をすすめようとしたが、長い太平の世に慣れ武備もおろそかになっている。一部では鉄砲や刀鐙が錆びて使えなかったり、火薬販売禁止の影響で鉄砲はあっても火薬が手に入らないといった情けない状況に陥っていた。

また大塩平八郎が元奉行所の与力であったこともあり、現場にも内通者がいるのではないかとあちこちで混乱を極めた。

鎮圧に向かったはずの団が、初めて耳にする大砲の轟音に右往左往したり、銃撃戦におびえてただめくら減法に撃ったり、後「空打ち」と嘲られた状態 目をつぶったり、隠れてロクに狙いを定めないために銃口が上を向く になったりもした。中には上士でも命を落とすのを怖れて現場に行くのを嫌がって下士に炊きつけられるなど、数で上回っても翻弄されていた。この辺り、幕末に特権を貪っていた上士の不甲斐なさに憤慨し、身分を問わず下士が活躍した奇兵隊などの新式兵隊が生まれたのと似た状況になった。

この時に乱の鎮圧の中心となったのが坂本鉉之助であった。鉉之助は砲術家の坂本天山の家に生まれ、後年は荻野流砲術家に養子に入る。大阪奉行所には与力として勤めていた。育った環境から銃砲類に明るく兵学にも通じていた。このことが一番実地に動けた要因となる。

坂本は上層部の愚かな指示を修正し、効果的な武器の選定や配置、戦い方まで指揮する。実際の現場では与力や下級武士の方がよっぽど意気が盛んで活躍していたという。

鉉之助は元々平八郎と親交があり、立派な人柄だと認めている所があった。しかし行きがかり上鎮圧する側として討伐することとなる。

戦闘では鉉之助も何度か狙撃されるが、怯まずに勇敢に指揮を執った。弾丸飛び交う中を自ら飛び出して膝打ちで大塩の大筒方として勇を振っていた田源左衛門 彦根の浪人 を狙撃して倒す。戦場の行方を決定する一番の大殊勲を上げたのだ。

正規の幕府軍が組織的、効果的に動くようになると、少数で烏合の衆である大塩側はもろかった。打ち破られて散り散りになり、平八郎含めた首謀者たちは自害したり捕縛されて乱は終息する。

しかし市中の五分の一が焼かれるなど、少数によって大都市が陥れられたこと、武器の備えのお粗末さ、上層部の管理能力の乏しさなど、大きな課題を残した。これが幕府が警備体制を見直すきっかけともなったという。

なおこの戦いでは砲術史で違った功績も遺した。  
三木流砲術や備前の唯人流砲術などで工夫されてきた棒火矢が、平八郎によって実戦に使用されたのだ。  
それなりに有効で焼き打ちの効果があることが実証され、和流砲術の歴史としても見過ごせないものとなる。

乱後、鉉之助は拔群の働きとして大塩の大筒、刀剣、銀百枚などを下賜され、大阪御鉄砲方に命じられてお目見えの身分にまで昇進した。

§コラム 相馬大作事件 みちのくの藩主狙撃未遂

- なんぶやすちか

□南部寧親

(和三郎 明和二年～天保四年 陸奥国)
- しもとまいまさかね

●下斗米将 真(秀之進)

(秀之進 寛政元年1789～文政五年1822 陸奥国)

江戸時代は世の中が落ち着いてかなり身分制度がっちりだったようなイメージがあるが、時には忠臣蔵のような血なまぐさい騒動も起きていた。

今回の相馬大作事件も設定が近い。

文政四年 1821、津軽藩主の南部寧親は参勤交代を終えて弘前に帰国の途についていた。  
途中で体調が思わしくなくなったので、宿で体を休め日程は予定よりも少し遅れていた。  
その時であった。側近があわただしく駆け付けてきて、道中に不穏の動きがあると告げたのだ。  
警護の者を含めて一同は大騒ぎとなる。

事の発端は仙台藩出身の刀鍛冶たちが注進に訪れたことである。  
彼らは刀作りに雇われていたが、代金を払ってもらえず、長く留め置かれていた。  
その中で雇い主の手伝いをさせられてるうちに、恐るべき暗殺計画を知り逃げてきたのだという。

計画は大砲や小銃でもって、参勤交代から帰る藩主南部寧親を狙撃して亡き者にしようとするものだという。

実は帰国に出発する以前にも怪しげな果たし状が届いていたのである。

内容は、寧親が過去を忘れ、侍従の官に任官されておごり高ぶり、傍若無人な行為を繰り返しているとなじるものであった。  
そして重ねて辞官して隠居せよと勧告し、さもないと報復するという警告文である。

体のいい脅迫だが、当初はまともに取り扱われてなかった。しかし謀殺が実際に決行されると判明すると、一大事である。

寧親らは幕府に届け出を出して、帰国ルートを予定された羽州街道から西浜街道に変更する。これによって危害を加えられずに済んだ。

しかし事は藩主の暗殺という大罪である。  
暗殺現場には捕吏が差し向けられ、密告した者たちの証言で自宅まで捜索の手が伸びる。

結果として犯人は下斗米秀之進という元脱藩浪人で、かつては二戸で武道場を開いて勢いのあった人物だという。  
秀之進は計画の失敗を察知して江戸近辺に逃亡していた。

江戸では相馬大作と名を変えて再び道場を開いていた。しかし最終的に幕吏の振りをした津軽藩士に捕えられ、弟子とともに斬首、獄門の憂き目に遭う。

なぜ秀之進がこのような大それた罪を犯そうとしたかというと、単純にテロリストだったわけではない。

背景に地域対立を含めた藩同士の抗争も絡んでいるという。

元より弘前藩の開祖の大浦為信は盛岡藩の南部氏の家臣であった（妾簞の子とも言う）。  
それが南部氏の後継者争いで不満があったのか、挙兵して津軽と外ヶ浜地方を占領して独立宣言した。  
それからは津軽為信と名乗る。

弘前藩は外交的な能力には秀でていたらしく、小田原征伐に来ていた秀吉に真っ先に馳せ参じて工作を行い、領地を既成事実として認めさせた。  
また烏帽子岳付近の境界線で盛岡藩と対立した時も、文書や既成事実によって上手に幕府と交渉し所領と認めさせた。

元の家臣筋でありながら、盛岡藩は津軽氏に煮え湯を飲まされ続けていたのである。

しかしこれは秀之進の頃より百年以上も昔の話である。  
それだけなら大昔の怨みとして極端な仕儀には至らなかったかもしれない。

それが幕末で北方情勢が不穏になってきたことが運命を変えた。  
知っての通り当時ロシアは南下して勢力拡大を図っており、日本側ともめ事を起こすようになっていた。  
来航する異国船の中でもロシアは危険な兆候を見せる敵国であった。

幕府や民間の有識者の間でも北方警備の重要性が説かれ始めていた。

剣術の師匠であった平山行蔵の影響もあって秀之進は北方の防衛を強く意識するようになり、実際に蝦夷地にわたって視察も行った。

幕府も北の備えを始めていたが、それが津軽藩と弘前藩という両方に思わぬ不和の種をまく。  
対ロシア防備で近場の弘前藩に備えを命じ、それに伴い従四位下侍従に叙任する。

また石高の見直しが行われ、津軽藩は、弘前藩八万石よりも上の十万石とされた。弘前藩の十四歳の当主南部利用は何の官位も授かっておらず、国力でも下とされた。

積年の恨みがあるところに、名実ともに津軽藩に抜かれてしまったのである。

うとしたとも言われる。

真相はわからないが、秀之進の行為は東北版の赤穂浪士、みちのく忠臣蔵として江戸でも讃えられた。

言い伝えや芝居では、秀之進は紙や竹で出来た大砲まで準備していたというが、もし成功していたら赤穂浪士並の狙撃劇が成立していたかもしれない。

●吉村九助 西南の攘夷撃ち 生没年不明 薩摩国 )

時は幕末、日本周辺が騒がしくなってきた折であった。  
異国船来航が相次ぎ、時には日本側と兵火を交える事態も発生していた。

薩摩では正保二年 16(45 頃)から対外的な警戒機関として「異国方」が設けられており、宝島にも番所が置かれていた。

吉村らは牛の要求は断るが、菓子やさつま芋などを与えると喜んだ。さらに米や野菜も分けてやろうとすると、いらないと断ったという。再度牛に関して要求を繰り返し、ダメだと分かると船に戻っていった。

様子を見ていると予期した通り二十数人の異人が小舟に乗り込んで上陸してきた。しかも今度はめいめいが武装しており、番所や辺り一帯を銃撃し、本船まで接近してきて砲撃を加える。

この暴挙に一同は激怒したが、いかんせん小島である。火力は少なく、戦える者は流人を含めて十数人ほどしかない。

まず村民らを山に避難させてから役人らで効果的な対抗手段を謀った。

吉村は番所の正面にひそんで迎撃の準備をする。  
別の二人を別の地点に分散させ、多方面から狙撃させようと意図した。

そうこうしているうちに異人は役所のそばにまで近づいてくる。

吉村は藩学である合伝流や天山流砲術も学んでおり、実戦的な戦術も頭に入っている。  
鉄砲として四匁筒を手にしてはいたが、それはまだ前装式で筒内に施条 ライフル が無い。そのため射程距離が限定されており、弾込めにも時間がかかる。

習い覚えた軍学には「人身」とする戦術がある。  
これはまず銃撃した後で敵の懷に入り込み、銃身や斬撃で直接的に制圧する方法である。

吉村はリーダー格の男に狙いを定めた。  
相手はなおも周囲に乱射を続けてこちらには気づいた様子はない。

狙いをすまして胸部めがけて銃撃すると、正確に命中した。相手は大きな叫び声をあげて倒れた。

同時に吉村は飛び出して他の二人の攻撃にかかったが、両方ともうろたえて逃走した。そのまま泊まり場で仲間へ急を知らせて大騒ぎとなり、仲間を船に収容して遠ざかっていった。

そのまま異人たちはあつけなく去っていった。  
再度の報復攻撃も行われず、宝島には平和が戻った。

それから幕府や島津藩はイギリス側が死体の返還を求めて再度侵攻してくるかもしれないと警戒を強めた。翌年異国船打払令が制定される。



九助は撃退の功績で褒賞を下賜され郡奉行にまで昇進した。

開国前夜の騒ぎの一コマである。

禁門の変

元治元年 1864～5 七月十九日、京都から駆逐されていた長州は、池田屋事件の報復と影響力の回復のために京都に攻め上がった。京を警護する会津や薩摩などの諸藩との戦いになり、御所や市街を焼きながら最終的に長州が敗北して「朝敵」となった。

この戦いでは大砲も用いられ、狙撃戦もいくらか見られた。

一橋慶喜はこの時は禁裏守衛総督として守備を担当していた。戦況を読んでの監督振りはそう悪くはなかったらしく、將軍ながら時にはあえて前線まで叱咤激励に赴いた。一度など愛馬の「飛電」を狙撃されて落馬するなど危険な目にもあったが、怯まなかったそうである。

土佐の中岡慎太郎は密かに長州側に参加し、中立売門付近で戦っていたが、ふくらはぎを銃撃され負傷する。第三者を装い幕軍に紛れ込んで逃亡したという。

しかし現場にいたことで薩長が互いに憎しみあって戦闘をしているのではないのを理解し、後の薩長同盟につながる構想が生まれたという。

くるしままさひさ

□ 来島 政久 又兵衛、文化十四年1817～元治元年1864 長門国 )

かわじとしよし

●川路 利良 武者姿の指揮官を屠る

( 正之進 天保五年1834～明治十二年1879 薩摩国 )

来島又兵衛は奇兵隊と同じく身分にこだわらない遊撃隊を結成するなど、近代兵制に理解のあった人物だ。若い時には高杉晋作と山口の普賢寺にいたところを暗殺者に狙撃され九死に一生を得たこともある。

禁門の変では遊撃隊を率いて御所の禁門 蛤御門 の攻略を担当していた。最も激戦の地である。

すでに新式の軍隊知識が普及し、遊撃隊士の制服はほとんどが筒袖であった。しかし指揮官は象徴的な意味合いか、兜など古い武装を残していたという。

来島はこの戦いではわざわざ先祖伝来の烏帽子に、鎧兜、金扇という戦国武者のような姿で指揮を取った。

戦況は、数では劣っていたが火力が優勢で狙撃に長けた遊撃隊側が押していた。一時は守備側の会津兵を撃破する寸前までいったが、大砲を備えた薩摩兵の援軍で再び押し戻される。

来島自身も奮戦したが、場違いなまでに派手な武者姿は目立つ。西郷は部下に狙撃を命じた。

この時の狙撃者が川路利良 後の初代大警視、陸軍少将 とされる。

川路の放った銃弾は来島の胸を貫き落馬させた。助からないと判断して来島は槍で自分の首を突き、甥の喜多村武七に介錯させた。

指揮官の戦死によって長州側は総崩れとなり、退却に追い込まれた。

さいごうたかもり

□ 西郷 隆盛 文政十年1828～明治十年1877 薩摩国 )

やまだあきよし

●山田 顕義 大物を葬りかける

( 市之允 天保十五年1844～明治二十五年1892 長門国 )

来島又兵衛が狙撃され、久坂玄瑞なども有力な人材も失い、戦況としては長州は撃破された。だがまったく無抵抗だったわけではない。

来島の遊撃隊には狙撃隊長として山田市之允 後の顕義。初代司法大臣、陸軍中將 が居た。山田はかつて藩主の護衛を務めたほど狙撃の腕が確かであった。

乱戦のさなかに守備側の大將、西郷隆盛めがけて狙撃し見事命中させる。

幕末の雄が危うく命を落とすところであったが、弾丸は足に命中したとされる。落馬させて一時指揮を不能にさせたものの、致命傷にはならなかった。

◇ 銃による要人狙撃事件 新選組近藤隊長狙撃事件 ～内紛から生じた暗殺劇～

こんどういさむ

□ 近藤 勇 ( 宮川、嶋崎 天保五年1834～慶応五年1868 武蔵国 )

とみやまとよくに  
●富山 豊国

(弥兵衛 天保十四年1843～明治元年1868 薩摩国 寺の他御陵衛士

慶応三年 1867、)二月十八日の昼過ぎ、新選組隊長近藤勇は二条城での軍議を終え、伏見奉行所に戻る途中であった。

周りには数人の隊士が付き従い、近藤は馬に乗っていた。

この近藤の行動を予期して、道沿いの民家には数人の男たちが鉄砲を携えて潜んでいた。過去に御陵衛士に属した阿部十郎、篠原泰之進ら数人の男たちだった。

元をただせば彼らも新選組の隊士でもある。それでも勤王思想や長州に対する処分の仕方から意見が対立し、新選組と別れて新しく御陵衛士という集団を結成していた。

それを裏切りとみた近藤隊長らは、十一月に伊東甲子太郎や藤堂平助など御陵衛士の主だった幹部を襲撃して暗殺していた。

御陵衛士の生き残りには、薩摩藩邸に庇護されながら報復の機会をうかがっている者がいた。その決行の日が今日であったのだ。

近藤勇らは警戒することもなく伏見街道の墨染までやってくる。その姿をとらえた富山弥兵衛は民家二階の障子影から第一撃を発砲。

弾丸は近藤の右肩に命中して重傷を負わせた。近藤は前のめりになって動けない。さらに止めの第二弾を阿部十郎が発砲するが、これは外れた。他の御陵衛士残党らが槍や刀でもって怨みを晴らすべく襲いかかる。

警護の二人は殺害され、近藤もすんでのところで足を斬られそうになった。しかし側にいた島田魁らが刀で馬の尻をたたいて走らしてその場を逃れさせた。

間一髪のところでも命を取り留めたのだ。

しかし銃撃の傷は深かった。弾丸は肩の骨にまで達していて以後近藤は腕が上がらない。新選組の戦闘には参加できなくなったのだ。

病気の沖田総司と大阪に治療に赴き、以後新選組は土方歳三が隊長代わりとなる。

◇ 奇兵隊の先進性

知っての通り、長州と薩摩は幕末の紛争の中で西洋軍隊との戦争を経験した。長州は二度にわたって下関を通過する外国船を攻撃し、報復として四カ国連合の軍隊によって襲撃を受ける。

彼我の兵器の差は歴然としていた。大砲や船舶に至るまで当時の西洋の方が優秀であり、長州藩が浜にしつらえた砲台は艦砲射撃などによってほぼ破壊された。フランス陸戦隊が上陸して銃撃戦になると、長州側の火縄銃は射的距離や有効性が劣勢に追い込まれた。また刀槍で突撃した兵は、フランス陸戦隊の狙撃で犠牲者を出した。

長州藩にとって幸いだったのはこの一戦がただの敗戦で終わらなかった事である。いち早く彼我の実力差を思い知り、軍制改革に進んだのである。

武器と軍制の改革は村田蔵六 大村益次郎 の主導で為された。大村は従来の藩兵のあり方を改革して銃隊を組織し、それまでの火縄銃に代えてミニエー銃等を購入し足軽を施条銃隊などに編成した。他の組織形態や訓練も西洋の軍制を取り入れて行った。

幕末の内戦や欧米列強との紛争で明らかになったのが従来の支配層のふがいなさである。これは長州に限らないが、今まで特権を貪ってきた上士や正規兵が戦いにおいても質の悪さを見せることが多かった。

これが下級武士や非武士層の参画を可能にした一面であり、西洋の「国民軍」に似た身分を超えた採用する方式が生まれてくる。有名な奇兵隊のように新しい形式の軍隊の出現である。

長州には基幹部隊として奇兵隊方式の部隊が六隊（奇兵、鋭武、振武、整武、遊撃、健武）あり、いずれも下級武士や庶民が中心である。

「国民軍」の前触れとも言っていいこの現象は、幕末に日本各地の藩で同じタイプのものが現れてくる。服装も鎧兜や羽織袴とは異なり、動きやすい筒袖やズボン、靴を使用することが多かった。

こうした軍では最新式の兵器の入手にも熱心であり、従来の武士よりも柔軟性があった。

奇兵隊の軍制でユニークなものは、入隊前の職業で組織分けもあったことである。例えば来島又兵衛の遊撃隊では力士を集めた「勇力隊」、商人中心の「市勇隊」、神官や山伏の「金剛隊」があった。

その中で着目すべきは「狙撃」という「機能」に注目した部隊も創設したことであろう。獵師を中心に集めその名も「狙撃隊」である。

極めつけは「致人隊」である（「致人」は孫子にある言葉で「凡そ先づ戦地に処りて、敵を待つ者は佚し、後に戦地に処りて戦に趨く者は勞す。故に善く戦ふ者は、人を致して人に致されず」から）。

これは足軽などから広く射撃に長けた人間を募り、そこから選り抜いてまとめた小隊である。

その選抜方式というものが面白い。まず銅銭を天井から吊り下げ回転させ、そこから数十間の距離に居る入隊志望者に銃で狙わせる。銅銭が表を向いた瞬間に上手く狙撃して命中させるというのだ。

これをパスできたものだけが入隊できるというのだから、あたかも現代の特殊部隊の試験をも連想させる。こうした試行錯誤は後の幕末の内戦で効力を発揮していく。

## ◇ 長州征伐での狙撃戦

幕府の戦術は、禁門の変以降、朝敵とされた長州は第一次長州征伐では恭順の姿勢を見せ実際の戦闘に至らなかった。

しかし クーデターで高杉晋作ら倒幕派が政権を握ってからは強硬姿勢を強めた。こうして第二次長州征伐が開始される。

幕軍が上関口（四国方面）、芸州口（山陽道方面）、石州口（山陰道方面）、小倉口（九州方面）の四方向から攻めたことから四境戦争とも言われるこの戦いは、事前の準備から違っていた。

幕府は大軍ながらも、動員された諸藩は長州に同情的でほとんど戦わない藩も多かった。また連合軍としての統率も乱れていた。逆に長州側は奇兵隊などの民兵組織を練磨し、薩長同盟のついでで幕府側より遥かに性能の良い銃も揃えていた。

要するに士気、練度、装備、地の利で優位な点があったのである。

数で圧倒的に劣る長州側が幕府軍を撃退できたのは、これらの優位と地形を活かしたゲリラ戦術、それに伴う「狙撃」が活躍した点があった。

### 芸州口

芸州口は交通の要衝で、見過ごせない重要な戦略拠点であった。

国境の役目を果たす小瀬川において、彦根藩の井伊隊は急襲された。

井伊隊からは戦闘の一番乗りを目指して先鋒が突出する。しかし待ち構えていた長州の狙撃兵に次々に倒されたという。前線には狙撃の名手が揃えられ、射程と命中精度の高い銃砲で井伊隊を混乱に陥れたのだ。

軍装からして一目で違った。井伊側が関ヶ原以来の煌びやかな武者姿であったのに対して、長州兵は最低限の武器弾薬、黒の筒袖の軽装であった。機動力でも差があったのである。

西洋式訓練を受け練度も士気も高い兵隊だ。やがて井伊隊は総崩れに陥って退却した。

後方に待機していた高田藩は元からあまりやる気がなく、井伊隊が崩壊するのを見とろくに戦わずに退却した。初戦は長州の圧勝であったが、次に紀州藩の水野隊が出てくると変わる。

これは士気が非常に高く、装備も優良で手強い。四十八坂で交戦するも簡単には撃退できなかった。戦況は膠着状態に陥ってそのまま終結を迎える。

### 石州口

石州口で長州側の指揮をとったのは軍学者の村田蔵六（後の大村益次郎）である。

敵対するのは福山藩・浜田藩・津和野藩であったが、津和野藩とは事前に約束のようなものができていたらしく、全く戦わずに長州が領内通過するのを黙認された。

長州側は浜田領内に侵入し浜田城を目指すがそこでも狙撃の力がいかんなく発揮される。

長州兵は一斉射撃の後に散開すると、建物や木々の物陰に隠れて銃撃してくる。

選りすぐりの射手も豊富で狙撃の鍛錬も重ねている。使用するミニエー式の小銃は、射程距離と命中精度が幕府軍のゲーベル銃の倍はある。

そして狙撃戦術としては指揮官を中心に狙った。長大な射程距離を持ち、こちらの弾丸は届かず地面に落ちるのに、長州の弾丸は正確に命中してくる。浜田・福山藩側はパニックになった。

大將格が次々に殺されていくのを見て、狙いが指揮官クラスにあると分かると、派手な陣羽織や兜も打ち捨てられたという。目立たないように服を地味に染め直したので現地の染物屋が大いに繁盛したそうで、中には部下に自分の陣羽織を着せて身代わりとするケースもあったという。

大村益次郎は全包围には追い込まず、わざと退路を残して誘い出し、そこにも狙撃兵を潜ませていた。退却する浜田の兵も次々に狙撃されていく。特に大勢を決する一弾もそこから出た。

石州口方面の軍監は、幕府旗本の三枝刑部が選ばれていたが、胸に三発の弾丸を浴びて戦死する。その報を受けた浜田藩総大将、山本半弥は責任を感じて本陣のある万福寺の本堂で自害した。

浜田・福山藩はさらに運が悪かった。後詰の紀州藩兵に敵と見間違われて攻撃を受けたのである。これで混乱する中戦わずに退却する者もあり、石州口は長州藩が制圧することとなった。

他の場所でもいずれも長州が優位を占め、結果として長州は優位な形で講和に臨むことができた。

幕府側も第二次征討はあまりやる気がなかった事、傍観に近い藩が多かったのを思えば同情すべき点はあるかもしれない。

しかし大軍の幕府が長州領内に足を踏み入ることもできずに撃退された。

威信は大いに傷つけられ、以後幕府は崩壊の道をたどっていく。

### 長州戦争で見えてくるもの

長州勢の使ったミニエー銃は射程距離は600m以上、命中率は十倍はあったと言われる。これは現代の小銃と同じく銃身の内部に螺旋状の刻みが入れてある施条銃であり、筒内に条線の無い滑空銃よりも射程距離や精度が大幅に違う。

弾丸も先が尖った椎の実型で、点火されると弾丸の後部が膨張して施条に食い込んで回転しながら発射される。威力も精度も過去の火縄銃の円形の弾丸とは段違いだったのだ。浜田藩や福山藩の弾は射程距離がより短く弾丸が相手まで届かない。当たりも弱い。否応なしに劣勢に陥ってしまったのだ。

従軍した人の手記にもこの銃器の差による不満が残されているそうである。

この戦いでは鎧や鎖帷子など時代がかった装備も多かった。こうしたものを着込んでいて撃たれると破片が肉体に食い込み、治療にも余計な激痛を生むとわかった。

動きやすさの点でも不便だと、途中で鎧具足を捨てる者も続出したという。

要するに対外戦争の敗北から学んだ長州と同じ経緯をたどったのである。  
幕末の過渡期、戊辰戦争その他の戦で同じような例が幾つも見られる。

ちなみに西郷隆盛はこの時の経験から新政府軍1に対して幕府軍10と計算することができたと述懐している。

この時代はまだ近代化の端緒についたばかりである。それでも狙撃に関する両軍の対応が面白い。

攻める側は武功や敵への打撃を与えるために、敵の将校など重要な役割を果たす人間を狙う。狙われる側は上層部の人間とばれないよう服装や態度を変えた。

つまり近代戦で狙撃手に遭遇した際の対応とそっくりなのだ。  
(今でも将校とばれないように敬礼は見つけた方が先にする、階級章などをはずす、目立たないようにするなどの工夫がなされる)。

狙撃のもつ本質的なものは時代を問わないのだろう。

## ◇ 戊辰戦争

### 鳥羽伏見の戦い

慶応三年 18(67 慶喜は大政奉還し王政復古への道が開かれる。  
しかし徳川家は依然として巨大な勢力を保っており、新政権の薩長はそれを覆すために辞官納地（官位や領土を返上する）の要求を繰り返し、挑発を行った。

最終的に新政府側と幕府勢力は鳥羽伏見において激突する。

鳥羽と伏見の街道にかけて戦場は展開されたが、当初幕府側の態度は煮え切らなかった。  
数では圧倒しながら指揮系統は不備があり、まともな作戦や布陣も無く、薩摩側が着々と交戦態勢を取っていたのと対照的であった。  
これが薩摩に先制される結果となる。

幕軍主力は鳥羽方面を、会津・桑名・新選組・京都見廻組などは伏見市街を担当した。

幕軍は機制を制される形で混乱したが、京都見廻組などをはじめ戦意は旺盛で、抜刀や槍で積極的に反撃する軍も多かった。  
しかし密集隊形や行軍陣形のまま戦闘になだれこんだために、待ち構えていた薩長側の砲撃や狙撃的となってしまった。

幕軍にも新式の装備を持つ桑名藩や伝習隊などもおり、局地的には優勢になりそうになったこともある。  
しかし全体としては軍全体の組織的な未熟さ、火力や練度、戦術の差によって追い込まれていく。

原因として白兵戦にこだわり数の優位を活かさなかったこと、指揮官含めて兵がやたらと突出しがちだったこと、また中途の淀藩や津藩の離反、薩長が官軍と認定されて政治立場が不利であったこと、総大将のはずの慶喜が大阪城からいち早く逃亡するなど、上層部の指揮系統にも問題があったことなどがあげられる。

結果として幕軍は優位を活かせず敗退した。

### 薩摩軍の狙撃戦

薩摩兵は長州と同じく狙撃に関しての意識が高かった。狙撃兵を上手く活用し狙撃能力の高い者も多かった。  
開戦前から要所に狙撃兵を潜ませており、決戦場を十字砲火できるような配置にしたりと準備周到であった。

狙撃の方針では標的はまず指揮官や将校クラスだったという。  
優先度として 指揮官 砲臺とその指図役 ラ○バ手だったという。

また「斥候狙撃」という偵察と狙撃を兼ねた特別な兵もいたらしく、一月四日に幕軍の指揮官、第十一連隊隊長の佐久間信久と第十二連隊隊長の窪田鎮章を戦死させて撤退に追い込んだのもこの種の狙撃手とされる。  
ちなみに佐久間の場合は百メートル先の藪から狙撃されたと言われる。

現代の狙撃でも高級将校や中枢にあたる人物を標的にし、軍隊を機能不全に陥らせるのは常道である。  
その意味で言えばこの薩摩の戦術も狙撃の王道を行くものである。

またここでも高禄を食む上士が役に立たなかった現象が見られた。  
事実上の最高指揮官の竹中丹後守は不利になると仲間を置いて自分らだけ逃亡し、一番機敏に有能に戦ったのは下級指揮官であったという。

しかし勇敢な指揮官は自ら前線に出て兵たちを助ける。そのため突出する形になり狙撃されやすいという悪循環も生んでいた。

『むこうの兵隊 旧幕府歩兵 は騒動するばかりで怖れて出てこないが、士官はヒョイヒョイと進んで来るから、みな撃たれて倒れてしまう』  
という現場の証言も残されている。

この戦いで新選組は元からの隊士の約四割を失った。結成時からの幹部で六番隊組長の井上源三郎も腹を狙撃されて戦死した。

事実上の京都見廻組の長で坂本龍馬暗殺事件にも関わったとされる佐々木只三郎も腰に銃弾を受けて命を落とすなど、犠牲は大きかった。

## §合理的な薩摩合伝流 徳田邑興の指摘

日本史において薩摩兵は勇敢という評価がある。  
確かに軍事史――特に戦国から幕末にかけての薩摩の存在感は目立つが、この評価を真つ向斬り捨てるのが薩摩合伝流の軍学者、徳田邑興 17(38～1814である。

合伝流はそれまでの軍学諸派の優れた点を取り入れ、折衷させて成立した軍学で著しい火力重視を特徴とする。  
「飯を食うごとくに鉄砲に習熟せよ」と言われたそうで、弟子筋に戊辰戦争などで勝利に貢献した伊地知正治、西郷従道、淵辺群平、三島通庸など有名人も多い。

徳田は薩摩兵児が勇猛というを全否定し、戦国の世でも強かったのは薩摩兵が一兵に至るまで鉄砲に訓練し、鉄砲戦術に長けていたからだとする。  
つまりいくら勇猛だの言ったところで全員が鬼神のように強いわけではなく、一人で十人も倒せるわけがない。  
名将とされる島津義弘の戦術も、皆兵が鉄砲でもって敵を打ち崩すのに特色があったとする。

つまり他の大名のように騎馬や長柄槍でもって敵先陣を突き崩す手法ではなく、戦争直前に前積もりとして十人の鉄砲射手が交互に射撃するよう決めるなど、組織立った鉄砲戦術、要するに個人の武勇ではなく、火力に優れていたから勝ったのだ、というわけである\*

有名な関ヶ原の島津の退き口も勇猛どころか、こうした事前準備を怠ったせいで部隊の連携が乱れ、鉄砲を有効に活かせなかったためであるとする。

また徳田は、薩摩藩が当時流行していた甲州流軍学 甲斐の武田氏の兵法に基づくという触れ込みの軍学。観念的で非実用的な面があった を採用したことを厳しく批判し、自説が正しいのを長篠の戦いを引用して補強する。つまりその軍学の元である武田兵自体が鉄砲戦術の前に脆くも敗れ去ったのではないかというわけである。

徳田はこうした藩上層部をもおそれぬ批判を繰り返したので、舌禍で奄美大島に流されたこともあった。

しかしその発言は現代から見ても合理的で納得できる面もある。精神論やおとぎ話的な勇猛さよりも、火力重視で合理的な戦術で勝ったとするのは、近代の世界大戦を経験を思い起こせば説得力を持つ。

異論もあるだろうが、幕末の薩摩が殖産興業に熱心で先進的な軍制と武器を揃え、それが幕末の紛争で優位に立てたのは確かである。

例えば西南戦争が勃発したのも、政府が鹿児島にある武器弾薬を接収したのが原因である。

当時最新式の小銃であったスナイドル銃 三十年式が開発されるまで日本での制式小銃。元込め式で連射性に優れており、会津戦争では旧式のゲベール銃の兵士に対して優位を保てたとされる の弾薬の製造は薩摩がほぼ独占していた。

一地方ながらこうした軍事技術が先進的であったため、政府軍にも対抗できる潜在力の一要員であったとされる。スナイドル銃の生産設備が政府に奪われたことは、蜂起した薩摩軍が旧式のエンフィールド銃などで交戦するのを余儀なくし、それが劣勢に陥った原因ともなった。

個人的な勇猛さを謳われても、やはり西南戦争では装備兵員で上回る政府軍に最終的に鎮圧されたことを思えば、徳田の指摘を思い起こして考えさせられる。

\* 薩摩では半農の郷土や零細武家が豊富で、そのため他の土地では直接の戦闘に参加しない従者的な要員も歩兵として参加する割合が多かった 関が(原で井伊直政を狙撃した柏木源藤も正式な武士ではなく、陪臣で即党的な立場であったとされる。直政を射った時は功績を譲るために主人の名前を叫んでアピールしたという。晩年は困窮して町人身分に戻ったと伝わる 。 )

これがいわば国民皆兵のようにことごとく鉄砲を備え、射手として優れていれば確かに大きな戦力である。しかし実際にこうした組織だった鉄砲兵が揃ったのは薩摩も江戸後期とする説もある。

### 上野彰義隊の攻防

鳥羽伏見の敗戦で慶喜は上野の寛永寺に謹慎した。西郷と海舟らの交渉の結果、江戸城は無血開城したが、幕府側の抗戦派は彰義隊を結成して新政府との戦争を継続した。

彰義隊は意外にも装備も大砲や小銃も揃え、銃撃戦でも優位を示したという。また地形上、坂の上から迎撃できるという利点などもあり、意外に善戦した。山王台から砲撃を繰り返しては昇ってくる新政府軍を撃退した。

天王寺・谷中門口方面では寺など遮蔽となる建造物が多い。それらを遮蔽物に使って長州・佐賀兵を狙撃して足止めた。

長州は当時最新鋭であったスナイドル銃 他(の前装式と違い、後から装填できる で威力を発揮できる予定だったのが、弾丸が不足して事前の訓練が無く、新式の銃の使い方がわからない兵隊が続出、混乱の中で一時後退する。

この方面が壊滅しなかったのは佐賀藩士がいたからである。スペンサー銃 後装のボルトアクションで七連発可能 で操作にも手馴れており、訓練も十分だった。佐賀藩士の攻勢によって彰義隊も押され始める。

黒門口でも作戦が変更され彰義隊に対抗して「狙撃戦術」が取られた。

特に黒門口の東の「雁鍋」という料理屋が攻撃に都合の良い場所であった。狙撃の標的として敵の指揮官が中心となった。

この狙撃戦術は当たり前して戦況を変える。

彰義隊一番隊長の土肥八十三郎をはじめ多くの隊士が狙撃死して現場は混乱、彰義隊の攻勢は弱まる。

ここで登場したのが有名なアームストロング砲であった。佐賀藩は幕末より銃砲開発に熱心で他のどの藩より強力な大砲を所持する軍事先進藩でもあった。

最初は砲弾の命中率は低かったという。しかし砲撃の中で習熟していくと狙いが正確となり威力を発揮する。

強力な砲撃効果を持つこの大砲は山内の吉祥閣や中堂にも着弾し始め、彰義隊の反撃の力を見るからに落ちていった。

勢いに乗じて新政府軍の決死隊が内部に突入し遂に彰義隊守備隊は打ち破られて戦況は決した。

### §コラム 奇銃・隠し鉄砲

「狙撃」というと要人を狙った暗殺が連想されやすい。戦場以外の場所では不意打ちや隠し持った武器で狙うというイメージもあるかもしれない。ある程度面白い小型武器は実際に存在していた。

### 馬上筒

近代戦では英語でカービン銃と呼ばれる騎兵用の銃がある。銃身が普通の小銃よりは短めで、これは銃を背負って馬に乗っても扱いやすいよう設計されている。輜重兵や砲兵など馬で荷物や武器を牽引する機会が多い兵種にもよく配備された。

こうした馬上で扱う兵器は戦国時代にもすでに存在していたという。騎馬武者が騎乗で使うのが専用銃があったのである。それが「馬上筒」として残されているものである。

今で言えば拳銃程度の大きさで、外観は火縄銃をそのまま小型化した形状である。

ただ火縄銃が原型であるので、施条の無い滑空銃で連射がしにくい。小型化でさらに射程や命中率で劣る。そしてそれなりに重たいので馬上で扱いにくい。

また馬はかなり鋭敏な神経をもっていて、銃声に慣れてないと至近距離で発砲ただけで動揺する。主目的は轟音による威圧とか、どこまで狙撃として実用に仕えたかは疑問な所もある。

また当時の馬上はいわば身分を表すシンボルのな部分もあり、大陸の騎馬軍団のようなものは想定しにくいという。大々的な騎馬突撃のようなものがあつたかは怪しく、宣教師の「馬から下りて戦う」といった記録などから、移動手段が主だったのではないかといった見方がある。  
\* 1

つまり騎乗の狙撃がどれだけあつたかは分からない。

いくつかの肯定的な記録もある。  
ばじょうしゅくしゃづつ  
歴史好きの人なら真田幸村の「馬上宿許 筒」や伊達政宗の「騎馬鉄砲隊」を知っているだろう。

真田の「宿許筒」は現物も残されている。  
制作者は堺の鉄砲鍛冶の芝辻と言われ、なんと八連発式の馬上筒という。

発射するたびにふたが開閉し、一銃撃分の火薬と弾丸が装填される。  
この半自動式の機構のため、普通の火縄銃の数倍の速度で装填と銃撃が可能な代物である。

逸話では幸村はこの宿許筒によって家康を狙撃する寸前であつたが、その場にとり落としてしまったという。

この伝説が本当で狙撃が成功していたならば「スナイパー真田幸村」が歴史を変えることになっていただろう。

伊達の「騎馬鉄砲隊」は大阪夏の陣で活躍したとされ後藤又兵衛らを討ち取つたとされる。  
言い伝えでは二人で一組になり、一人が狙撃手、もう一人が馬を制し、馬も馬上狙撃用に銃声にも慣らしてあつたという。  
ただこれにどこまで史実的な信憑性があり、実戦で効果があつたかは分からない。

『別所長治記』では秀吉が播磨三木城の別所長治を攻めた際に  
「近習の侍百五十騎、各返し合、馬上に鉄砲を持ち、敵相五六間に成時、一度に打ちける程に、秀吉方百五、六十人、馬より打落さる」という記述が残る。

また『太閤記』の徳川家康の部下奥平信昌の話では、小牧長久手の前哨戦、羽黒の戦いで羽柴秀吉方の森長可の馬上の使番が徒士十四五人連れて目の前を何度も行き来したため、配下の騎馬武者に狙撃するように命じると「馬上の侍共ひしひしとおりたち、鉄砲を以彼武者を打ち倒す」とある。  
これらは馬上筒だったかははっきりしないが騎馬武者による狙撃である。\*

それなりに馬上の狙撃もうかがわせる記述ではある。

幕末なども銃砲の大量流入の結果、「弓馬の道はこれからは銃馬の道と称すべきだ」と主張した話も残る。  
戦国時代でも馬上で弓の代わりに銃を使う発想が生まれても不思議ではなかったろう。

\* ちなみに日露戦争でも秋山好古の率いる騎兵隊は、ロシアのコサック騎兵に対して下馬していわば歩兵のようになって機関銃の銃撃を繰り返し撃退に成功したそうだ。

## 隠し鉄砲

コレクターには有名だが、正規の小銃の構造を元に、様々な変わり種の鉄砲も生まれた。

幕末の鉄砲鍛冶、佐野三郎常忠の制作品には、毒や砂を弾丸代わりにし、息を吹き込んで目潰しに使う「砂鉄砲」「そくとうき息討器」などがある。

他にもいわば「暗器」の一種として偽装された小型鉄砲がある。

例えば握り鉄砲、たなごころ 掌 鉄砲と呼ばれる極端に形を削ぎ落として短い棒のようにした物 握にぎりぎりりことで撃針を動かして射撃する、+)手型の鉄砲、扇や本物のキセルを象つた小型鉄砲、矢立の道具に見せかけた鉄砲。杖、脇差、印籠式などあらゆる物がある。

これらは現代から見るといかにも暗殺者が使うのにぴったりなイメージである。  
さぞかし狙撃にも使われたろうと推測してしまう。昭和天皇が皇太子時代に狙撃事件で使用されたステッキ銃を連想する人もいるだろう。

しかし実情は怪しいという。

実はこうした隠し鉄砲は明治から昭和にかけて職人によって多数作られた偽作が多いのである。  
いわば江戸時代の狙撃用具がそのまま残されているのではなく、古式のイメージでもって作られた新しい銃器なのである。そのために豊富に数が残り、目にする機会も多い。

大昔から現役で使われた物はかなり少なく、また実際の暗殺や狙撃用に使われたと見ると誤りになりかねない。

これは江戸期の武士の気風から考えても分かる。  
現在の欧米でも同じだが、通常の戦場での不意打ちや狙撃でさえ「卑怯」として非難する視点はある。  
江戸期の体面も重んじた武士がこの種の武器を好んだかどうかは果たして不明である。

護身用に持ち歩くのはぴったりなイメージだが、どちらかといえば「銃にも使用できる」日用道具としてが主であり、狙撃不意打ち暗殺目的に偽装されて作られたとみると本末転倒なところもあるようだ。

実際こうした隠し武器での狙撃例はあまりない。  
商人などが護身用に携帯したことはあつたらしいが、昔の性能の悪かつた鉄砲をさらにコンパクトにしているために、実用としてはかなり使いにくかつたようだ。

## ◇ 北方の抵抗戦

鳥羽伏見は新政府軍の勝利に終わったが、旧幕勢力の抵抗はまだ続いていた。  
戦場の舞台は東北部に移りつつあつた。

越後の長岡藩は当初は中立を守つた。  
どちら側にも与しない姿勢だったが新政府側はそれを許さず、遂に他の奥羽の諸藩と同盟を結んで戦争することとなる。

長岡藩は十四万石程度ながら軍事にはかなり先進的な面があつた。

これは河合継之助の力によることが大きい。

河合は若い時から砲術を好み、雨が降ろうが風が吹こうが射撃の稽古に熱心であったという。そのため五十間ほど離れていても、正確に命中できるまでに上達した。「射ち合いになったら、自分が無傷とはいかなくても必ず相手にも当ててみせる」と豪語していたという。

佐久間象山や有名儒者に学び西洋の学芸にも理解があり、洋式訓練を取り入れ新鋭の武器購入にも熱心であった。有名なのが当時日本に三つしかなかったガトリング機関銃の購入だろう。一分間に二〇〇発以上を発射できるこの銃砲は新政府軍の迎撃にも使われた。

慶応四年（1868 五月）二日、ついに新政府軍と開戦となる。同盟相手の会津藩や米沢藩、庄内藩、桑名藩なども参加しての激闘になった。

長岡藩は過去に長州の奇兵隊に痛い目に合わされた経験がある。そのためかこの戦いでは相手のお株の奪うかのようなゲリラ戦を展開して苦しめた。

長岡側は数で劣っていたが手ごわく、抵抗も頑強であった。

### 朝日山の戦い

新政府軍は占拠していた榎峠を奪回されたため、再度攻撃を仕掛けるため朝日山の確保を目指した。

山には桑名藩兵と長岡藩兵が布陣しており、中でも桑名藩の立見鑑三郎（直文）。雷神隊隊長（指揮）が極めて巧みで、新政府側は立ち往生して突破できなかった。

五月十三日の早朝、濃霧が発生する。奇兵隊参謀の時山直八は霧を利用して強襲を試みることを考え、奇兵隊二〇〇人を引き連れて山を登る。

しかし濃霧は攻め手側にも負担であった。視界が効かないために東軍の前に遭遇することとなり、雷神隊隊長の立見も冷静な指揮で守備を混乱させなかった。逆に時山側は十分に引きつけられてしまい、一斉射撃を喰らって奇襲は失敗する。

あまつさえ時山直八は雷神隊の三木重左衛門に顔面を狙撃されて戦死した。指揮官を失って攻勢は崩壊、守備側の猛射もあまりに激しく、長州兵は時山の死体も収容できず、首だけかき切って持ち帰ったと言われる。

このように局地的には長岡藩側が優位に立つこともあった。しかし新政府側は迂回して城下町を奇襲して城を奪ったりと徐々に物量で押していく。

しかし一度奪った長岡城も河合の指揮の下で再び陥落させられてしまう。異例な状況が続出し戦況は混迷を極めた。

なおも長岡藩は抗戦続行中、指揮官の河合が床机に腰を下ろして休息していたところ、狙撃されて膝に重傷を負った。これにより河合は現場指揮能力を失ったために長岡側の士気も低下する。奇襲に参加するはずだった米沢藩も敵に阻まれ、新政府側の反撃も激しくなってきた。再度長岡城も落城した。長岡藩や東北の同盟諸藩は会津へと落ち延びた。河合はこの時の傷が元で破傷風となって死去する。

新政府側は勝利したものの、小藩の長岡藩に苦戦を強いられ、城を奪い返されるという失態、奇兵隊重鎮の時山も失うなどの手痛い被害であった。

元勲の間でも後々まで東北諸藩を戦争に追いやった失敗や苦戦で苦い思い出となったようである。

### ◇ 長岡城下の戦い

たかのひでえもん  
●高野秀右衛門 奮戦した老狙撃者

（七左衛門 寛政四年1792～慶応1868 越後国 ）

この最後の陥落戦で、長岡城下には高野秀右衛門という藩士が居た。当時すでに七十七歳で息子の貞吉が従軍していたが、戦況の悪化で会津に落ち延びていた。

秀右衛門も戦火を避けて脱出するよう勧められたが、あえて自宅にとどまった。城下に新政府軍の兵が侵入し始めると、なんと避難するどころか、十刃の火縄銃を持ち出して、自ら堤の上から狙撃しはじめたのである。

狙いは正確で最終的に反撃を喰らって戦死するまで数十人は撃ち倒したというからすごいものだ。

老いたりといえども自分の生国を守る気概を見せた老武士である。そしてこの逸話を子供の頃から度々聞かされていた人物がいる。

血筋的には秀右衛門の孫で、名前を山本五十六。のちの帝国海軍の連合艦隊司令長官である。

### § コラム ガトリング機関銃の効果は？

ガトリング砲は自動機関銃の先駆となる銃砲で、一八六一年にアメリカのリチャード・ガトリングによって発明された。六～十本の銃身が軸に円状に取り付けられ手動のクランクを回して発射する。

一分間に二〇〇発以上の銃撃が可能ということで当時としては斬新な新式銃砲であった。

河井継之助は大金をはたいてこの最新式の銃を購入し北越戦争で使用した。日本で初めて実戦で機関銃が使用された例と言われている。

ただ実際には期待したほどリーサルウェポンのような効果はなかったという。それはガトリング銃の持つ本来の欠点が露呈してしまったためである。

まず最初の使った戦闘では河合自身が操縦して敵兵を攻撃してみせた。その威力を自慢し周りを鼓舞したとも言う。

しかし河合は日本の地形を考慮していなかった。

まずガトリングは当時の軍隊の戦術を元に考え出されていた。つまり南北戦争までは見られたように大陸平野などに密集した軍団が、指揮のもとに一斉攻撃を仕掛ける方法である。

こうした場合は大量の銃撃が可能になるガトリング砲はそれなりに効果を見込めるかもしれない。

しかし山地などで散兵戦術を取られた場合、思うような成果をあげにくい。

砲自体にも欠点があり、構造上故障しやすかった。黒色火薬を使っていたために煤詰まりも起きがちだったのだ。

結局は局地的に威力を発揮しても、兵員の数の差によって押し切られてしまうことも多かったという。

実際に長岡の戦いで露呈した欠点は海外でも同様だったようである。「散兵で少人数ずつで接近されると上手く対応できない」、「機動性に欠けて狙撃的にもなりやすい」など、批判が残されている。こうした欠点から後年の単銃身のマシンガンにとって代わられた。

ただしガトリング砲で成功した戦いもある。局地防衛戦や海上での戦闘である。

明治二年の三月、戊辰の終局となる函館の戦争では宮古湾海戦があった。

新政府側の軍艦・甲鉄に対し、軍艦・回天の乗員が体当たりして接舷し中に斬り込みを図るという奇襲戦術に出たのだ。大胆不敵な襲撃ながら、甲鉄に侵入した旧幕側は備え付けてあったガトリング砲に文字通り蜂の巣にされたという。

回天艦長の甲賀源吾も腕や胸を撃たれ、なおも抵抗しようとしてこめかみを銃撃されて戦死した。

このような一方的な戦いになった理由は現場の状況にある。

狭い甲板で密集状態になったためにガトリング砲がもっともその威力を発揮できたのである。実際に世界の戦史でも、海賊の襲撃や接舷攻撃の撃退などには役に立ったという。

### 二本松の戦い　攻勢を防いだ少年たちの銃弾

鳥羽伏見が決着して戊辰戦争にもつれこむと、新政府軍は東北にも勢力進出していく。会津藩への寛大な処置の嘆願が拒否され、仙台藩によって新政府軍参謀の世良修蔵が暗殺されると戦争が開始する。

二本松藩は十万石程度の小藩ながら奥羽街道の重要地にあった。また藩士らは忠孝精神を叩き込まれていて不利な状況ながら藩を守って戦うことを選んだ。

しかし小藩であり動員力も少ない。装備も旧式のものが多かった。結果として少年や老人に至るまで動員されることとなる。

二本松藩の砲術師範の長男、木村銃太郎は父に子供時代から砲術の手ほどきを受けていた。また武家としての厳格な気風な中で育てられたという。

十五歳頃には藩の射撃の試合で一位を取るほどの腕前になった。成長すると江戸に遊学して砲術を学び帰国してからは砲術の若先生になる。

道場では技術だけでなく父譲りの厳格な意志や人格養成も重んじられていたという。そのため二本松の戦いでも薫陶を受けた少年隊士らが奮闘し、会津の白虎隊と並ぶ悲劇をも生む。

まずこの少年隊は阿武隈川の渡河を図る土佐の断金隊隊長を狙撃して倒すなど、要所では奮戦もあった。しかしやはり数と火力の差で押されていき、二本松城をめぐる攻防になる。

兵員不足のため銃太郎は少年隊の隊長を命じられていた。大壇口の要地防衛を任せられたという。意気は盛んでも少年隊はすべて十代であり、最年少は十三歳であった。

しかし隊士らは銃太郎の薫陶を受け士気も高い。圧倒的な火力と数の劣位の中銃太郎の指揮ぶりは堂に入っており、狙撃も正確であった。

一度は薩摩側的小隊指揮官、日高郷左衛門を砲撃で倒すなどの戦果をあげ、攻略を担当した野津七治　後の道貫。陸軍大将　は後年「地物を利用して射撃は極めて正確であり、一時はまったく前進を阻害された。おそらく奥羽戦争中でも屈指の激戦であったろう」との証言を残している。

しかし戦況は時を追うごとに不利になっていく。各陣地は陥落してついに二本松城も陥れられた。

少年隊は連絡が途絶し、敵中に孤立して置き去られる形になってしまった。銃太郎は左腕を狙撃されて負傷しており、戦況を判断し、「今はこれまで」と退却を命じるが、その時に腰を弾丸で貫かれる。

射程距離の長いスナイドル銃による狙撃だったと言われる。

後方に搬送されようとしたが、もう助からないと判断する。「俺の首を敵に渡すな」と副隊長の二階堂に介錯させたという。

副隊長の二階堂は銃太郎の首をもって退却しているところを大隣寺で狙撃されて戦死した。付き添っていた隊士の岡山篤次郎も腹を射ち抜かれる。その勇敢さに感動した長州側の人間に治療所に運ばれたがそのまま戦死した。

指揮者を失った少年隊たちは戦場でばらばらになるも、降伏せずに相手の小隊長を刀で討ち取るなど、最期まで抵抗した様子が伝わっている。



◇ 新選組 北の戦場に散った鬼の副長

土方歳三 天保六年1835～明治二年1869 武蔵国)

- 米田幸治？ タイチ？

幕府が瓦解する中、土方歳三ら新選組の生き残りはなおも転戦を重ねて新政府への抵抗を貫いていた。しかし戊辰戦争も最終局面を迎え、函館の五稜郭にまで追い込まれていた。

既に元隊長の近藤勇は甲府で新政府側に捕まり処刑されていた。また隊士も激減していた。

北海道に独自の新政権を作ろうとする榎本武揚の試みは失敗し、旧幕勢力の最後の抵抗も官軍の総攻撃の中で崩壊しつつあった。

最後の抵抗となる一連の戦いで、土方は二股口の戦いで新選組を率いて果敢に抵抗した。敵の軍監の駒井政五郎を銃撃で倒すなどまだまだ勇敢に戦果をあげていたが、他の戦線が突破されたこともあって一時箱館に退却した。

新政府側の箱館総攻撃が始まると、黒羅紗のマントルにズボン、白締め、刀を差し陣羽織を羽織って抗戦する。しかし弁天台場付近で孤立した隊士らの救出に向かって一本木関門の地にて奮戦、馬上で指揮をとり続けるも腹部を狙撃され絶命した。

ただ土方の最期には様々な不明な点がある。戦死した場所や狙撃者でさえ複数の説があるのだ。

狙撃者候補として松前藩の米田幸治という藩士、もしくは鉄砲の腕を見込まれて戦闘に参加させられていたタイチという獵師ともいう。他にも徹底抗戦を主張する土方を味方が狙撃して亡き者にしたという話も残る。＊

かつて「鬼の副長」と呼ばれて勇猛さを見せた男も、現在では埋葬された場所も分かっていない。

＊ 土方は、宇都宮城の攻防では戦線から逃亡しようとした味方を斬り捨てた。箱館でも逃亡者は斬ると言明していた。元来が武士身分ではなかったことも含め、こうした行為で恨みを買っていた部分があるらしい。

§ コラム 秘伝書の中身とは

砲術諸流派はそれぞれが一派をなし独自の流儀がある。各流派には剣術や柔術などと同じく奥義なところを示した秘伝書も存在している。

「秘伝書」などというと、素人には好奇心をそそられるものがある。これは長年武道がフィクションの世界で神秘的な様相をまといわされてきた影響もあるだろうが、砲術に関して言うとなじりやすい実用書である。

むしろ砲術秘伝書の特徴として「江戸時代としてはもっとも合理的な存在」＊なのである。

砲術は初期の限定的な名人から裾野が広がり、江戸末期には何百の流派を数えた。中期以降には蘭学経由の西洋流砲術も広がって大砲から小銃までそろっている。

ただし砲術諸流派は基本的に他の伝統文化と同じく、秘密主義や資料に乏しい所があった。それでも断片的、もしくはある程度まとまった形で「秘伝書」が残っている流派もある。

まず代表的なものとして稲富流の伝書をあげたい。

開祖は天下の名人とされ、幕府高官や大名にも弟子が多かったため、格式も高かった。比較的資料が豊富であるため、博物館や資料館でもよく目にする。

特に中期以降の稲富流の伝書は長大であり、彩色された挿絵も鮮やかで美術的な資料価値も認められている。このあたりの豪華さは幕府お抱えで弟子や経済的に恵まれた一端も示しているのであろう。

図画類の特徴としては鶴や鴨など狩猟の対象となる動物を丁寧に描き、急所を赤い点で示したり、撃つ間合いの教授もある。

人物の特徴として一番目立っているのが、ほぼ裸であることである。腰回りをわずかに覆った程度で描かれていることも多い。

これは一見奇妙に見えるが、鉄砲を構える際の姿勢や手足の置き方を正確に知らせるためと言われている。

浮世絵の図画集などでも、あえて裸の姿で筋肉や身体の形をリアルに学ぶ手法があったというが、砲術秘伝書も同じ発想に立っているのかもしれない。

広範囲に及ぶ内容

伝書の中身も単純に射撃技術だけではない。砲全般を大きく扱った今でいえば工学的な内容も含むのだ。

流派の来歴や銃砲の整備と製造方法、弾丸の作り方や工夫、火薬原料の選び方や調合の秘伝、それぞれの環境に合った射撃、弾道、射角の知識など、流派で試みられてきた科学的なデータも集められている。

いわば鉄砲に関する工学、薬学、冶金、物理、数学に類するものも集積されているのである。総合的な鉄砲の教科書でもあった。

科学的な理由

実用的で科学的であるのは、鉄砲が歴史の中で新しい時期に入ってきたこともあるだろう。文明の利器というべき実用品で、工夫や修練の結果も実地に反映されやすい。

自然に超自然的なものや宗教的要素は少なくなる。

もちろん近代以前のことで、多少の呪法やジンクスに似た記述もある。例えば狩猟では動物の命を奪うから特定の文言を唱えて成仏させたり、邪気を払うといった話だ。剣術にも似た精神論や忍術のまじない的なものもあるし、近代科学の発祥の地ヨーロッパでも、狙撃にあたり神父に弾丸を聖別してもらう話や、弾頭に十字を刻んで命中率を高めるなどの非科学的なジンクスはあった。

こうした心情は人類共通のものなのであって、払拭できないのかもしれない。

秘伝書に見られる「知」のあり方

「一子相伝」や「秘伝」などの言葉で分かるように、伝書は万人に開放されていたわけではない。普通砲術の師匠に入門するにあたっては誓紙を提出していた。そこには精進や覚悟のほどを記し、教わったことを絶対に他人に口外しないと神仏にかけて約束するといった文言が見られる。

これは弟子がどんなに高位の人物でも同じである。徳川家康が柳生流に入門した時の起請文が残っているが、そこには「親子たりといえども他言すべからざる事」「この旨、偽るに於いて者、日本国中大小神祇、殊に摩利支天、天当御罰を蒙る者なり」などの文言が並ぶ。

こうした秘密主義的なところは武芸だけでなく、他のお稽古ごとでも似ていた。当時は幕府や朝廷の儀式、行儀作法のあり方、古典の読み方や難読の漢字などもお金を払って教授してもらうのが普通だったのである。

それによって教える側も生計を立てている面もあり、現在よりも「知」に関する秘伝意識は強かったのである。

周知のようにヨーロッパも近代を下るようになると、知の公開性が大きくなる。江戸末期にあちらの百科事典が入ってきた時には、普通は秘伝にすることが堂々と公開されているので学者たちは驚いたそうである。どうやって食べていつてのかと不思議に思った話もあるとか。

砲術も当時の慣習や流儀を踏襲していたところがあったのだ。非常に近代的な内容が見出せる反面、伝統的な器の中に盛られていると言える。

神秘的な魅力がありつつも、「知の公開性」というものについて一考させられる存在である。

＊ 所壮吉『日本武道全集 4』

◇土族反乱

明治政府が成立すると対外関係の問題も出てくる。政治の分野でロシアの脅威に対抗する形で征韓論は大きな論題であり、これが元で征韓派は下野することになる。

廃藩置県、版籍奉還、廃刀令など土族の反発を買う政策も次々と打ち出され、新政府の腐敗や政治運営に対する不満は大きく高まってきた。

不安定な時代の混乱はいくつかのテロや武力蜂起の形で爆発した。

佐賀の乱

江藤新平ら征韓党と、封建制への復帰を目指す島義勇らの憂国党が中心となって蜂起した。徴兵令の施行以後、近代的な国民軍による初の戦闘行為であった。

まず熊本鎮台が鎮圧に向かって佐賀城に入城し、各地の鎮台から軍が派遣された。

反乱土族らは佐賀城を包囲して攻撃を開始した。兵員と装備で劣ると思われた土族側は意外にも優勢で、当時大尉であった奥保鞆 日露戦争の第一軍司令官。元帥 は狙撃されて左腕と胸に弾丸を受ける。少佐で参謀であった山川浩も狙撃されて左のひじの骨を砕かれたと言われる。

土族側の果敢な攻撃と食料弾薬の不足で、県令の岩村高俊と熊本鎮台兵は城から撤退した。

しかし政府は佐賀征討令を発し続々と鎮台兵を送り込んでくる。

大久保利通の監督の下、政府軍は福岡、長崎方面など合計三方向から進撃したが、寡兵ながら蜂起軍は善戦する。これは軍隊経験者や有能な参謀が居たこともあると言われる。

何度か政府側を打ち破り、時には包囲殲滅寸前にまで追い込んだ。

野津鎮雄の参謀であった児玉源太郎は、中隈での戦いでは自ら陣中であって奮戦した。旗を片手に味方を鼓舞したが、腕などを三発も狙撃された。しかし士気の低下を恐れて重傷ながらあえてその場にとどまって指揮し続けたという。

続々と投入される兵隊と豊富な兵站に佐賀側は押されはじめる。遂には各所で敗北を重ねはじめて、戦線は崩壊した。

江藤や島義勇ら幹部は鹿児島に援軍要請に落ち延び、乱は集結を迎える。

神風連、秋月、萩の乱

佐賀の乱から二年後に敬神党を名乗り、「神風連」とも呼ばれていた旧熊本藩士の太田黒伴雄ら一団が決起する。

鎮台司令官の種田政明を射殺し熊本県令の安岡良亮宅や多数の役人を暗殺し、一時熊本鎮台に攻撃を仕掛けて砲兵營を占領するも、翌日に政府の増援によって反撃されると崩壊、首謀者の太田黒伴雄は銃撃されて重傷を負い民家で自決した。

乱は瞬く間に鎮圧されたが、事前に秋月や萩との不平士族とも連絡をとっていたと言われ、両方の地で呼応するように反乱が起きる。

福岡の旧秋月藩の藩士を中心に結成された秋月党は、明治九年　1876　十月二十七日、城下の田中天満宮にて決起した。明元寺で警部を斬殺し　日本初の警官の殉職と言われる　、豊津に進軍して現地で一斉蜂起を要請するが果たせず、小倉鎮台に急襲されてあっさりと壊滅してしまう。

萩の乱を主導した前原一誠は、政府施策への不満だけでなく、義理の親族にあたる木戸孝允とも対立した。国民皆兵の徴兵制度をめぐる士族側に立った主張を行ったせいだが、これが原因で木戸に猜疑心も抱くようになる。

明治四年、夜中に自宅に居るところを六発の銃弾で狙撃されて負傷するが、これが木戸によるものだと考えてさらに憎しみを募らす。

神風連の乱と秋月の乱に呼応する形で決起し、天皇に直訴するつもりだったという。しかし流言によって萩に引き返して政府軍と交戦する。政府軍は大阪や広島を鎮台を中心にして数が多く、銃撃戦の結果敗北に追い込まれた。

この戦いで、前原の腹心で一番隊長の玉木正誼が狙撃されて倒された。玉木は乃木希典の弟であり、吉田松陰の育ての親である玉本文之進の養子でもあった。　ちなみに吉田松陰の甥の吉田小太郎もこの反乱で敵陣に斬り込んで戦死）

前原は現場の戦闘を側近に任せ、再び直訴に東上するが島根で逮捕される。萩でも政府軍の総攻撃で士族反乱軍も完全に壊滅し、前原も萩に連行されて処刑された。

背後には木戸の謀略もあったという説が絶えない。

## ◇ 西南戦争

他の士族蜂起は「乱」と称されるが、薩摩の蜂起は「戦争」と呼ばれる。その規模が桁違いだからである。官軍側は死者約六九〇〇名、戦傷者九二〇〇名、西郷側の戦死者約五千名、戦傷者約一万。両軍の死傷者の合計は三万人を超える。

初戦は鎮台兵の守る熊本城に進撃し、宮崎から大分など九州中南部の広範囲にかけて暴れまわったが結局は官軍に鎮圧されて終わった。

征韓論をめぐる紛争、反士族的な政策、政府高官の不正などで対立しているところに、政府によるスナイドル銃の弾薬接収、偵察の派遣や西郷暗殺の噂などで緊張はピークに達し、最後は爆発した。

政府が先手を打って接収したスナイドル銃の弾薬と生産設備は、戦争の帰趨を大きく左右したという。

後装式のスナイドル銃は、前装式の銃砲より容易に速射できる。前装式だと筒先から弾丸や火薬を入れるため、時間と手間暇がかかるのである。そうした遅延は戦場では命取りになりかねない。

戊辰戦争でも数では負けていながら幕軍を押すことができたのはこの銃の力が大きいという。

専用の弾丸を使用するため、大量の生産設備が必要となる。これはほぼ薩摩が独占していた。そのことが政府に一種の脅威ともなっていたのである。

ここが政府に奪取されたことで、薩摩側は旧式の前装銃での戦闘を強いられた。

護衛も選りすぐりの狙撃隊

西南戦争でも狙撃事例がよく見られる。総計三万名程の薩摩兵が従軍することとなったが、西郷の本営は選りすぐりの狙撃隊によって護衛された。

戦争勃発の一因は、政府が刺客を放って西郷暗殺を企てたというものもある。そのため西郷の周りには護衛部隊が常駐し、そこには主に狙撃技術に秀でた兵隊が選抜された。

本営附護衛隊長は淵辺群平であり、彼の学んだ軍学流派は、火力重視で鉄砲技術を一番にあげる合伝流である。

戦局が悪化して転進を重ねる時も護衛部隊は持続し、最終局面の可愛岳を通じて落ち延びた時にも別府晋介が残存の狙撃隊六〇〇人を率いて護衛していたという。

このように薩摩兵は西洋式の狙撃訓練によって養成され、少なからず優良な狙撃手がいた。また幕末以来戦闘経験も豊富で士気も高かった。

それでも当初の熊本城攻めで防御にあたる鎮台兵らの銃撃はなかなかのもので、熊本城も難攻不落の要塞であった。

戦争経験の無い農民兵と侮っていた薩摩軍は少なからずの犠牲を出し、力攻めは不可能だと悟る。長期包囲の作戦に変更する。

まあ神風連の乱の鎮圧に功績のあった与倉知実連隊長も狙撃で戦死したりと、狙撃戦で双方に犠牲者が出た戦いであった。

軍旗奪取事件

開戦すると各地の鎮台から続々と兵士が派遣されてきた。当時少佐であった乃木希典は第14連隊を率いて久留米から植木町に転進した。強行軍であったため植木に着いた頃は、人員が二〇〇名ほどになっていたとされる。

鎮台兵到着を聞きつけた薩軍は、村田三介・伊東直二の小隊四〇〇人ほどが迎撃に向かう。この時の戦闘で、乃木の連隊の軍旗旗手、河原林少尉が狙撃されて戦死し、連隊旗が奪われるという事件が起きる。＊

連隊旗は天皇から下賜され、連隊が死守すべき名誉のかかったものとされる。奪われると軍人として恥辱であった。



西南戦争は第三旅団参謀長の地位にあったが、熊本の岩村で頭部を狙撃される。病院に運ばれたが傷が元で死去、長州は有為な人材を失った。

西郷一家を襲った狙撃の悲劇

薩摩側の従軍者には、西郷隆盛と二十も年の離れた弟の西郷小兵衛がいた。

気質が最も西郷に近く、末っ子でもあるせいで西郷も一番愛情深く可愛がっていたという。西南戦争では第一大隊の第一小隊長であった。

二十四日、派遣されてきた政府主力と熊本の菊池川の近辺で薩軍は激突する。その流れで二十七日、稲荷山の占拠をめぐって政府第二旅団と攻防となった。

この時に篠原国幹の一番大隊が弾薬が尽きたと一方的に退却し、それに伴い第一小隊の小兵衛も後退したが、その流れで高瀬街道での交戦となる。その際に小兵衛は胸を狙撃されて倒され、西郷に先立つことを詫げる言葉を残して死去したという。三十一歳であった。

同じく西郷の息子に奄美大島に配流時代にできた西郷菊次郎がいる。アメリカ留学から帰国してから西南戦争に参戦、延岡・和田越えの戦闘で右足を狙撃されて負傷、膝から下を切断することになる。

西郷が全軍に解散令を出してから西郷従道のもとへ降伏するように運ばれた。

戦後は生き延びて後に京都市長や台北県支庁長などの職に就いた。

むらたつねよし・つねふさ

- 村田 経 芳 国産銃開発者にして一流狙撃手

（勇右衛門 天保九年一八三八～大正十年一九二一 薩摩国）

村田経芳は、幼少の頃より合伝流や荻野流の砲術を学び頭角を現した。

道場時代からあまりに射撃の技量が優れているため、誰も村田と競おうとするものはいなくなったという。梅干の種を空に投げて撃ち抜く事ができたとか、全力で疾走する獣類にも百発百中だったなどの逸話が残る。

長じては藩主の島津斉彬に認められて銃砲研究も行った。

幕末、横浜には西欧の武器商人や日本の賠償金支払い監視のための駐留兵が何百人もいた。そこでの射撃大会にも飛び入りで参加して第一等となっている。

幕末に人斬り半次郎と呼ばれた中村半次郎 後の(桐野利秋 に、)手ずから銃砲の使い方を教えたところ、半次郎は鉄砲の威力に感動し、以後は鉄砲中心に戦うようになる。西南戦争ではかつての仲間と戦うはめになったが、自らの育成した狙撃隊に悩まされた。

また篠原国幹を狙撃して倒したことで、報復に貴島清らの部隊に誘い込まれ、報復の集中狙撃をくらって胸を負傷したこともあった。

鉄砲の導入では、将来の日本を思って国産銃の生産が重要だと開発をすすめた。

射撃と銃開発の研究に軍拡競争が激しかった欧州に視察に行くが、その関係上試し射ちや狙撃の競争に参加することになる。

新興日本のナショナリズムの強い頃である。日本の名誉にかけて村田も本気を出す。

村田の銃の腕は感心されて他の名手から勝負を挑まれたり、射撃の大会に招待されることもあった。

フランスのカンドシャロン射撃学校で校長と勝負した際には、向こうが気づいてない新型銃の欠点を指摘して感謝され、イギリスのオールダーショットでは狙撃を習うつもりが逆に相手にその狙撃の技量を感嘆されたと、実力は世界一流クラスだった話が伝わる。

銃器製造で有名なメットフォード社を訪れた際には、村田の評判が伝わっていたらしく、製造所所長から勝負を挑まれた。接戦の末に勝利し、イギリス一という評判をとった。

日本から射撃の名手が来ていると、現地の新聞にも掲載され、行く先々で競技会に誘われたり、領事館まで招待状が届いたという。そうした大会でもしばしば優勝したため、世界第一等と呼ばれて賞状を受けたという。

村田の目的はあくまで欧州の射撃技術、軍制、製造体制などを学ぶためである。事実後年には初の国産銃となる十三年式の開発に成功した。

欧州では各国の特色や違い、製造体制、新式の銃の知識は勉強になったが、こと狙撃に関しては学ぶどころか、相手に教える立場だった。

射撃の国家代表クラスと渡りあっても勝利するレベルであったのである。今で言えばオリンピッククラスの実力があつたのではないだろうか。

§コラム 女性狙撃手の存在 女も参加する近代戦

相田浩二 写真家。ベトナム戦争の水中で子供らと逃げる女性の写真でピューリッツァー賞を受賞。三五歳でベトナムで銃撃されて死亡 のベトナム戦争の写真で「連れられて」という題名のものがある。

塹壕にこもって米兵と戦っていた少女兵士の写真だ。見ようによつては二十歳にも達していない。

同じく女性兵士が、捕虜になった屈強な米兵を銃を携えて連行するものもある。

こうした写真は近代戦争の象徴的な一面もとらえている。女性の積極的な戦争参加である。

現代戦では後方支援でなく、前線にも時折女性は参加した。そしてそれは「狙撃」の分野に関しても例外ではない。

スタンリー・キューブリック監督の戦争映画「フルメタル・ジャケット」では、主人公たちをさんざん悩ませた狙撃手が、以前に出会った愛らしい女性娼婦だったという衝撃のラストが設定されている。これはただのフィクションとは言えない。  
ベトナム戦争ではこうした女性兵士は豊富だったのである。

日本の場合は？  
それでは狙撃の分野では日本史においても女性はいるのだろうか？  
答えは条件付きながらイエスである。

本書では「狙撃」の前史として「弓」を取り上げている。そこも男の独壇場ではない。  
例えば近代以前には「日本三勇婦」として「一に板額、二に巴、三に更科」と謳われた。

板学御前は伝説では身長が身長六尺二寸 約一(八八センチ あつ)たという。  
越後の有力豪族の城氏の一族で、幼い頃より文武に優れ、特に弓の名手であったという。

鎌倉幕府打倒の建仁の乱で挙兵した一族とともに、籠城戦では押し寄せる敵兵を弓矢で次々に射倒したという。  
『吾妻鏡』では「女性の身たりと雖も、百発百中。芸殆ど父兄に越ゆるなり」、「童形の如く上髪せしめ腹巻を着し矢倉の上に居て、襲い到るの輩を射る。中たるの者死なずと云うこと莫し」とその勇猛振りを語っている。

木曾義仲の愛妾として知られる巴御前は「強弓を引く大力勇士。荒馬に乗り悪所を越すも達者」と平家物語では伝える。実際に従軍して敵を討ち取る程勇猛だったという。

もちろん昔の記録は誇張や不正確な点もあろうだろう。  
前にも書いたが弓術では一定の筋力も要求される。  
しかし女子のウェイトリフティングでは五〇～六〇キロ台の女性が百キロ以上のバーベルを持ち上げるし、女子弓道やアーチェリーでも一定の距離を何発も射撃している。

子供の頃から武術に親しめる環境だったり、鍛え上げていたならあながち荒唐無稽ではないだろう。

実際に銃器のように身体への負担が少なくなる兵器が出現すると、女性兵の話も増えてくる。オリンピックの射撃競技も女子は立派にやれている。  
狙撃の面でも同じである。

幕末から明治にかけては様々な新型銃砲が流入してきた。

有名な新政府軍と会津の戦争では、白虎隊のような少年兵士だけでなく女性兵も少なからず参加した。  
薙刀を振るって戦闘に参加した中野こう子の「娘子軍」は知られているが、もう一つ、ゲベール銃や新型七連発式のスペンサー銃を駆使して籠城戦を戦った山本八重は、狙撃の歴史でも見過ごせない。

八重の生家は山本勘助の末裔とも言われる兵学者の家柄で、会津藩の砲術師範を勤めていた。  
八重は幼い頃より活発で男の真似を好み、本人の話では十三歳頃には六〇キロ近くある米四斗俵を肩に載せて何度か上げ下げできたという。

砲術家としての家庭環境から他の武家よりよっぽど銃器に親しみ、家に来る弟子に教えてやることもあったという。  
会津戦争が勃発した時は断髪して志願し、看護から夜討ち、砲兵隊の指導までやってのけたそうだ。

狙撃の腕前のなかなかであったらしく、特筆すべきなのは薩摩軍の鶴ヶ崎城の攻撃にあたって、後の陸軍元帥となる大山巖を狙撃したことだろう。

土佐藩の援護に北出丸に攻勢をかけた大山は、城内からの狙撃で右腿を撃ち抜かれて、後方に移送された。  
この時の狙撃手がおそらく八重ではなかったかと言われている。

後年、男勝りで活発なのを、男女平等の結婚を考えていた新島襄 同志(社大学の設立者 に匂)に入れ結婚する。  
結婚してキリスト教の洗礼を受けてからも、日清戦争の救護活動を行うなど活動的で男勝りであった。

第二次大戦の女性狙撃手  
こうした女性狙撃手は珍しいことではない。

女性は医療や後方支援で戦争を支えることが多いが、場合によっては実戦にも参加する。  
第二次大戦のドイツとソ連の戦いでは女性兵士の存在感が大きい。

ソ連は女性の軍隊への活用にも積極的で、一九四一年から終戦までの間に二十万人以上の女性が従軍したという。  
これはドイツの奇襲によって前半戦では危機に陥り、国民の総力をあげた防衛線を構築する必要もあったようである。

前線に従事した女性兵士も少なくなく、千人を超える女性狙撃手や女性だけの狙撃部隊まで存在したとのことである。  
中でも、女性狙撃手のリュドミラ・パブリチェンコは世界的に有名で、公式記録で三〇九人もの敵兵を狙撃で倒したと言う。＊

日本は前線に女性兵士を投入することもなかったが、戦況が悪化して本土決戦が考えられるようになると後方婦人も訓練を受けさせられた。

また南洋の戦いでは現地慰問の芸者が、米軍に狙撃によって抵抗したとの真偽不明の話もある（南洋の項で詳述）。

第二次大戦では沖縄戦後に戦争終結となったが、もし戦争が泥沼化してスターリングラードのような市街戦となっていたら日本にも女性狙撃手が出現していたかもしれない。

＊ ただしこの狙撃戦果は戦意高揚のための宣伝とも言われる。  
当時ソ連は 優秀なソ連の狙撃手 とじて士気高揚を図る宣伝も盛んに行っていたためである。

ジュード・ロウ主演の映画『スターリングラード』でも、有名なソ連の狙撃手ザイツェフが、ドイツ人の名スナイパーと狙撃戦を繰り広げる。  
内容は史実に基づくという話もあるが、このライバルのドイツ人スナイパーでさえ、歴史的な裏付けがとれておらず、実在したか不明なのである。

パブリチェンコの戦果に関しても、非ソ連の戦史家や従軍した兵士による批判もあり、鵜呑みにはできない。

しかし女性兵士が活躍し、また女性狙撃手がいたのは確かなようである。

### 命を救った巾着袋

第一次大戦で胸元に分厚いシステム手帳を忍ばせていたため、弾丸が命中しても奇跡的に助かったという話はよく知られている。

ライフルによって回転を加えられ、硬く鋭利な弾丸は人体への脅威である。それでもたまたま懷中に忍ばせていた何かで命拾いした話が少なからず存在するのが面白い。

実は別項で紹介した二本松少年隊にも似た話が残っている。

1868年七月二十九日、二本松藩の果敢な抵抗も押しつぶされ、遂に二本松城も落城の憂き目を見た。それでも戦争自体はまだ集結せず、木村銃太郎指揮下の二本松少年隊を含めてあちこちで抵抗が繰り広げられていた。

本町谷御殿付近で、帰還してきた少年隊は侵入してきた敵と遭遇、銃撃戦となる。

敵は五十人ほどいて人数と武器の質で優勢である。当時十六歳の少年は必死で応戦するも敵の射撃は強力だった。しまいには胸に銃撃を受けて倒れ込む。

ちょうど心臓部に命中しており、通常なら助からないはずであった。しかし不思議な事に、撃たれたショックから覚めると、まったく傷ついていないのに気づく。胸をまさぐっても出血していない。

いったい何が起きたのかと思っていると、巾着袋がこぼれ落ちた。表面に傷がついて裂けているが、柔らかない布袋で防げるわけがない。中身を出してみても初めて分かった。

それは母が大事に備えて出立の時に忍ばせてくれた錢であった。砕け散った天保錢が転がり出てくる。衝撃で折れ曲がったり、中央部に穴があいているもの、中央から二枚に裂けているもの……こうした銅錢が数枚折り重なっていたため、必殺の弾丸を受け止め、押しとどめてくれたのである。

信じられないような奇跡であるが、この現物の銅錢と弾丸は、遺品とともに今でも現地で目にすることができる。

### 挑発して射たれる

ときは戦国。天正三年、甲斐の武田信玄の死後、勢力拡大する信長らと後継者の勝頼は対立を深め小競り合いを繰り返していた。一度は武田氏に臣従した三河の奥平氏が再び離反したのを契機に、再度武田側は三河侵攻を開始した。

武田側は離反した奥平信昌が籠る長篠城を包囲した。城には五千ほどの兵しかいないが、鉄砲や大鉄砲が何百挺も備蓄され激しく抵抗する。

しかし数の差があることと、兵糧蔵も焼失して落城寸前にまで追い込まれる。何重にも包囲が加えられ、城中の兵糧・弾薬も危機的な状況にまで追い込まれた。

もはや抵抗は不可能とみた武田側は守城側に対して降伏勧告を行う。しかし守城側の頼みの綱は援軍であった。豊富に食料弾薬を備える織田・徳川の大军が到着すれば戦況は変わる。その読みがあったのだ。

弱みを見せてはならぬと奥平は降伏を拒否する。中でも恩田半五右衛門という武士はわざわざ楼に登り武田側を挑発した。「弾も尽きてない。長期の籠城用にとってあるだけだ。兵糧なんて倉庫中にありあまつてる。見ろ、こんなに太ってるんだぞ」と尻をまくって武田側に叩いてみせた。

この挑発をみて武田側の射手が尻をめがけて狙撃、見事尻に命中。距離があったからひどい打撃にはならなかったものの、恩田は痛くて跳ね回る。

見守っていた攻め手、守り手の一同は手を叩いて大笑いしたという。激戦の中の笑える一コマであった。

### 敵味方が同僚に

会津藩の砲兵隊には奥田鑛太郎という者が居た。幕末の混乱の中で従軍し、会津戦争では鶴ヶ城を守って戦った。

戦後も生き延びて、明治の世では警察官として務めた。ある時に薩摩出身の男が同僚になったが、その男が会津戦争にも従軍したことがあるという。

かつての敵味方だが、今は同僚。色々話をすすめるうちに、奥田は男の腰に奇妙な弾痕があるのに気付く。「それはどうした？ 戦場での傷か？」「いやな、会津で城攻めをしてた時にな、大通りのお屋敷で見事な鯉がいけてあったんだよ。それで一つ捕まえてやろうと思って網をあちこち探してまわってたんだよ。そしたら銃撃されてなあ」それを聞いて奥田ははっとなる。「おい、おまえ、そりゃ俺だ」なんでも籠城戦のさなか、目の前的大通りをあちこちと動いてまわってる奇妙な男を目にした。なんであんな変な動きをしてるんだと試しに狙撃してみたという。「おまえか！ おれを撃ったのは」と、二人は大笑いして以後親友となったという。

■近代戦

◇ 旧日本軍と狙撃～海外のような有名狙撃手は居たのか？

本書前書きでも述べた通り、狙撃手の歴史が語られる際、持ち出されるのは大概外国のエーススナイパーである。戦争経験が豊富な国でありながら有名スナイパーの話となると不明瞭なのである。

個人の戦果に着目する視点がなかったわけではない。それは海軍のエースパイロットなどの事例がそこそこ残っていることから分かる。するとなぜ陸上のスナイパーとなるとここまで曖昧なのか。

この疑問をもって戦史をたどると、判明するものがあつた。

旧日本軍の狙撃に関する姿勢

実は意外にも旧陸軍では「狙撃」に全く無関心ではなかった。それは現場のあり方を詳細にたどっていくと理解できる。

まず軍隊組織の基本的な面で「射撃技術」を評価する視点があつた。

褒賞による奨励

戦場などで功績を評価する勲功には【感状】【武功勲章】、【殊功勲章】などがあり、他にも特技を評価する特技章などが授与されることもあつたが、射撃に関する勲章としては【射撃褒章徽章】が存在していた。

『射撃ノ熟達ヲ奨励スルタメ射撃教範ノ規定ニ依リ射撃優等者ニ付与ス』と規定され、射撃の成績が優良であつたり、競技会などで優秀な成績を収めると授与されていたようである。

ちなみに歩兵や工兵が主であつたものの、授与の対象は拳銃、機関銃から野砲に至るまで、砲撃に関わる成績優良者はほぼ全て資格があつたようである。

競技会の規模 連隊クラス、大隊選抜など や成績によってランクが第一種～第四種、最優等・優等・準優等、金、銀、銅などの区別があつたようである。

小銃に関する褒章規定は改正を経て、特別、第一種、第二種と分けられていた。割合としては特別射手が連隊二十名程度につき一人、一等射手が大隊・中隊二十名程度につき一人、二等射手が中隊二十名程度につき一人は居たという。

組織・戦術

射撃の実践訓練は部隊や任地によってまちまちな所があつたらしく、ひどい場合は二、三十発撃たせただけですぐに現地投入されとか、古参兵なのに正確な照準の見方も分からないといったケースもあつたそうだ。部隊によっては優良な訓練体系が存在したり、個々の兵士が実戦や自主的な訓練で技術を向上させていった面もあつたようである。

また戦争末期のボロボロの記憶が生々しいせいか、特攻、銃剣突撃など旧式で精神主義がかった印象がさらに実像を歪めているのも問題かもしれない。

全体的な視点では、世界の現代戦への戦術変化に影響を受けたり、対中戦争から得られた経験などから装備や戦術にも創意工夫を加えていった経緯も見て取れる。そしてそれは狙撃の分野での改良にも反映されていく。

大正頃から日本軍は精度の優れた銃を選び出して狙撃仕様に仕立てたり、狙撃用のスコープや銃身の支えとなる単脚の開発も行われたした。

狙撃銃や戦術と組織に関する証言として次のようなものがある。  
「小銃手のうち射撃のうまい二人が狙撃手になる。のちになると狙撃手には望遠鏡のついた精度のいい小銃が支給されましたが、当時はまだ普通の小銃でした。さて各分隊が敵との距離七、八〇〇メートル程度に近づくと、この狙撃手を前に出して、敵の指揮官を狙って倒す。それまでは分隊長は軽機 関銃、小銃隊を温存しておく。さらに彼我接近してその距離三、四〇〇メートルになると、擲弾筒を敵の火点に打ち込み、軽機を出して射撃を開始するんです」  
読売新聞社編 『昭和史の天皇 15』

また得られた戦訓や兵器の発達に伴い歩兵操典や戦争の指導要領も改訂されていく。

「射撃はまず軽機関銃、要すればこれに狙撃手を加え状況によりまず狙撃手のみを以て行い、敵に近接し火力の増大を必要とするに至れば所要の火器を増加す」第122

「狙撃手は通常分隊の攻撃目標付近に現出せる敵の指揮官、監視所、自動火器等、特に有利なる目標を機を逸せず射撃す」第123

陸軍第六軍司令官の発した戦闘教令 第二号 では  
「狙撃兵は展望射撃に便なる位置に潜伏し眼鏡付狙撃銃を使用す、狙撃距離は7、800メートルにして命中精度良好なり」

等々、狙撃の有効さを自覚し、その戦術を指導推奨するものにならっていく。

また、歩兵学校の実際の戦闘で得られた戦訓や教育的資料をまとめたものでも、  
「一般小銃手の射撃はほとんど効果がなく、戦場の射撃はほとんど狙撃的射撃、火線は軽機関銃と狙撃手に担当させるのが良い」  
との意味合いのことがはっきり述べられているのである。

これに関係したスコープや良銃を付与して技量を向上させる重要さが述べられ、これに連携する形で「軽機関銃の腰だめ射撃は格闘直前まで敵を制圧できるので有効」などと主張される。

意外にも旧操典の古い白兵重視的な部分は、現実の戦争によって変更されていき、  
「一般的な火戦には狙撃手と軽機関銃を用い、最終的な制圧や突撃にのみ小銃部隊は使用すべき」



とする姿勢が主流になってくる。  
これは欧米諸国が第一次世界大戦以降の戦争を経験して変わってきた経緯と似ており、そうした改革が実際に現場で有効であったのである。

以上のように日本軍も近代戦に従事する中で狙撃兵の有効さに気付いていき、実際に育成・選抜と実戦での配置も行われるようになっていった。  
これが後の太平洋戦線や南方での日本の狙撃兵の存在感の下地となる。

#### ◇狙撃手の名前が知られていない理由

つまり日本軍はそれなりに射撃の評価システムがあったり、戦術としての狙撃にも着目していたわけである。

また文化的にも銃撃の精度を重視する一面があった。  
過去に火縄銃が入ってきた頃から、本場欧州より狙撃を鍛錬する方に発達したのは述べた通りである。職人芸的に射撃技術を追求する下地も存在していたのである。  
これに加えて近代戦では経済的な理由もある。

第一次大戦などで兵器の機械化が進むと、一日で過去の一会戦分の弾丸を消費するケースも出る。このような膨大な消費は国力に負担をかける。

戦地では更に補給の難しさもプラスされる。

例えば兵士の証言を読んでいると、平時の訓練はおろか、戦場でさえ弾丸を使いすぎると上官に叱責されるケースが見受けられる。  
つまり狙撃スキルを上げれば効率的な消費ができるようになる。国力で制約のあった当時の日本軍には好ましい点もあったのである。  
この観点では意識的に狙撃的な手段で弾薬欠乏を抑えようとしたケースと、対米戦で有名なように島々に孤立して補給が途絶し、否応なしに狙撃戦術に追い込まれた例がある。

つまり文化的、状況的に十分に狙撃手を生む土壌があった。またアメリカ軍側の証言でも多くの狙撃手が存在したことは明らかなのである。  
それではなぜ誰でも知っているようなエーススナイパーはいないのだろうか？

いくつかの要因があると思われる。

#### 近代的な狙撃兵と狙撃戦術ではなかった

われわれが今日「スナイパー」として連想するような独立した狙撃兵や狙撃戦術は乏しかったのではないか。  
射撃の上手い人間が狙撃手として、部隊ごとに配置されることはあった。これは確かである。

しかしそれは単に「射撃の上手い一般兵士」や「歩兵の延長」で捉えられ、高度な「狙撃手」としての運用は乏しい。  
つまり現在で言えば狙撃兵と歩兵の中間にあたるマークスマン　選抜射手　の側面が強かったのではないか。

太平洋戦争で言えば、前述のシャードの『サイパン』でも「狙撃手」の例が出てくる。  
しかしそれは戦国の薩摩の捨てかたまりのように、味方を逃すために力尽きるまで敵を引き止めたり、または遮蔽物に隠れて攻撃し、一人でも多く道連れにしようとする、いわば「死兵」としての役割である。

部隊によっては優良な狙撃兵を効率的に揃えて成果をあげたといった話があるが、銃剣突撃で側面や背後から援護させたとか、本隊の壊滅、弾丸の欠乏で仕方なく狙撃をやったなど様々である。

「狙撃兵」として高い技術を評価された個人が、独立的に活躍する姿とは異なる。

#### 顕彰意識の問題

前に述べた通り、訓練や実戦で射撃の冴えを示した人物には表彰されるケースがあった。射撃に関する叙勲の推薦、感状、賞与品など評価システムが存在したのは確かである。

しかしながら、プロパガンダやメディア対策などにおいては爆弾三勇士や突撃、一番乗りなど壮烈で派手なものが多い。狙撃の功績は「武勲の一つ」として埋もれた所もあるのではないか。  
「狙撃手」「狙撃による数」を特別目立たせて称揚したり、宣伝する意識があまりなかったかもしれない。  
評価する視点が乏しいと、自然に記録にも残りにくい。

ただ海軍の航空戦などでは不確かながらも「撃墜王エースパイロット」の記録はあるし、敵兵を何十人倒したといった戦意高揚記事の記録もある。そうしたことを考えれば不思議にも思える。

不意打ちやスナイプといったイメージが「卑怯」とかプロパガンダ的に好ましくなかったのかもしれない　これは欧米にもあることだ。名狙撃手が持ち上げられる反面、「射殺」という生々しいイメージから嫌われたり、卑劣な暗殺者として同僚から見下されたり、憎まれて捕虜になると過酷な報復を受けるのもよくある　。）

また陸軍の「個」に対する評価意識や「戦い」に関する美意識も絡めて研究して良いテーマだろう。海軍でも戦争末期になると個人による撃墜数の記録を廃止することもあったそうである。

#### 記録の喪失

対米開戦以降、戦争範囲は中国だけでなく東南アジア、南洋方面と広範に及んだ。  
初戦では快進撃を続けていた日本も後半では大規模な反攻を受けるようになった。

米英の連合軍だけでなく中国が大量の人員を動員した局地戦もある。  
蒋介石への援助ルートを遮断するために雲南やビルマに進出し、現地で孤立した拉孟・騰越の戦いなどでは、米英に支援された二十倍以上の中国兵に包囲されながら奮戦し、蒋介石から「日本軍を模範にせよ」と讃えられたほどであったが、物量・兵員で圧倒的な差がありながら、狙撃兵もかなり活躍したそうである。

こうした不利な状況で日本兵が正確な狙撃で敢闘したケースはあちらこちらに伺える。  
大岡昇平氏の記録を読んでも分かるが、例えばフィリピン戦線の各所でも狙撃戦の成果があったのは疑いないようである。

しかしこれだけの奮戦を見せながら、戦争末期の状況は悲惨としか言いようがない。玉砕や全滅に近い状況も相次いでいる。

「日本兵は頑強に死ぬまで戦った」との証言は、戦線を問わずに存在する。南洋方面に至っては部隊の投降率が平均5%以下、場合によっては1%を切る。

米軍の記録からも豊富な狙撃戦の様相はうかがえるが、この生存率だと世界級の狙撃手が誕生していても歴史に残るのは至難のわざだ。

現代戦のように戦果を記録する観測手もおらず、証言してくれる人にも乏しい。生き残りの人の噂話や不確かな伝聞だと取り上げるのはためられる。

なにしろ戦地によっては守備側の日本軍が玉砕しているため、大まかな流れでさえ米軍の資料に頼るしかないものもある。特定の個人の正確な狙撃数を探るのは絶望的な作業である。

また敗戦にあたって戦闘詳報を始めかなりの重要書類が焼却された。中には狙撃に関する貴重な情報が残されていたものもあったかもしれない。

日本の狙撃史では失われた断片がかなりあるのではないか。詳細が分からない以上、エース狙撃手の存在もあやふやな謎として残る。

### ◇ 日本軍の狙撃銃

皇紀二五九七年、日華事変へと戦局が向かった時代。中国軍による将校狙撃被害拡大により、日本側も狙撃手の戦線投入を余儀なくされた。

主に三八式改・九七式狙撃銃と、九九式狙撃銃の二種類の系統がある。ともに生産当時、日本軍の主力小銃であった三八式小銃と九九式小銃の二つを元にしたものである。

基本的に「狙撃銃」として別個に生産を行ったのではなく、三八式、九九式の小銃から精度の高いものを選び出し、そこに狙撃銃としての改造を施すという経緯であった。

当時は規格式の大量生産ではなく、職人が手作業で一挺ずつ仕上げていた。そのため銃によって質に差があり、命中精度に劣るものがある反面、逆に素晴らしいクオリティのものも存在していた。銃ごとに完成度にバラつきがあるのは、部品の互換ができない欠点も生んでいたという。

#### 三八式改・九七式狙撃銃 元となる三八式

両者とも三八式小銃が元になって改造を付されたものであり、狙撃銃としての性能も三八式小銃の性能を引き継いでいる。

三八式小銃はそれまでの三十年式小銃の施条数、撃針、照尺やスプリングなどそれまでの不具合が改善されて開発されたが、基本的なレイアウトはそのままである。

砂埃の多い大陸での故障の経験から、機関部の部品を減らして構造が簡略化され、遊底に砂埃よけのカバーが付されている。また冬場の大陸で分厚い手袋をしたまま扱えるよう安全装置の形状が変えられている。最大射程は二四〇〇メートルである。

三八式でよく指摘されるのが弾丸の特徴である。それまでの卵型から日本で始めて尖頭式が採用されて貫通力が増した。また重量を減らしたことで弾道の安定や反動を抑えるに効果をもたらしてる。

そして最大の論点となるのが弾丸の口径設定の六・五ミリである。口径が小さい分威力は減殺されるが、低伸性 弾道が山なりになったりそれたりしないこと を高めており、初速も高い。反動も小さいので命中率も高く、射手の肉体疲労も少なくて済む。また硝煙や銃撃音もより小さいので位置を知られにくい。

一般の歩兵が戦車などの対物射撃をしたり、遮蔽物を買いたりする点では多少論議があるが、概して小銃としては利点も多く、狙撃用なら更に結構なところがあるのだ。

あえて難点を言うなら、弾が軽めなので、遠距離で突風などがあると弾道がそれやすい。また内部の施条の間隔が急でそれが弾道に癖を付ける、遊底を動かすとカバーが音を立てるので狙撃戦ではわざとはずしていたなどの証言がある。

最大の欠点といわれる口径でも、近年では外国の軍事学でもむしろ六・五ミリが最適ではないかという研究論議が起きているぐらいで、一概に悪いとは断言できない。

こうした元々の三八式の特性に加えて、狙撃銃としてはさらに弾薬の火薬量を減らし、硝煙や発砲の音も抑え目にできていたそうだ。

最終的に約三四〇万挺生産され、狙撃用の三八式改や九七式が二万二〇〇〇挺弱使用されたという。

#### 九九式狙撃銃

九九式狙撃銃は、九九式小銃が元になったものである 正確には使いやすさのの比較の為に、銃身の全長や重さが異なる九九式長小銃と短小銃が作られたが、ほとんどの九九式狙撃銃は短小銃が元となっている 。 )

それまでの制式小銃の三八式は反動が少なく、きわめて精度が高かった。その反面、口径が六・六ミリと多少威力が落ちるのを改善しようと製作された。

「九九」は皇紀二五九九年 一九(四二、昭和十七年 の年代)にちなむ。

九七式の選定過程と同じく、九九式小銃 短小銃の方 の生産時に質の高いものが選別されて狙撃銃に仕立てられた。

特筆すべき特徴として、口径が七・セミリに変更されてその分の破壊力が増している。これは当時の世界的な口径大型化の流れ 八ミリ前後の弾丸とそれに適した形状に改善することにより、銃撃戦や対人破壊力で最も効果的と研究が出された や、)軍制改革の中で弾丸をすべて七・セミリで統一することが経済的にも安いと試算されたことによる。

元となった九九式小銃は照準が一四〇〇メートルまであり、対航空機用の対空照尺も備えられていた。

この辺りが一般的な歩兵用の銃として行き過ぎではないかという批判もあったが、狙撃銃としてはむしろ評価に値する点もある。

狙撃銃としては折りたためる針金様の単脚とスコープ装着用の台座も付属している。またボルトハンドルがスコープに抵触しないように下向きに湾曲させてある。

専用の九九式スコープは基本的に倍率が四倍だが、二・五倍の九七式のスコープを流用できたり、生産時期によって二・五のものや、四倍まで調整できるものが存在していた。  
台座のネジなどを合わせることでスコープの位置を調節する。

また生産時期によって質や装備にばらつきが多いので知られる。末期のものは性能や部品でかなり見劣りする物がある。

概してそれまでの三八式よりもパワーと破壊力がある点は評価されている。  
また三八式の弾道が偏りやすい癖や、照準がとりにくい点などは改善されている。

ただ純粹に狙撃の観点で見ると不都合な改良ともみなせる。  
例えば口径が大きくなり威力が増した分、銃撃時の噴出するガスの勢いが強くなり、反動も大きい。  
狙点がずれないようにするため、より身体的に労力を使うようになったのである。  
これはジャングル戦を想定して銃身を短めにしたのも一因とされる。

生産時に付与されたシリアル番号から、一万挺ほど生産されたと推測されている。

## §コラム　狙撃兵　文化的な出身者

一般的に「優秀な兵士」というとタフで敢闘精神にあふれる姿が想像されるかもしれない。  
しかし狙撃兵に関する優秀さでいえば、通常の一般的な軍人の姿だけではとらえられない。

例えば戦後の日本文学史に足跡を残した二人に安岡章太郎と五味川純平という二人がいる。  
戦前生まれの人らしく二人とも従軍経験があるが、実は狙撃にも縁があったこはあまり知られてない。

安岡氏は戦後文学界のいわゆる「第三の新人」の一人で第二十九回の芥川賞の受賞者である。

先祖が土佐藩の郷士の出身で、幕末に迅衝隊（下士庶民中心に結成された土佐の奇兵隊のようなもの）に所属して戊辰戦争を戦ったという。  
また安岡氏の父も陸軍獣医で少将までなったそうだ。

慶応大学予科に所属していた 1944 年、安岡氏は召集されて満州に派遣されるも、訓練のさなかで射撃に才能を示す。  
部隊の中で射撃最優秀の成績を収める。

この腕を見込まれて将来的には狙撃兵としての任務に就く事が決まっていたという。  
それが肺の病気が原因で除隊となり、結果として部隊が全滅状態になる中で安岡氏は命をつないだ。

五味川純平氏は戦争末期に満州で召集され、関東軍の一兵士としてソ連の侵攻を目の当たりにした経験を持つ。  
従軍体験を元にした『人間の条件』は一千万部を超える大ベストセラーとなった。

その五味川氏も射撃に関しては非常に才能があったらしく狙撃兵として選抜されて訓練も受けたそうだ。  
五味川氏の一九七三年の著書『虚構の大義　関東軍私記』　文藝春秋　に狙撃の話が書かれているのでここに引用しよう。　文中の「杉田」が五味川氏のモデルとされる）

はじめて橋爪班長が気象前に初年兵を実包演習に連れ出したとき、杉田は、円形の標的に対して、射程三百、射弾五発で、高い点を出した。杉田は実包射撃ははじめてではなかった。

満州事変のころに中学生で、配属将校に引率されて実包演習に数回行った。東京の学校に進学してからも、近衛連隊射撃場で実弾射撃訓練を受け、五発で四十七点を射って、介添の下士官から「うまいね。よほど射ったことがあるな」と云われた。そのときは正面がM字製の三八式だったが、今度は照門が小さな輪になった九九式で、照門の中心点に照星頂を正しく見出すことがむずかしくて、学生るときより打点が少し落ちたが、悪い成績とは思わなかった。

橋爪班長は杉田の弾痕を調べて、  
「点が高けりやいいつもんじゃないぞ」と云った。  
「兵隊の射撃はな、競技会用じゃない。十点の部分は文句はないが、九点のを見ろ。弾痕が離れている。十点の上を射っても九点、下を射っても九点、同じ九点だが、この二発は零点に近い。弾が五発とも円内に入らなくてもいい。標的の隅っこでもいい。五発全部まとまって中っている零点の方が、バラバラの九点五発の四十五点よりずっといい。わかるか」  
杉田は実戦向きの射撃がわかったような気がした。端の方でもまとまって入っているのは、偏差を修正すれば正確な命中弾になるわけである。

帰路、橋爪後町が杉田の横に来て云った。  
「お前、明日から狙撃訓練をする。特別扱いはせんぞ。実包訓練は起床前だ。いいな」

（中略）

狙撃手の任務は、敵の指揮官と有力な火点　たとえば機関銃　を狙撃することである。  
訓練が要求する射撃精度はきびしかった。初歩的には、射程三百の伏的（伏せた人間の頭と両肩を形どった的）に、射弾五発全発命中は勿論のこと、そのうち少なくとも三発は握り拳大の面積のなかに集中していなければならない。それができるようになると、今度は限秒射撃である。はじめは限秒四秒で、三百メートル彼方のどこに出るかわからない的を射つ。次は限秒二秒になる。それが達せられると、防毒面を装着して三十メートルを疾走、それから限秒射撃に入る。  
「射てなければ朝飯は食わさんぞ」  
杉田は班長や古参狙撃手の叱咤を何度聞いたか分らない。

弓の部で菅原道真が弓射に秀でていた事実をあげたが、文学者のように一見あまり戦争と関係なさそうな分野でも、意外に優秀な狙撃手もいる。

## ◇ 日中戦争　狙撃戦術の重要さを自覚

近代以降の対中戦争で狙撃例があったのは間違いない。

例によって個人の狙撃手の名前はあまり目立っていないが、例えば三八式小銃の性能の話の事例で、一キロ離れた中国兵を狙撃できたとか、羅猛の防衛戦で雲霞の如く押し寄せる中国兵を正確な狙撃によって巧みに防衛したとか、記録の端々から狙撃手が活躍したのうかがえる。

中国戦で見逃せないのは敵の狙撃兵にも悩まされている点である。  
大勢としては中国側は日本の侵攻に押される立場であり、主要都市も次々に陥落させられていたが、狙撃によって日本に人的被害をもたらしてるケースも多い。

従軍兵士の証言にも、中国側の射撃を評価する話が多い。日本に押される中で、ゲリラ的に狙撃戦術が生まれてきた一面もあるようで、こうしたことは世の東西を問わないのかもしれない。

○狙撃の被害者としての視点から

日本軍部は、攻勢だけでなく、被害者としての立場からも狙撃の効果を自覚した一面がある。

初めの日清戦争からして狙撃の話は重要な位置を占める。  
混成第九師団の例をあげよう。

佳龍里の重要拠点である安城の渡しをめぐる抗争で、清国側は五百ほど兵を伏せていた。  
日本軍が姿を見せると一斉に狙撃を浴びせて急襲し、被害を大きくした。  
この狙撃で戦死した喇叭手が「死んでもラッパを離さなかった」と逸話を生み、後に忠勇な日本兵の模範として国定教科書に採用されるまでに至ったのである。

周知の通り日清戦争以降も大陸に軍を展開していくにつれ、記録で「不意の銃撃を受け」とか「狙撃よって戦死」などといったケースが目立っていく。  
時には将校クラスの戦死者も出ており、上海事変などでは市街戦でもあり、日本海軍の陸戦隊の白禪が目立ってかなり狙撃の被害があったという。

また上海事変に至る背景にも汪兆銘襲撃、中村大尉事件のように狙撃によるテロ・暗殺は目立つ。

こうしたことから、第二師団参謀部などでは「情報に基づく参考 第一(号 )」で「敵の偽装、遮蔽は巧にして敵前近距離に至るも敵影を発見し得ざる間に狙撃的射撃のために多くの死傷者を出せる部隊あり・・・以て他山の石とするに足る」とした記録も残している。  
被害を受ける過程で逆に狙撃の価値を再認識し、戦場に応用した面もあるようである。

戦争も後半になると中国兵の士気や練度も上がり、射撃のスキルも同様に上がってきて日本側を苦しめてきたのも事実のようだ。

日本軍の対米戦、アメリカ独立戦争での現地民兵の対英の戦術、ベトナムでのベトコンの攻撃など、国力的に劣勢な側が戦術としてゲリラ戦を取るのは世界中でよく見られるケースなのかもしれない。

そしてゲリラ戦に共通するのが、狙撃兵の存在感の高さである。

明らかでない日中の狙撃手

以上見てきたように中国戦線では、日中双方に狙撃の事例があるのは確実である。  
攻勢と守勢の両方で狙撃戦は戦史を彩っている。

しかしながら例のごとく日本側の狙撃手の名前はあまり残っていない。そして面白いのは中国側も同様な事実である。

例えばカナダ軍所属の中国系カナダ人には狙撃のレコードを残したものがいるが、対日戦ではあまり有名なスナイパーの名前も残っていない。

あれほど長期間、おびたしい犠牲者を出しながら、両軍とも個人として名狙撃手の名前はほとんど知られないのだ。

軍事的文化的に考える所がありそうである。

◇ 銃による要人狙撃事件      ② 講和大使を銃撃

りこうしょう  
□ 李鴻章                      道光三年1823～光緒二十七年1901    清国    安徽省)

こみやとよたか  
● 小宮豊隆                      明治二年1869～昭和二十二年1947    群馬県)

清国側の全権大使李鴻章は、講和会議の舞台である下関の料亭『春帆楼』から出てきたところだった。輿に乗り、周りを文官や警備兵に囲まれている。  
周囲は講和交渉の行方を見物しようとする人並みで溢れている。

日清間の戦争は陸に海にと日本の勝利が相次ぎ、日本軍は北京をもうかがう勢いであつた。  
そのため講和条件には賠償金や領土割譲、開港など強硬な姿勢をとり、清国側は過酷すぎるとして交渉は難航を極めていた。

また他の欧州列強は日本の勢力伸長を喜ばず、東アジアの紛争に介入して漁夫の利を得ようとする姿勢が露わだった。  
早めに交渉を決着させて權益を確保したい日本側と、それを防ぎたい清国側との間でつばぜり合いが続いていた。

この日三度目の交渉から帰途につく李鴻章を眼光鋭く見据える一人の青年がいた。  
先ほど共同便所から出てきた時から両腕を抱える姿勢を取っている。

左脇には先ほど取り出したばかりの拳銃が隠し持たれていた。

道沿いに居並ぶ民衆は、敵側の講和大使を好奇も顕わに見守っている。  
李鴻章が目の前に近づいてきた瞬間だった。

こやまとよたろう  
当時二十三歳であつた 小山豊太郎は、群衆の間から飛び出して李鴻章に銃口を向ける。  
胸を狙って一撃必殺を狙ったのだ。

轟音とともに弾丸は李鴻章の顔面に命中する。  
弾丸は上向きにわずかばかりそれたのだ。

あたりは大混乱に陥ったが、小山はその場で取り押さえられ、止めを刺すことはできなかった。

李はそのまま病院に運ばれ、講和交渉も一時中断した。

なんといっても戦時である。  
民間には小山の行為を讃える人間も多かった。  
英雄視する雑誌、小山を主人公にすえた歌や演劇の上演……。

しかしことはそう単純にいかない。  
日本側に警備の責任があり、戦争中とは言え相手側の国の代表に危害を加えてしまったのだ。

まだまだ日本も国力が弱い頃である。列強の介入を招くと苦しい 実際(後に三国干渉で遼東半島を返還 。 )  
ロシアなどは既にこれを口実に清国側に肩入れをはじめていた。

交渉の行方に暗雲がたちこめたために、日本側も交渉姿勢を変える。  
当初の休戦拒否の態度をあらため、賠償金の減額にも応じた。

それでも領土割譲や莫大な賠償金の戦果はあったが、清国側としてはとんだ幸運にもなった。

襲撃後しばらく李鴻章は頬骨付近に弾丸がめり込んだままであり、その状態で交渉にものぞんだという。

身の安全を図って講和会場には裏道を使うようになり、現在でもそれが「李鴻章通り」として現地に残っている。

狙撃者の小山は群馬県館林生まれ。  
県会議員の息子であり、病気で大学中退してからは職を転々として、政治団体に所属して自由党議員の手伝いをしていたこともあった。  
狙撃した理由には李鴻章を倒せば清国が倒れるとか、講和交渉に不満があったとかいうものの、本当の所はよく分かっていない。

当初は無期徒刑の判決、後に恩赦で仮出獄となった。

ここまで読むと暴力的な右翼テロリストのように思われるが、小山は普段は柔和な感じで体格も小柄だったという。

獄中から手記を発表し、出獄してからは書道塾や暮の会所を営んだりした。  
文人と交流して小説や書を嗜んだり、文化人的な所もあったそうだ。

◇ 銃による要人狙撃事件      ③ 皇太子を狙った隠し銃

ひろひとこうたいし  
□ 裕 仁 皇太子      明治三十四年 1 9 0 1 ～昭和六十四年 1 8 8 9    東京府)

なんばだいすけ  
● 難波 大助      明治三十二年 1 8 9 9 ～大正十三年 1 9 2 4    山口県)

大正十二年    1 9(2 3    十二)月二十七日、関東大震災の記憶も冷めやらぬ中、裕仁皇太子は帝国議会の開院式に向かっていた。  
年若であったが、病弱な大正天皇の代わりに摂政を務めており、皇室専用のお召自動車に侍従とともに同乗していた。

車が虎ノ門近くに差し掛かった時である。  
左右で頭を垂れる民衆の間から一人の若者が走り出る。  
当時社会主義者として活動していた難波大助。

手元には長いステッキが握られており、車に接近するやそれを膝に据えて狙いを定めた。  
仕込み式の散弾銃であり、議員の親が他人から借りていた物であった。

スピードをあげる車に向かって銃撃、後部座席のガラスが砕け散った。  
同乗していた侍従が負傷する。

「革命万歳！」  
叫びをあげて難波大助はさらに車の後を追うが、群衆や警官によって取り押さえられた。  
虎ノ門暗殺未遂事件として知られる狙撃である。

難波大助は個人的に皇室や皇太子を嫌っていたわけではないようだ。  
しかし天皇制が日本の社会改革の大きな阻害となっていること、震災に乗じて社会主義者らが弾圧を加えられ事などを強く憤っていた。  
結局前近代的な天皇崇拜は、革命の邪魔になると考えテロを実行したという。

逮捕後、大罪ではあるが改悛すれば一命は助けると勧告された。  
それでも法廷での最終弁論では裁判長らを相手に社会主義者の立場から論戦を挑む。最後まで屈服しなかった。  
その強硬姿勢のためについに死刑判決が下る。

死刑判決が読み上げられても難波は屈しない。  
「日本無産労働者・日本共産党万歳！    ロシア社会主義ソビエト共和国万歳！    共産党インターナショナル万歳！」  
と叫んで最後まで闘う姿勢を崩さなかった。

ちなみに犯行に使われたステッキ銃は伊藤博文がロンドンで購入したもので、それが部下へと譲られ、めぐりめぐって難波大助の父親の手元に来ていたという。

暗殺対象として狙った裕仁皇太子は全くの無傷で、数年後に昭和天皇として即位した。

◇ 日米戦争

太平洋戦争では広大な太平洋のあちこちで激戦が繰り広げられた。

この南洋での戦いは共通するパターンがあり、日本側がじりじりと制海権や航空兵力を失っていく中で、アメリカが日本側勢力下の島々に侵攻してくる。日本側も一定期間は激しい抵抗を示すが、人員や火力の不足、空や海からの援護の無さ、補給の失敗などで押されていき、全滅に近い状態になるまで戦い続ける。その過程で戦術的に、もしくは是不可避的にゲリラ戦術に追い込まれるパターンがみられる。

狙撃はその性質上ゲリラ戦と著しい親和性がある。

南洋では幾多の狙撃戦が生まれ、アメリカ側に「日本兵は全てが狙撃兵のようだった」という証言が残るほどである。英米の対日戦争マニュアルでも「火力は劣るが、偽装や隠蔽を伴っての狙撃が巧み」と狙撃兵に注意を促す文章が必ず出てくる。

狙撃になると相手に気づかれないカモフラージュが重要なのは現代でも同じである。日本軍の偽装方法は米軍から「きつね穴」と言われたタコソボ型の穴を堀って、そこから狙撃や奇襲、戦車破壊の活動を行うものや、木々の上に自らを縛り付け一般歩兵はやり過ごし将校や通信兵、車両を狙う手段や、茂み、洞口などに潜んで狙撃や手榴弾で奇襲する手法も多かった。

いくつか成果は生まれてきている。狙撃によって米軍の指揮官クラスも数多く犠牲になり、目立った成果も多い。最終的には惨憺たる悲惨な戦場となったが、正面切って戦っていたら彼我の戦力から一方的な結果になった可能性も高い。

兵站、火力、航空兵力、それぞれに圧倒的な差がありながら、米軍に出血を強め、硫黄島のようにいくつかの局地戦では日本軍の犠牲を上回るほどの結果を挙げたのは、ゲリラ戦術の力、中でも狙撃兵の役割は欠かせなかったと思われる。ちなみに硫黄島の戦いでは米軍兵士が星条旗を樹てようとしている有名な写真があるが、あの登場人物の内の三人は現地で戦死し、内二人は狙撃の犠牲だったという)

ただしこれだけ豊富な狙撃の証言が残っていないながら、スナイパーの個人名を探し出そうとすると難航を極める。先に述べたように、生存率がどの島も数%しかないのである。

世界史に残るようなスコアをあげた狙撃手がいても、南洋の島々の中に真実は埋もれてしまっている。

ここではめばしい狙撃に近い事例を探していきたい。

マリアナ・パラオ諸島方面

- ほりうち けさ まつ
- 堀内 今朝松 映画にもなったサイパン・タイガー

サイパンはマリアナ諸島最大の島であり、第一次大戦後に日本側の委任統治領となって栄えてきた島である。

マリアナ諸島は地理的に日本本土への攻撃も可能なため、「絶対国防圏」として重要な位置づけをなされていた。

開戦後、米軍の反攻が始まる中でサイパン島へも侵攻を許す状況に至っていた。

緒戦の上陸阻止のための水際防御が艦砲射撃と空からの攻撃で失敗すると、米軍は上陸して飛行場の奪取を図るが、日本側はサトウキビ畑などに潜んで銃撃を繰り返す。米軍は火炎放射器で畑を焼き払い、圧倒的な火力で日本軍を撃退して最終的に飛行場を占領し、勢力拡大を続けた。援軍やサイパン沖で機動部隊も壊滅すると、サイパン奪回は絶望的になっていく。圧倒的な火力の差がある中で、現地陸軍の主力は壊滅した。

残存部隊はなおも現地の住居や畑、洞窟や地形を利用して抗戦したが次々に玉砕。その中で生き残った大場栄大尉が率いる四十七名は、タッポーチョ山を拠点としてゲリラ戦を展開する。

大場大尉は一説には中野学校出身とも言われゲリラ戦や攪乱の戦術に通じており、米軍を狙撃や夜襲などによって翻弄した。島に孤立した状態だったため日本がボツダム宣言を受諾した以後も抵抗が続いた。

この大場隊には堀内今朝松という強力な人物が居た。トラック島への補充兵だったのがサイパンで足止めを食っているうち、現地で米軍との戦争に巻き込まれた。

伝説では、堀内は元極道で背中に夜叉の刺青を入れ、首から九九式軽機関銃をぶらさげ、腰には分捕り品の軍刀や二丁の拳銃、「米兵を100人は殺す」と宣言して一等兵ながら生き残りの十人程度の兵隊をまとめて暴れまわったという。

時には米軍の迷彩服を着込んだり、時には浴衣姿、その迫力と暴れん坊ぶりは現地の日米両方に知られ日本軍の同僚や上官からも一目置かれていたという。個人で唯一アメリカから五千ドルもの賞金がかけられた兵士である。

戦い方も大胆で、神出鬼没で夜襲や狙撃を行い、四十人以上は殺したとも言われる。

最期は包囲されていた大場部隊を救助するために、後方から米軍に攻撃をしかけて注意をそらし、自分に矛先を向けさせて犠牲になった。

残された記録によれば、米軍兵数十人に包囲され、何百発もの銃弾を浴びてようやくこの「サイパンタイガー」は永眠させることができたとのことだ。

狙撃のみのスコアを知ることとは不可能だが、怪物レベルの兵隊である。

ペリリュー島は面積一三キロ平方メートル、パラオ諸島の中で主要な位置を占める。

南洋全体で見れば小さい島ながら、太平洋戦争でも屈指の激戦区になったことで知られ、防御側の寡兵の日本軍が驚異的な善戦を見せた。

約一万名ほどの日本側守備隊に対して、米軍は六倍の兵力と数百倍の航空兵力と火力で侵攻してきた。米軍は上陸前に一七万発を超える砲撃、空襲、森林を焼き払ってから上陸してきたが、日本側は地下壕を利用したゲリラ戦によって対抗する。

総司令官の中川大佐は通常のような水際防御は取らず、島の各地にある洞窟や鍾乳洞、起伏の激しい大地を利用して地下壕と連絡通路を作り、天然の防御要塞を作り上げていた。

また徹底してゲリラ戦と狙撃戦術を訓練していたらしく、狙撃でも多大な成果をあげた。アメリカ側の記録では「小銃による射撃は極めて正確」「神業」「眉間や胸の真ん中に命中させる」「通信兵や将校を狙って倒す」「２００～４００メートル先から銃撃を受けた」などと狙撃の恐怖を語る逸話が数多く残る。

憲兵隊司令官のハンキンス大佐は狙撃されて即死し、連隊の大隊長クラスも狙撃兵の餌食となるなど指導者クラスの犠牲も増えたために、上級兵は階級章や階級を示す装備をこぞってはずしたそうである。

昼夜を問わない狙撃、切込みを含んだゲリラ戦術で米軍は苦しめられ、最終的には陥落するまで米軍の上陸作戦屈指の損害率を出した。戦闘恐怖症で戦えなくなる兵士も数万人に登ったという。

ニミッツ提督も「既に制空、制海権を手中に納めていた米軍が死傷者併せて一万余人を数える犠牲者を出して、ペリリュー島を占領したことは、今もって大きな疑問である」との言葉を残している。

残存兵は終戦後もゲリラ化して戦い続けた。

ただしこれだけの激戦であり、また狙撃手が活躍した状況もしのばせるのに、やはりここでも名前を知るのは絶望的である。

なぜならペリリューでようやく最後の兵隊たちが投降したのは終戦二年後の１９４７年。生き残りはわずか三十四名。

狙撃戦の正確な数字を知るのは不可能に近い。

ふなさかひろし  
●船坂 弘    アンガウル島の怪物

栃木県    大正九年１９２０～平成八年２００６    栃木県)

船坂弘は狙撃以外にも驚異的な体力と戦闘能力をもっていたことで有名である。軍隊では擲弾筒分隊に所属し分隊長であった。

元から武道に長けて銃剣道の有段者でもあり、射撃技術も中隊一とされていた。射撃と銃剣道で数十回も表彰を受けて、両方の分野で特別徽章も授与されている。

パラオ・マリアナ方面の最後の戦いのとなるアンガウル島では、狙撃だけでなく擲弾筒や臼砲にて奮戦して米兵を倒し、部隊が壊滅状態になってからも孤軍奮戦し続けた。

脱臼、捻挫、盲管銃創、傷口に蛆がわくなど常人なら動けない状態から、何度もゲリラ戦に繰り出し、拳銃、鹵獲した短機関銃、手榴弾をもって肉弾攻撃を仕掛けるなど驚異的な戦闘能力があった。捕虜になってからも何度も病院を抜け出して戦い、最終的には米兵を２００人以上は殺傷したと言われる。

狙撃だけの数は測れないが猛兵として記憶にとどめる価値がある人物だ。

●ガダルカナル    伏兵たちの狙撃戦

周知の通りガダルカナルの戦いは補給の途絶もあって、「餓島」と呼ばれるほど悲惨な状況を呈していた。戦況不利とみて島からの撤退が決まったが、衰弱した現地部隊と交代する代わりに投入されたのが、矢野桂二少佐が率いる大隊七五〇名である。

元は訓練未完の補充用兵員が多数であったが、予想に反して現地で奮戦する。餓えと疲労で衰弱きっていた現地部隊が帰還する間に、追撃してくる火力豊富なアメリカ海兵隊を翻弄する。

この時に効果を上げたのが狙撃戦術であった。

それぞれが二〇〇発程の限られた弾丸数ながら、伏兵として狙撃戦を繰り広げアメリカ海兵隊を翻弄、また時には戦車にも肉薄して攻撃を繰り返し、撤退戦を邪魔させない。

全滅しかかっていた現地の一万人程の兵隊は、彼ら未熟な新兵扱いの補充兵によって命を救われた。激戦の結果矢野大隊は三〇〇名ほどに減少するが、それでも米軍との差を考えると大した結果を残した。

ただこれだけの戦果を残しながら、上層部は当初はそのまま捨て駒にする積もりだったらしく、撤退が完了した後も危うく現地に捨てられるところだったという。それを矢野大佐の交渉で残りの部隊も大半は撤退できた。

サイパンや他の戦場でも見られた「死兵」だが、ガダルカナルでは多くが生きて戻れたのは幸いな例である。決して練度や兵数も高くない部隊でありながら、戦術を工夫することで大した結果を残した好例といえる。

「最後まで増援によって反攻があると思われ、むざむざ撤退を成功させてしまった」とニミッツ提督は回想録で記している。

## §コラム　南洋　正体不明の女狙撃手

太平洋戦線では、日本側はしばしば迎撃に狙撃戦術を採用し、中には抜きん出た狙撃手がいたのは前にも述べた。こうした狙撃戦の中で実は日本女性の凄腕狙撃手が存在したというユニークな話が残る。

それはただの狙撃手ではない。正規軍が壊滅する中で孤軍奮闘し、巧みな狙撃でもってさんざん米兵を苦しめたといった真偽不明な伝説である。

奇妙なことに、この狙撃手の風聞は日本とアメリカの双方に伝わる。

一体どこまで真実なのだろうか。

当時の日本は委任統治領として南洋にも勢力拡大していた。

民間人の移住者を含めて、軍属として後方支援に当たる女性が居たのも確かである。本土でも終戦間近でも女性に狙撃訓練させたことは当時のニュース映像などにも残る。

しかしいかに人員不足とはいえ、現地で正規戦闘員として女性狙撃手を採用したかは疑問符が付く。日本側資料にも明快な答えはない。

米軍の間ではブーゲンビル島に「トーキョー・サリー」という女性狙撃兵がいるとの噂があり、変装の達人だとか、凄腕の美人女スパイでうっかり誘い出されると射殺されてしまうだとか、様々な情報が飛び交っていたという。　ちなみに彼女にちなんだ歌までできていたそうだ　。）

ただしこの女狙撃手の名前や状況は伝聞によって異なる。

ロバート・シャーロッド著『サイパン』では、日本側の頑強な抵抗、民間人の自決の話が数多く記載されており、その中の伝聞で近い話も残る。ある日本人女性が降伏せずに、死にもの狂いで米軍に銃を乱射していた、といった話であるが、これは現実を確認された話ではない。

公式資料ではなく、日本側の戦記や小説では女狙撃手の話がまことしやかに出てくる。いくつかとりあげてみよう。

まず名前を「梅野セツ」と言い、親に売られて芸者となり、コロール島の南洋司令部の近くにある料亭『鶴の家』で「久松」という名で働いていたという。美人芸者として一番人気だったが、当時の独立歩兵第346大隊長、引野通広予備役少佐と恋に落ちた。そしてペリュリュュー島の最後の戦いに自分も戦うとついでい。頭を坊主刈りにし、軍服を着て、合う靴がないので地下足袋をはいたという。

部隊が玉碎する中、セツは降伏せずに三方から包囲されながらも機関銃を乱射し、米兵の死傷者は八十六名に達した。あまりの抵抗の激しさにアメリカが側は戦車の射撃で注意をそらし、その間に迂回して背後から射殺した、というのである。

この手の「謎の女狙撃手」は話としては面白いが、様々な疑問が湧いてくる。一介の民間人女性が即席の訓練でもって、機関銃で正確に射撃できるほどのレベルに達したのか。戦車に手榴弾にと兵器が豊富だった米軍が、むざむざ八十人以上もやられるがまだったのか。

実はこの「久松」は、語る人によって名前も経歴も異なるのだ。出身地も戦闘の場所も各種異なり、戦闘方法も手榴弾だったなどの話もある。

単純に史実の「女性狙撃兵」として見てよいかは分らない。

当時、サイパンだけでなく南洋の各島で軍人と民間人の両方が犠牲になった。沖縄のひめゆり部隊と同じく、万歳クリフなど悲愴な集団自決事件もたくさんあったのだ。

サイパンでは自決を図って重傷だった日本人看護婦が救助されたが、鉄兜をかぶっていたという。そのため「最後まで抵抗した女兵士」とアメリカのマスコミに誤って報道されたそうだ。

また対米プロパガンダ用のトーキョー・ローズ　米兵の戦意喪失させる目的で英語宣伝を行った女性アナウンサー。一人ではなくて複数とか、海外生まれの日系女性を雇い入れたとも言われるが不明な所が多い　などの女性も居たのは事実だ。

また現地にも将校慰安用の芸者がいたのは確かなようであるし、軍属女性で戦闘で何らかの手伝いを行った、降伏せずに抵抗したといった程度はあったかもしれない。

こうした断片に外国人との戦争というエキゾチズム、戦場心理のようなものも加わって半ば都市伝説のような形で成立した点もあるのではないか。

戦後はアメリカ側の証言や記録も参照されることが多い。前述の女狙撃兵の噂などが日本側に逆流入し、日本での女狙撃兵伝説の元ネタとなった経緯もあるとのことである。

「戦場の狙撃手」の著者マイク・ハスキューは、女狙撃手の話を真偽不明としながらも「こうした噂は戦闘区域では時々耳にするものである」と書いている。

ベトナム戦争を舞台とした映画「フルメタル・ジャケット」で女狙撃手が題材にされたり、ナチスドイツの冷酷な女看守が扇情的で尾ひれをつけた形で映画やジャーナリズムに晒された過去もある。「謎の女スパイ」「女スナイパー」といったように「女性」という事で色眼鏡で見られた点もあるのだろう。

ちなみに近年のイラク戦争でも「ジューバ (Juba)」という謎の女狙撃手がアメリカ兵を37名も射殺したという話が出現した。これも近年の事ながら都市伝説のように真偽不明なのは、他の女狙撃手の話と似ている。

正規軍兵士の狙撃手でさえ詳細が分かりにくいのである。謎に満ちた女性スナイパーとなると、さらに真相がつかみにくい。

## 沖縄戦

沖縄戦では最初からペリュリュュー島や硫黄島で行ったような、内地に引き込んでの持久戦略が取られた。米軍は日本軍の四倍にも登り、物資も弾薬も豊富である。戦いで米軍だけで三百万発近くの砲弾が使用されたとされる。

米軍から「歩兵戦闘の極み」と称されるような粘り強い戦いで激戦となり、民間人が巻き添えになる悲劇も生んだ。

正規軍が壊滅してからもゲリラ的な抵抗が続き、当然南洋の島々で繰り広げられたような幾多の狙撃戦も多数見られた。米軍の記録や日本側の戦術からもそれは明らかである。



狙撃銃としては三八式小銃の優秀さが観察される戦争でもあった。

しかし他の太平洋戦線の例に漏れず、歴史に残るようなレコードを打ち立てた狙撃手がいたとしても、被害がひどすぎて詳細は分かりにくい。

それでも残された貴重な記録からは、際立った狙撃戦の成果も探し出せる。

## 狙撃された高位の軍人たち

### 狙撃された高位の軍人たち

当初から狙撃による米兵攻撃は多く見られたが、犠牲者は歩兵だけでない。佐官級の死者の事例も多い。第四連隊の中隊長ジェームズ・グリーン中尉は、山中を通過中に誘い出されて狙撃死。大隊長のバーナード・グリーン少佐は視察中に機関銃で射殺された。激戦で有名な嘉数の高地の争奪戦では第六師団の第383歩兵連隊の指揮官であったメイ大佐も狙撃されて死んだとされる。統計的には中尉クラスの損耗率が極めて高かったそうである。狙撃以外では擲弾攻撃の被害もよく記録され、少佐クラスも擲弾筒の犠牲になっている。

きちんと記録に残された一部の事例でも狙撃手の存在感は高い。正確に記録が残っていればもっと名を残した人間も出ていただろう。

### 狙撃された高位の軍人たち

### 狙撃された高位の軍人たち

謎の小野一等兵 ～論争が残るバックナー中将の狙撃～

### 狙撃された高位の軍人たち

沖縄戦が特異なのはその激戦ぶりだけではない。日米両軍の最高司令官が死亡したという結末でもある。

守備側の日本軍が壊滅してから六月二十四日、総司令官の牛島中将と長勇参謀長が自決したのはよく知られているだろう。しかし実はその五日前に、米軍最高司令官、バックナー中将も戦死しているのである。奇しくも中将は戦場の大勢が決した十一日、牛島中将あてに降伏勧告文を送付したばかりであった。

六月十八日、バックナー中将は真栄里の高地を視察していた。組織的な抵抗は止んでいたものの守備隊はまだ各地で壕などにこもって抵抗を続けている。

敵を監視していた小野一等兵は壕のそばまでジープでやってきた三人のアメリカ兵を目撃する。物腰といいおそらくその軍人は高位であることが推測された。

その米兵との距離は数百メートル離れている。上官の許可なしに撃つかどうか迷ったが小野一等兵は狙いを定め、そのまま引き金を引いた。

弾丸は正確にバックナー中将の胸に命中、将軍はそのまま倒れ込んだ。護衛兵たちはパニックになって中将をジープに乗せて治療に向かったが、中将は即死であった……

前線の一等兵が敵の司令官を葬り去る。

狙撃としては太平洋戦争で最大の戦果である。しかも他の戦線では個人名が不明なことが多いのに、この一件では小野一等兵まで特定できている……

と、まあこれがバックナー中将をめぐる「狙撃伝説」である。

実は、これは米軍やU P電の記録とはまったく食い違っているのだ。公式の記録では「日本側の榴弾砲砲弾がそばに炸裂し、その破片が胸に突き刺さって死亡した」ということになっている。

どちらが本当なのか。この話は出所がはっきりしない伝聞ではない。現地の山形歩兵第32連隊に属していた松田定雄氏が、昼食後に壕の外に出て監視兵だった小野一等兵と会話しながら一部始終を目撃していたと証言している。仲（村渠理編『証言・沖縄戦』 琉球新報社 110ページ）

いわば現代の狙撃戦のように観測手、狙撃兵の側で指示を出したり、戦果を確認する。のような証人もいるのだ。史実で間違いない——と思いたくもなるが、そう単純にはいかない。

小野一等兵は東京都出身であったそうだが、厚生省の調べでは現地部隊に該当する階級・出身の人物は存在しないとのことである。

混乱する話である。

すると松田氏には失礼ながら、何かの勘違いか、もしくは創作とみなさねばならないのだろうか？ なにしろ人物の存在自体が怪しいのである。ちなみにこの小野一等兵は十九日の戦闘で死亡したとされる。（）

ただ当時の戦況を調べていくと、単純に嘘や間違いとも言えない。状況証拠が豊富なのだ。

高級軍人の戦死を前にも上げたが、真栄里地域でも同じであった。現地では狙撃死が相次いでおり、十八日第22海兵連隊長のハロルド中佐は狙撃によって戦死し、十九日には第六歩兵師団副師団長のイーズリー准将という将官までも頭を狙撃されて死んだ。

このように高級軍人の狙撃死も目立つ。「狙撃で敵の大將を倒した」としてそこまで荒唐無稽ではないのだ。

松田氏が別の人物と勘違いしたとか、名前を間違った、別部隊の人物であった可能性もあるかもしれない。

また米軍側も方面軍の司令官クラスが狙撃で死んだともなれば、本人の不注意や護衛の責任問題も出てくる。そのため砲弾の破片によるものとしたのではないかと、という見方もできる。

実際バックナー中将は戦闘終結が近いという油断があったのか、現地に中将と分かる階級章や将官用ジープで堂々と乗り付けたそうである。無線で無用心で危険だと警告を受け、一般兵士の装備に変えたが、その直後に攻撃を受け戦死した。これでは本人や付き添いに警戒心が足りなかったと見られても仕方ない。

と33りあえず今でも米軍の公式記録では狙撃死とは認められていない。現地での慰霊碑もそうなっている。

本当に中将を狙撃で仕留めたならば華々しい戦果である。しかしこの「スナイパー小野一等兵」の正体がはっきりしない限り、無条件に史実とはできない。

いずれにしる沖縄戦は日本の「狙撃史」としても外せないのは確かである。

◇ 銃による要人狙撃事件      ④ 保守派の巨魁撃たれる

ひらぬまきいちろう  
□ 平沼麒 一郎      慶応三年 1 8 6 7 ～昭和二十七年 1 9 4 7    美作国 )

● 西山直ら

平沼麒一郎は元司法官僚から大審院長、検事総長、第三十五代内閣総理大臣になった戦前の保守派の巨魁である。  
右翼団体の国本社を創設し、皇室を政治と道徳の中心に置き、大逆事件に検事として務めた経歴や、共産党や民主派をはじめとするあらゆる外国勢力、革新思想に厳しくあたったため、右翼の親玉、ファシストのように思われていた。

しかし平沼はそう単純な右翼でもなかったことは、右翼団体やナチスドイツのような国家社会主義も嫌って弾圧したことから分かる。

平沼は反共であったが、アメリカとの戦争には消極的であったとされ、一九三九年に首相に就任してからは、悪化する対米関係を修復しようとした。

このことが軍部や右派勢力を刺激し、売国奴、アメリカ内通者として襲撃を受ける。

平沼は自宅のあった西大久保宅で民間の右翼団体「勤王まことむすび」の構成員らに襲撃される。  
主犯の西山直は、拳銃でもって平沼を狙撃し、実に六発の弾丸を首などに撃ち込んだという。

しかし平沼は被害に耐えて政界に復帰する。  
それから対米戦争継続を唱える軍人から銃撃を受けたり、家を焼かれたりなど、命の危険にさらされてきた。

ちなみに「勤王まことむすび」は政財界の中心人物の暗殺を図った血盟団や神兵隊事件、5・15事件を引き起こした系譜の右翼団体である。

◇ 銃による要人狙撃事件      ⑤ 軍縮を潰した一弾

はまぐちおさち  
□ 浜口 雄幸      明治三年 1 8 7 0 ～昭和六年 1 9 3 1    土佐国 )

さ    ごや   とめお  
● 佐郷屋留男      明治四十一年 1 9 0 8 ～昭和四十七年 1 9 7 2    熊本県 )

昭和五年 1 9 ( 3 0    十一 ) 月十四日、東京駅はごった返していた。  
なぜなら当時の民政党の首相、濱口雄幸が陸軍大演習出席のために駅に到着しており、大勢の見送りの客に囲まれたいた。  
また彼の指示で一般客を締め出すことのないように通達されていたので普段の混雑に加えて、一層人が増えていた。

偶然な重なるもので、同時刻に大使としてソ連に赴任する広田弘毅も列車に乗り込んでおり、その見送りの要人や警備も加わって人であふれていたのである。

その男、佐郷屋留男 当時二十三歳 は不審な動きをしているとして一部では注意を引いていたという。  
しかし朝九時という多忙な行き交いの中で、さほど気に留める者も少なかった。

浜口は見送りの人と談笑しながら、神戸行特急の「燕号」の5号車あたりにさしかかった。  
その時に黒い影が近づいたかと思うと、鈍い銃声を轟かす。

注意深い人間ならそれが銃声だとすぐに気づいたろう。  
しかし当日は人並みでごった返し、列車発着の騒音であふれていた。

とっさに状況を判断できた者はほとんどいなかったという。  
事態は伝わったのは、浜口が腹をおさえて倒れ込んでからである。

拳銃を所持していた佐郷屋はその場で捕縛された。  
浜口は駅長室に運び込まれて治療を受けたが、意識ははっきりしており、色々と周りを受け答えもしていた。

それでも弾丸は小腸を貫き骨盤にまで食い込んでいた。  
病院で弾丸摘出と小腸の一部の切除を行う大手術が敢行され、なんとか窮地を脱する。

佐郷屋は、右翼団体玄洋社の内田良平なども支援する「愛国社」に所属していた。  
当時日本は昭和不況のただ中で難しい舵取りを迫られていた時期であり、またロンドン海軍軍縮条約で日本の海軍力などが抑制されたことで、政府は右派や軍部から強い批判を浴びていた。

軍事は大元帥として天皇が司り、その大権を一方的に犯したという世に言う「統帥権干犯」問題である。

佐郷屋も狙撃した理由としてこの統帥権干犯の問題を一番にあげたらしいが、具体的に議論となると内容が分かかっておらず、所属していた愛国者も当時の新聞から思想性が低いと論評されるなど、政治的な意図があったかは議論があるところだ。

狙撃された浜口は一度は回復して議会にも登壇したが、細菌による傷口の感染症により体調が悪化し、総理職を辞任して政治の場から身を引いた。

治療に専念したものの、容態が悪化し遂に死去する。

佐郷屋の狙撃が原因とはいえ、直接的な死因は浜口の体内の感染症と無理をしたことによる。  
そのため殺人と殺人未遂のどちらの罪を問うべきか議論が起きて、未遂罪が適用された。

◇ 血盟団による連続狙撃事件

- いのうえじゅんのすけ

□ 井上準之 助

明治二年 1 8 6 9 ～昭和七年 1 9 3 2

豊後国)
- だんたくま

□ 団 琢磨

安政五年 1 8 5 8 ～昭和七年 1 9 3 2

筑前国)
- おぬましょう

● 小沼 正

明治四十四年 1 9 1 1 ～昭和五十三年 1 9 7 8

茨城県)
- ひしぬまごろう

● 菱沼五郎

明治四十五年 1 9 1 2 ～平成二年 1 9 9 0

茨城県)

昭和前期には震災で世が乱れ、世界恐慌や軍縮にまつわる統帥権干犯問題などで、テロや暴動の嵐が吹き荒れた時期でもあった。

日蓮宗の熱烈な信徒の井上日召らは政治団体である血盟団を結成していた。スローガンは「一人一殺」「一殺多生」など過激で実践を重んじるものであった。陸海軍内部にも思想に共鳴する協力者が存在し、政財界の重鎮らを暗殺することで体制変革を図ろうとした。

血盟団の構成員らは、まず事前計画として政治家や財界の有力者選び出して実行に移った。

当時三井財閥の総帥でもあった団琢磨も標的に選ばれた。

団が標的にされたのは、大財閥の総帥であり日本経済連盟会会長などを歴任し、財界の代表者のように目立っていたこと、金解禁に伴うドル投機で利益をあげ、私利私欲に走る奸物のようなイメージをもたれてしまったこと、組合結成に反対するなど、労働者の権利反対の急先鋒のように扱われたことなどがあるという。

菱沼五郎は農家の三男坊として生まれ、古い水戸学の右派的な思想の影響を受けたとされる。菱沼は三井本社前に待ち伏せをし、正門から入ろうとした団を至近距離から胸に銃撃を食らわせた。この傷が元で団は死去する。暗殺は最新のブローニング拳銃によるものだったとされる。

元大蔵大臣である井上準之助が狙われたのも不況と関係している。大蔵大臣として昭和五年の一月に金解禁を行ったがタイミングが悪く、結果として世界恐慌に巻き込まれて経済悪化させる要因につながった。こうした事から井上は恐慌の戦犯扱いされて血盟団に狙われることとなった。

狙撃者の小沼正は右派的な環境ながら、中産階級の家庭生まれで極端に貧しいというわけではなかった。しかし成年になるころには実家の家業が失敗、生きていく中で貧困、下層階級の現実、資本主義社会の裏面の汚さを知って、血盟団に入る下地ができたという。

海軍軍人から調達したというモーゼル式拳銃を手に、小沼は選挙の応援演説に小学校にやってきた井上準之助を襲撃する。校門付近で背後から三発狙撃した。三弾中三弾とも井上の身体に命中する。右胸と背中、腰の三箇所 に被弾して井上は暗殺された。

こうした一連のテロは後の五・一五事件や二・二六など大きな政治的なテロへとつながっていく。

■現代日本の狙撃手

戦後は民間の銃器所持が本格的に規制され、軍事関連は厳しく抑制された。  
戦争の惨禍の反省に立ち非戦と平和主義に基づく国づくりが行われた。軍事的な要素は社会的に排除されていった。

戦後社会の「自衛隊は軍隊かどうか」で議論がある中では、狙撃どころの話ではなくなってくる。  
その象徴的な一件が一九七〇年に起きたシージャック事件の対応であろう。

盗難車を運転する一団が交通違反をきっかけに取締の警察官を負傷させて逃亡、なおも警察や一般人を狙撃し、シージャックを起こすなど犯行を繰り返す。最終的に警察の狙撃によって射殺された事件である。

民間人に負傷させ、次々に銃撃を繰り返すなど危険性が飛び抜けていたため、緊急避難措置措置として射殺もやむを得ない一面があった。  
しかしながら警察側の狙撃手は、事件後に人権擁護協会の弁護士によって殺人罪で起訴されてしまう。ここが論争となった。

ことは個人の犯罪でも、軍事活動でもない。  
民間人保護と、治安維持に基づいた公的な行為である。警察の狙撃手は民間人を巻き込まず、一撃で犯人を倒す腕の冴えもあった。  
しかし一部で犯罪者のような扱いを受けたのだ。

平和や人道が重んじられるのは当然ながら、こうした社会状況では「狙撃の技術云々」どころではない。  
公的な軍事組織による狙撃事例も乏しくなって当たり前である。

ここではいくらか見られた国境紛争に類するもの、民間の治安維持に関係したものの、現代の自衛隊や保安組織における狙撃事例を取り上げていく。

◇ 治安維持組織における狙撃      警察・機動隊・S A T

機動隊は戦前の特別警備隊からの流れを汲む。戦後の政治的な介入や何度かの組織改編を経て現在の姿に落ちついた。

戦後社会では軍事的なテロは減ったものの、労働運動や刑事犯罪に関連して狙撃的な行動が求められることがあった。  
これにより特殊銃隊、特殊警備部隊などが誕生し、最終的には銃器対策部隊へと収斂されてくる。

また現実のハイジャック事件などを受けて様々な特殊組織が発展していき現在のS A Tに落ち着いた。近年では部隊に狙撃銃が配備されるなど、世界的なテロ対策も兼ねて実践的になってきている。

また一般の警察の刑事部捜査第一課などにも「特殊捜査班」が設置されることがあるという。  
これは誘拐や立てこもり事件にも対応し、解決の課程で狙撃も考慮されている。  
当然訓練課程でも狙撃技術の錬磨が重視されているようだ。

◇ 海上保安庁

終戦によって帝国海軍が解体されると、軍隊とは異なる別の海上の治安維持組織が求められるようになった。  
戦後の平和主義と非軍事路線の中で、妥協策として生まれたのが海上保安庁である。

運輸省の不法入国船舶監視本部などを元として、昭和二十三年 1 9(4 8 )) 五月一日に発足した。

当初は小規模だったが、時代を下るごとに治安維持関連の警備業務も増加し、組織も拡張されてきた。

密輸、違法操業、シージャック、密入国、テロ行為のリスクは常に存在し、近年では不審船や国境紛争も相次いでいるため、それに応じた組織が求められている。

海上保安庁における機動隊や銃器対策課というべき特別警備隊や、特殊部隊にあたる特殊警備隊なども生まれてきている。

◇ ラズエズノイ号事件    一九五三の日本領海侵犯

昭和二十八年 1 9(5 3  ) 八月八日、海上保安庁は巡視船を猿払村知来別の海岸付近に差し向け警戒を強めていた。  
事前に日本に潜入していた諜報員を、ソ連側が迎えにくるとの情報を得ていたのである。

以前より樺太経由で工作員が何度も北海道に密入国しているとは噂されていた。

当時の海上保安庁は発足したばかりでまだ小規模な組織だった。十分な火器や防弾用具も無く、乗員の格闘訓練なども不足していた。

ソ連の漁業巡視船、「ラズエズノイ」はひっそりと海岸に接近してくる。  
そこに待ち構えていた巡視船が停船命令を行った。突如ラズエズノイは火器によって発砲し逃走した。そのまま逃走しつつも保安庁巡視船に攻撃を続ける。

保安庁側も対応を迫られた。  
不十分ながら配備されていた拳銃や自動小銃で応戦する。大規模な戦闘になった場合、果たして対応できるかは未知数だったが、保安庁側の狙撃した弾丸がソ連船の操舵鎖を切断した。

これによってラズエズノイ船は停船に追い込まれ抵抗を断念。  
船長含めた全員を出入国管理令違反などで逮捕した。

正式に逮捕したことでソ連側も日本に謝罪し事件は収束した。

◇北朝鮮による国境侵犯

北朝鮮と見られる不審船は近年ニュースで有名になった。  
しかし実は同じタイプの不審船事件は昭和三十年代続発してきており、海上保安庁が認知してるだけでも二十件近くあるという。

一際大きかったのは、昭和六〇年　19(85　四月)二十五日、宮崎県沖の日向灘で発見された不審船だ。  
漁船を装っていたのがばれると東シナ海に逃走し、二十隻以上の巡視船や航空機で追跡したが追いつけなかった。

いずれも戦後しばらくは武力行使に関するアレルギーが強く、その程度では砲撃などの手段はとられなかった。

それが不法な侵入事件が続発するにつれ変化していく。

能登半島沖不審船事件　不審船による日本領海侵犯事件

一九九九年三月二十一日、午後十時頃、能登半島沖で不審な電波発信が傍受された。

数日前から北朝鮮の無線通信などに異常な兆候があるのを米軍や自衛隊も把握しており、韓国の情報機関も北朝鮮の侵入を警告していた。

関係省庁に連絡され二十二日から警戒態勢が取られる。  
翌二十三日に海上自衛隊のP　3C哨戒機が、該当海域で日本船に偽装した不審船を発見する。

佐渡島西方十八キロに「第一大西丸」、能登半島東方六十四キロに「第二大和丸」。この二隻だった。

通常の漁船にしては外観が不審すぎ、また船に交信を試みても相手からの返答がない。  
海上保安庁は特殊警備隊　SST　を招集して「ちくぜん」に待機させた。

不審船は日本側の接触や警告に答えず、早い船足で追跡を振り切ろうと試みた。  
このため第九管区海上保安本部　新潟　に威嚇射撃が許可される。

「ちくぜん」が「第二大和丸」に20ミリ機関砲で曳光弾を五十発、「第一大西丸」に13ミリ機銃で計百三十五発、「なおづき」の乗組員たちが64式小銃で千五十発　曳光弾五〇〇発　の威嚇射撃を行った。

いずれも空中や海上への威嚇射撃だったが、不審船は速度を上げてそのまま逃亡した。

巡視艦艇は速度についていけず、また官邸が追跡打ち切りの方針を見せはじめたため、そのまま収束しそうになる。  
しかしなぜか「第一大西丸」は距離を置いたまま動きを停止した。  
既に状況は海上保安庁の把握できる範囲を超えており、自衛隊法に基づく海上警備行動がとられ海上自衛隊が動く。

各護衛艦は二隻に対して搭載速射砲で二十五回三十五発の警告射撃を行い、P-3C3機が150キロ対潜爆弾十二発を投下する警告爆撃を敢行した。

不審船に立ち入り検査を行うために、護衛艦「みょうこう」は乗組員に64式小銃と9ミリ拳銃が配られたが、ほとんどはテロ鎮圧の専門訓練は受けておらず、防弾チョッキの備えもなかった。

不審船もそれから日本側が停船させようとするのを避けて高速で逃走を続け、最終的に防空識別圏を越えたために追跡は終了した。

そのまま北朝鮮の港に帰ったとされる。

この事件はそれまでのテポドンや拉致を含めて、北朝鮮の不審な行動を日本に印象づける結果となり、平和主義的な世論も変化を見せ始める。

保安庁ではこの事件を教訓に、強襲と臨検を主とする特殊部隊「特別警備隊」　SRU　と、護衛艦ごとに臨検を任務とする「立入検査隊」　立検隊　が編成された。

奄美沖不審船事件

一九九九年の三月に起きた能登半島沖の不審船事件を受け、海上哨戒は見直されるようになった。

平成十三年　20(01　十二)月十八日頃、防衛庁に不審船に関する情報がもたらされ、十九日に喜界島通信所で不審な通信電波が捕捉された。

海上自衛隊のP　3C対潜哨戒機が島周辺の哨戒を強化していると、二十一日の十六時三十分頃「長漁3705」という不審船を発見した。  
最初は中国国旗を掲げたりもするも、中国側に問い合わせても該当船籍はなく、停戦にも応じなかった。

不審船はヘリと航空機、巡視船三隻から追跡されたが、再三にわたる停戦要求や警告に従わずに逃亡を続け、ついに威嚇射撃が行われた。

なおも逃亡を続ける不審船に対して機関砲による船体射撃、両脇を囲んでの強行接舷を試みたが、相手側が機関銃によって銃撃を開始、双方による銃撃戦となる。

海上保安官らは20ミリ機関砲や64式小銃で応戦する。  
不審船側は何らかの不審物を海上に投棄、対戦車用のロケット弾も使って砲撃をしてくる。

巡視船「あまみ」は船体に百発以上の銃撃を受けて、三名の乗組員も負傷した。  
銃撃戦の末に不審船は自爆した。  
十名程度の乗組員は海に投げ出された。

海上保安庁側は、救命器具を海中に投げ入れて乗員を救助しようとしたが、相手側は拒否してそのまま全員死亡したという。

海上の狙撃者たち

現在では主に二種類の武力措置が可能な部隊が存在していると言われ、それが特殊警備隊と特別警備隊である。  
これは特殊警備隊がいわば海上保安庁版の特殊部隊であり、海上テロ事案などの対処が主な任務とされている。

そして特別警備隊はいわば海上保安庁版の機動隊であり、警察の機動隊や銃器対策部隊に相当する。

海上デモ対策や港湾施設警備を目的に創設されたという。海上テロなどの場合は特殊警備隊の補助的な役割を担う。

ただし両者は公認された独立組織ではなく、便宜的にそうした通称で区別されているという。  
また人材も同じように重複する面があり、特別警備隊から選抜された人間が、特殊警備隊に配属されるという。  
そして特殊警備隊から除隊になった人間が、特別警備隊に戻り、テロ対策や技術的な指導にも携わる事があるそうだ。

特別警備隊は「特警隊」との略称があり、各管区本部で警備実施強化巡視船一隻につき二個小隊の割合で編成され、通常は一般乗務員と同様に船舶の運航や海難救助に従事する。  
事案が発生した時の出動や訓練は独立しているという。

例えば海上デモなどが行われる場合は、各管区から警備実施強化巡視船が集結する。  
その際に特警隊も所轄海上保安部の巡視艇に乗り込んで警備する。出動の対象としては基本的に所属管区の別はなく、全国的に対応する。

また海上テロなど大規模な事件が発生すると特殊警備隊　S S T　の支援部隊としても動く。

両者は海上保安庁の一般業務の手に余るレベルの仕事 —— 武器や麻薬の密輸、密航、海上テロ、プルトニウムなど核燃料輸送などの事案に対応すると思えばよい。

また狙撃班も用意されており、職務上狙撃技術の錬磨にも熱心という。  
中には優秀な狙撃手 —— 一秒間に数発の致命傷を負わせられる狙撃能力があるレベルの者 —— も配属されているとのことである。

実は特殊警備隊 S S T の前身には警乗隊が存在したが、その頃より狙撃手は存在したという。

具体的には国際的なサミットでは特殊警備隊が出動し、空から狙撃班が護衛にあたっていた。

また民間の危険な事案として爆弾処理があるが、そうした処理を行う人間を標的にする狙撃事件も海外にはよくある。  
そうした事例を参考にして、狙撃者を牽制するカウンタースナイパーとその訓練も為されているとの話である。

ただし自衛隊と海上保安庁の対立と同じく、現場では歓迎されない風潮も一部にはあるそうだ。

### ◇ 自衛隊の狙撃手

#### 抑制されてきた狙撃活動

本来なら自衛隊にこそ狙撃事例は豊富にあってよさそうなものである。  
しかし戦争で破滅した反省から、戦後日本は軍事行動に極めて慎重で抑制的であった。  
表に出るのがあまり歓迎されない風潮があったのである。

ハイジャック事件などが起きても他国のように軍隊に相当する自衛隊が出動してくるのはあまりない。  
できる限り警察その他の治安維持機構で対応しようとする意識が強かった。

軍隊活動が厳しく制限されている以上、名狙撃手はおろか狙撃事例を拾い出すのにも苦労する。狙撃技術などで先進的なものを探すのも難しい。

公の記録では従来は部隊としての狙撃集団や狙撃銃の配備もなかったと言われている。

狙撃手に類するもので言えば、優秀な射撃の成績を収めた者が選拔射手となり、集弾性が良好な 6 4 式小銃にスコープを備えて使用する程度であったようだ。

#### 狙撃への着目

現在の自衛隊は変化を迎えている最中である。  
政治の面での法的な改革だけでなく、海外の P K O や後方支援、様々な軍事活動に参加する機会も増えている。

冷戦も終わってテロや領海侵犯などに対応する機会も増えている。  
憲法や軍隊のあり方を含めて、国民の自衛隊に対する意識の変化も生まれていると言えるだろう。  
こうした変化を通じて、「狙撃」に関しても注目に値する改革がみられるようになってきている。

平成十七年には防衛大綱の決定に基づき第一師団と第三師団の改編が行われたとされる。  
主に普通科連隊を対象とするものであり、定員を四 0 0 名ほど増員し、連隊一ケにつき六ケの狙撃班 ( 六名で編成　を配備するよう決定された。

個人の位置確認のための G P S 、野外通信システム、個人用暗視装置などの装備も導入された。　米軍などとも協力し、先進的な狙撃集団の養成も試みられているそう  
だ。

射手は技量によって検定と級分けがあるという。  
最上クラスの中でとりわけ優秀なものが狙撃過程に進むようで、体力・技術・人格精神面での適性も測られるそうだ。

現状では陸上自衛隊普通科、特殊作戦群、そして海上自衛隊特別警備隊に狙撃手が配備されているのは間違いないようである。

今後は狙撃の分野でも変化がみられるようになってくるかもしれない。

#### 狙撃用装備

狙撃銃の配備も開始されており、主にレミントンのボルトアクション式 M 2 2 4 S W S 対人狙撃銃が採用されているとのことである。

銃身は黒や迷彩式が多く、スコープと二脚が付属している。米軍も同じタイプの物を採用しているようだ。

特殊な自衛隊の狙撃戦術

狙撃手は敵を狙撃するために潜入攻撃も行う。これは王道といってもいいよく用いられる戦術だ。

自衛隊でもギリースーツ カモフラージュ用の迷彩服の一種。草や紙や木々などでその場の自然に擬装する などを着込んだ本格的な訓練も行っているようである。

しかし現自衛隊では敵地侵入、敵の狙撃といった戦術は執らず、自部隊の指揮官防衛に重点を置いているという。

これはあくまで専守防衛の軍隊であり、敵の指揮官狙撃といった攻勢的なものはとらないという運用思想なようである。

今後の法制整備によってどう変化するかは分からないが、この戦術が維持されてるとすると、狙撃のスタイルとして重要な部分が欠落してるのは否めない。

確かに平和主義で非戦を建前とする憲法である。  
他の国は「領土外に派遣されて活動する」が可能性として否定できず、そのためにも積極的な狙撃戦術が想定されている。  
また全体的な軍事行動の中で狙撃部隊も位置付けられるわけだから、「専守防衛」などと悠長なことが言ってられない事情もあるのかもしれない。

確かに考えてみれば「敵の重要人物を狙撃して暗殺する」などといったことは生々しい本格戦闘だ。

実際の訓練や運用でどこまで制限があるかは、機密にも属するかもしれない。

軍事も突き詰めれば政治と不可分である。  
それが狙撃の一運用にまで影響を及ぼし、建前としての奇妙な戦術をとらせる。

今後日本で狙撃手が生まれてくるかどうかは、日本の政治の選択と国際状況次第だろう。

◇ 主な戦後の狙撃事件

ぶりんす号シージャック事件 昭和四十五年 1970 五月十一日

本事件の主犯となるK 昭和二十四年生まれ、当時二十歳 は、)仲間の少年二人と盗難車で広島に向かっていた。  
途中の交通違反をきっかけに警察に車を停車させられ身柄を拘束される。  
そのまま警察署に連行されそうになると、突如所持していた猟銃やナイフで警官を負傷させ逃亡を図った。

仲間の二人は早々に逮捕されるも、主犯のKは警官の銃や銃砲店からライフルを奪って逃亡を続けた。  
さらには広島の子品港に停泊していた「ぶりんす号」を乗っ取り、瀬戸内海にまで逃走する。

海上でも追跡してきた広島県警の警備艇を狙撃し、乗員の警部補に重傷を負わせる。  
またモーターボートの一般人二人を狙撃、マスコミのセスナ機まで銃撃してオイルタンクに穴を開けた。

このため緊急避難措置として犯人確保に発砲が許可された。  
狙撃の担当として大阪府警察所属の警官が任務を託された。

狙撃者は犯人に注意しながら船から四〇メートルほど離れた防波堤に待機する。  
そして犯人が姿を現した瞬間に狙撃、放たれた銃弾は一撃で犯人の左胸に命中した。

一度に犯人を仕留めた名射撃だった。

この事件は終始マスコミによって生中継されていた。  
犯人が銃撃される瞬間までもが報道されていたのである。

そのため後にこの狙撃が大いに社会で論争になる。  
適法だったかどうかが争われたのである。

捜査本部としては殺害の意図はなかったという。  
上司の指示は急所からはずすというものだった。しかし弾丸は犯人の左胸を貫通し、病院に運び込まれて治療を受けるも死亡した。

このため人権擁護の協会に属する弁護士によって、事件を担当した広島県警の本部長、また狙撃者の素性が突き止められて、殺人罪で起訴されるという結果を残す。  
(結果は不起訴処分 )

事件は解決したものの将来の法整備や狙撃手のあり方を含め一石を投じる一件となった。

あさま山荘事件 昭和四十七年 1972 二月十九日～二十八日

あさま山荘事件は、当時の左翼の赤軍派を中心とする勢力が山荘に人質をとってたてこもり、機動隊や警察との武力闘争を繰り広げた事件である。  
闘争の様子がT V中継されたこともあって、戦後の事件として大きく知られる。

赤軍派は山荘に籠城する前に銀行強盗を繰り返して資金を調達し、銃砲店なども襲撃して散弾銃などで武装していた。

赤軍派の何人かは指名手配を受けてすでに逮捕されていたが、残党の五名が長野県の軽井沢地方に逃れ、あさま山荘までたどりついていた。  
犯人らは現地管理人の妻を人質にして立てこもる。

赤軍側は何ら要求を行わず条件交渉ができなかったこと、警察側が人質の安全確保と発砲抑制の穏健な方策をとったために、事件は長期化した。

赤軍派は12ゲージ散弾銃、二十二口径ライフル、38口径拳銃を所持し、数百発の弾丸の余裕があり、鉄パイプを改造した爆弾も備えていた。  
このため激しい抵抗を見せて、警察側も手を焼いたのである。

これには先ごろのシージャック事件での警察の狙撃を問題視する世論も影響しており、警察側が攻撃的な戦術が取れなかったことも理由であった。

赤軍側は合計で百発以上の銃撃を行って民間人も巻き添えになる激しい攻防となる。

武器や食料が豊富だっただけでなく、赤軍側はバリケードにあつらえた銃眼から正確な狙撃を行った。これが機動隊などに犠牲が増える原因ともなった。

特に機動隊はヘルメットのデザインが隊長と副隊長の判別がつくように作られていた。そのため突入の攻防戦で隊長クラスが三人も狙撃されて死亡し、急遽ヘルメットから指揮官表示が取り除かれた。防御のための機動隊の盾も弾丸が貫通することが分り、二枚重ねにされた。

また犯人を説得しようとした民間人も狙撃されて死亡する。

包囲する側は有名な鉄球によって山荘の壁や屋根などの遮蔽物を破壊し、放水銃、威嚇射撃、催涙ガスなどで攻撃したが、本格的な武力攻撃をためらったことが、なかなか決着を見なかった。

最終的に強行突入して赤軍派は逮捕、事件は決着したが、局地的なテロ行為でも戦場と似た現象が見られたのは興味深い。機動隊の指揮官が狙撃され、一時は指揮系統に混乱をきたすなどしたのである。

長崎バスジャック事件 昭和五十二年 1977 10月十五日

その日、長崎の平戸市から長崎駅前に向かう路線バスが、突如中年男性の二人組に乗っ取られた。バスはちょうど大村市市中を走行していた。

男らは散弾銃と爆弾で武装しており、「阿蘇連合赤軍」を名乗った。ガソリン給油で立ち寄ったスタンドで警察に連絡させ、数人の政治家や評論家の名前を上げて連れてくるように要求する。さらに数十人分の食料や水、毛布を調達させようとした。

男たちは当初政治団体を名乗っていたが、言ってることが矛盾しており、政治犯ではないと警察側は見抜いた。

十八時間経過した後、警官らは人質の体力的な限界を考慮し強行突入を決定する。

機動隊の一人が「俺を撃てるか？」などと主犯の男を挑発し爆弾を投げさせた。

爆破して混乱に陥った瞬間を狙って長崎県警の機動隊三名が中に突入。一斉射撃を起こった。

主犯を射殺されもう一人も重傷を負って人質は救出された。人質に怪我は無かった。

三菱銀行立てこもり事件 昭和五十四年 1979 10月二十六日

閉店間際に銀行に押し入った犯人は、猟銃を発砲して現金を強奪しようとした。行員やかけつけた警官をためらわずに数人銃撃し重軽傷を負わせたり射殺した。

銀行周辺は完全に包囲されたが、なおも行員などを人質にたてこもる。事情で解放された何人かをのぞき、人質は三十人以上にのぼった。

犯人が殺人をためらわず、常軌を逸した行動を繰り返し危険性が高いこと、また人質の体力の限界であるのも考慮されて発砲による射殺も選択肢に入れられた。

外からパトカー一一三台、警官六四名が集結し、直接三百人以上に包囲されて既に脱出は不可能である。

しかし犯人もバリケードを築き、人質が多数でもあった。強行的な突入は難しかったのである。

二十八日、中の人質とひそかに連絡をとっていた警察は大阪府の第二機動隊・零中隊 (SAT の前身部隊) の強行突入を決定する。七名の隊員がほふく前進で侵入。「伏せろ！」と合図をすると同時に、居眠りをしていた犯人に拳銃で八発銃撃。三発が命中して犯人は意識不明に陥った。

事件開始から実に四十二時間を経過していた。

突入前には外からの狙撃も考慮されて、実際に狙撃班も準備されていた。しかし場所が銀行で半分以上外側のシャッターが閉められていたこと、犯人は人質に自分を囲うように壁を作らせ見張りも立てていた。

こうした事から最終的に強行突入での狙撃になった。

そのため使用された銃器もライフルではなく拳銃であった。種類はおそらく S&W 社M1917回転式拳銃だろうと言われている。

## ◇注目を浴びた民間の狙撃事件

戦後日本は対外軍事活動は少なくなったものの、国内の政治や反社会的な組織に関係した事案はいくらか見られる。世界的には冷戦のさなかであったために、それが国内にも反映されて、政治的な衝突もしばしば見られた。また戦後は米軍が安保条約によって駐留し、左派勢力が基地に攻撃を行ったり、米軍軍人が一般人を狙撃して日米間の国際問題に発展したこともあった。

## 政治関係

昭和六十三年 1988、自民党所属の長崎市長本島等が「天皇に責任はあると思う」が、「日本人や連合国の意志によって責任を免れ、新しい憲法の象徴になった。私どももそれに従わなければならないと解釈している」と発言したことが物議をかもした。

報道機関によって「天皇の戦争責任がある」という部分だけがクローズアップされたためである。

本島本人はタカ派で日教組などを攻撃していた政治家だったが、発言の結果右派の批判を浴び命を狙われる。ついに平成二年 1990 の1月十八日、右翼団体の正氣塾所属の若島和美によって背後から狙撃された。

市役所前で公用車に乗り込もうとした瞬間を狙われたという。



弾丸は左胸を貫通し、全治一か月の重傷となるも生命は助かった。  
若島は殺人未遂罪で起訴されて懲役十二年が確定した。

## メディア関係

報道機関や出版社には政治団体による攻撃はよく行われてきた。  
よく目につくのは、皇室関係の不敬に関係するものや、左派的な信条による主張が攻撃を招くケースである。  
特に左派系とされる朝日新聞は、その政治的立場から民族系団体などからよく攻撃を受けていた。

本社や支局、社員寮を問わず何度も狙撃されたり、銃弾の送付や放火とたびたび標的になっていた。　　リグループの元会長江副浩正の自宅に「赤い朝日に広告を多く出稿している」として銃弾が撃ちこまれたこともあった)

もっとも社会を震撼させたのは、阪神支局に目だし帽をかぶった男が散弾銃をもって襲撃した「赤報隊」事件であろう。  
現役の記者二人が支局に居たところを散弾銃で襲撃され、一人は死亡、もう一人は全治三か月の重傷を負った。

現役記者がテロによって殺されるのはメディア史上初めてとされ、表現の自由と言論の独立性をめぐる議論が活発になった。

犯人グループは「日本民族独立義勇軍 別働赤報隊」と名乗って以前から朝日新聞を攻撃し、朝日以外でもたびたび事件を起こしていたとされる。

## 暴力団関係

暴力団の抗争ではそれこそ小競り合い含めて多数の狙撃事件がある。  
その中でもよく報道されるのは、一般人が巻き添えになったり、要人が狙われたケースである。一般社会にまで危害を及ぼすと暴力団への批判が高まり、暴対法なども生まれるようになった。

平成十九年　２００７　四月十七日、公共事業の受注をめぐる争いで、長崎の伊藤一長市長は背後から二発の銃弾を浴びて銃殺された。  
犯人は山口組系水心会に属する城尾哲弥であり、社会的影響を考えて一人の死者にも関わらず一審では死刑判決を受けた　二審で無期懲役)  
五連発のリヴォルヴァーを使用して狙撃したという。

ほかにも日本最大の広域暴力団山口組の組長、田岡一雄が狙撃された事件も一般社会の注目を浴びた。  
昭和五十三年　１９７８　七月十一日午後九時過ぎ、ナイトクラブ『ベラミ』に滞在していた田岡組長は、大日本正義団に属する当時二十六歳の鳴海清に狙撃される。  
一命はとりとめたが、銃弾は頸部を貫通して全治二か月の重傷を負わせた。

ここまでは最大規模の暴力団トップとはいえ、組同士の抗争が絡んだ通常の狙撃事件だ。  
田岡組長も当初「わしを狙うとは大した奴だ」とまで発言していたという。

しかし鳴海清はさらに過激な行動に出る。  
一般のスポーツ紙に田岡を挑発する声明文を発表したのだ。面子を潰された山口組は激怒し、総力をあげて鳴海を追う。

鳴海側の関係者数人が殺された挙句、最終的に鳴海清氏自身も六甲山中に死体となって発見された。

## ◇ 銃による要人狙撃事件　　● 国松長官狙撃～治安機関のトップが狙われる～

一九九五年三月三〇日。

その日は朝から小雨が降っていた。三月も終わりであつた。  
荒川沿い、空を突くようなタワーマンションが立ち並ぶ中のE棟エリア。  
時刻は八時半でいつも通りに出勤しようと五十代の背広姿の男が現れた。

ただのサラリーマンではない。名前を国松孝二。  
当時警察庁長官としての職にあり、名実ともに日本の治安機構のトップであつた。

玄関の外には秘書官と警備が待機しており、国松に傘をさしかける。

一国の長官ながらもものものしい警備ではない。  
国松自身が信条としてもものしく警備されるのを嫌っており、他の警備は車の中で待機している。  
この姿勢が仇となった。

その男は隣のF棟に潜んでいた。  
黒のレインコートに身を包み、手にしているのはコルト社のパイソン・３５７マグナム。  
歩んで行く国松に拳銃で狙いを定める。

朝の住宅地に響く渡る爆音。  
激しい音に驚愕してベランダに出ていた住人も身を乗り出した。

地階では国松長官が胸を抑えて地面に崩れ落ちた。  
さらに二発目の弾丸が右太腿にめり込む。

やっと事態を把握した秘書が自分の身体でもってかばおうとしたが、三発目が前のめりになっている長官の臀部辺りにくい込んだ。  
秘書は必死になって長官の身体を引きずって植え込み近くに隠す。

異常を察知して駆けつけてきた警官らに威嚇射撃をしたあと、狙撃者は姿を消した。

長官の状況は絶望的だった。  
集中治療室で緊急の手術が行われたものの、血圧は既に60近くまで下がっている。  
六回ほど心臓停止寸前になり、輸血も20リットル近く行った。  
手術は八時間にも及んだ。

しかしながら執刀した医師たちが名医をうたわれる腕前であつたこと、国松自身の抵抗力もあつて最終的に一命をとりとめた。

「あと少し遅かったら確実に死んでいた」と言われる状態にもかかわらず、二ヶ月半後には公務に復帰できたのだ。

――「オウム真理教」の事件は、警察組織の長を狙うという大胆不敵な犯行である。

犯人探しには総力を挙げられたが、事態は混乱を極めた。

犯行現場には北朝鮮の勳章バッジや韓国ウォンが目につくように残されていた。  
有力な容疑者候補として挙げられたのが、当時毒ガステロを起こして捜査中だった宗教団体オウム真理教である。実際に事件後、捜査をやめるよう脅迫する電話がかかってきた。（）

オウム信者であった警視庁の巡査長が有力容疑者とされたり、左翼の過激派が自身の犯行だと発表したり、海外組織に関係付けられたりと情報は錯綜した。

そして最終的には不明のまま時効を迎える。

事件の真相はどうあれ注目されたのが犯人の狙撃のスキルである。  
犯人が長官を銃撃した距離は約二二メートル。拳銃で正確な射撃を行うとなるとかなりの距離だ。  
また動く標的である相手に、動じることなく二発目も正確に命中させ、秘書が身体でかばった隙間を縫うように三発目も命中させている。

また使用された弾丸が、ホローポイント弾の「プレミアム・ナイクラッド357マグナム」という特殊な代物であった。  
ナイクラッドとは表面をナイロン樹脂で加工しており、射撃時に気化した鉛の有毒ガスを吸い込まないようにするため。屋内練習などでよく使われる、ホローポイントとは先端にくぼみがあって標的に命中するとキノコ状に先端が潰れる。その分貫通力は落ちるがエネルギーが発散され、標的の破壊力は強まり、行動力も奪える。（）

こうしたことから過去に射撃の訓練を受け、銃の扱いにも習熟しかなりの知識と入手ルートのある人物像が想定された。

十万人を超える人員が動員されて大規模な捜査が行われたが、公式には犯人逮捕に至っていない。

真の犯人像がどうあれ、その狙撃スキルといい、逃走手段の速やかで手馴れた点といい、戦後の要人に対する狙撃事件としては抜きんでいた。

## §コラム 才能か修練か 射撃の技術はどう決まる？

言うまでもないが、狙撃の巧拙を決めるのは「射撃」のスキルである。  
他にも状況判断能力、索敵、サバイバル能力、忍耐力など様々な要因が絡んでくるであろうが、もっとも重要なのはこの射撃能力であろう。

ここに他のあらゆるスポーツと同じく狙撃手としての適正も関わってくる。  
ここで面白いのは「射撃」という分野に関する「才能」論議である。

軍事的な技術だけでなく、あらゆる武術や芸事まで「才能」というものがあるのは誰もが認めるところだろう。  
もちろん「天才は努力が創る」という言葉もあるし、努力なしに上達は不可能であり、努力の方が重要とする考えもある。

どちらが正しいかはそう簡単には決着がつかない問題だが、射撃に関してはかなり面白い現象が見られる。

スポーツ射撃だろうが軍隊だろうが、まず射撃の基礎訓練から入る。  
当然、練習を重ねるうえで上達する者もいれば、そうでない者もいる。  
人によって差があるのは他の芸事と同じである。

しかし射撃に関していうと「最初から上手い」という存在がかなり際立っているのである。

前のコラムに軍学校出身でもない作家の安岡氏や五味川氏が軍隊に入隊して射撃を評価された話を引用した。  
射撃の現場では時折そうした現象は見られるという。  
「それまで銃を触ったことがない」といった人が、射撃のイロハを教わるとズバ抜けた成績を見せるのである。  
単純に「筋が良い」といった話でない。時にはプロにも匹敵するレベルなのである。

これなど「練習が第一」といった観念に挑戦するような事例である。  
だとすると射撃が上手い＝優良な狙撃手も才能で決まるのだろうか？

確かに才能を否定するものはいないだろう。

しかしここで注意すべき点がある。世界史に名を残すようなスナイパーには意外な共通点があるのだ。

狙撃手が百パーセント才能のみで傑出しており、練習や環境に左右されないとする。  
その場合優良な狙撃手はあらゆる職業から、それこそ環境の差なく輩出されてよさそうなものである。

しかし有名な狙撃手を見てみよう。

名高いフィンランド軍人のシモ・ハユハ、非公式確認戦果を含めると五四二人を狙撃で仕留めた。未確認を含めると八〇〇名以上と言われる、同じくフィンランドのスロ・オンニ・コルツカ、ソ・(フィン戦争で四〇〇名以上を射殺したとされる、ソ連のヴァシリ・グリゴリエヴィチ・ザイツェフ、スターリングラードの戦いなどで二五七人を倒す、ウィリアム・エドワード・シン、第一次大戦でオスマン帝国兵を一五〇名射殺、など)は狙撃手に興味がある人間なら誰でも知る有名人である。

隔絶した天才的なスナイパーである彼らには似た経歴がある。  
狩猟などを通して、若い時分から銃と射撃に親しんでいたことである。

またそれは日本でも同じである。幕末の事例でも分かるが、マタギや元猟師は優良なスナイパーを輩出する分野でもあった。

### 軍やスポーツ射撃、狩猟で経験を積む

基本的に銃器は特殊な道具である。規制が厳しい国ではそう簡単に触れられる武器ではない。  
日常から銃器を扱う人間となると軍人や猟師に限られてくる。

猟師などは実際に山や森などの特殊な地形に入り、危険な自然や猛獣とも渡り合う。  
銃の実践での経験、偵察・索敵・現場での対処能力など自然と狙撃手に必要な訓練が備わってくる。

猟師経験者に傑出したスナイパーが多くなるのは納得できる事である。

しかし単純に「才能」説を採るなら、経験がどうあれ、猟師出身者に一流スナイパーが多くなるのは不可解になるだろう。それは環境や修練の影響が大きいと認めることになるからである。

認知心理学者・神経科学者のダニエル・レヴィテンは音楽などの人材研究から「世界レベルの技術に達するにはどんな分野でも、一万時間の練習が必要」とし、これを近年ジャーナリストのマルコム・グラッドウェルが、あらゆる分野で一流の人材は「一万時間」程度の経験を積んでいる、才能というよりも幼少の頃からの経験が天才を作ってきた、といったことを示唆して反響を呼んだ。

ここから、若い時から狩猟やスポーツ射撃で経験を積んだため、傑出したスナイパーとなる下地ができたとするなら、説得力がありそうだ。

ただそれでも実際に射撃訓練では早い時期から才能を示す人間もいる。

これは銃器や競技の種類によっても多少違ってくるが、ピストル射撃などは初心者でも才能があると世界大会に参加するレベル程度なら出せるという。それでもいくら才能を示しても、やはり国際大会でトップクラスになるのは何年もの修練が必須であるそうだ。

つまり才能は重要であるが、やはり最高峰クラスは長年訓練を重ねてきている。

しかしオリンピックのメダリストを目指すならともかく、軍隊ではトップ賞を狙うのが目的ではない。戦場で使い物になればよい。狙撃手の目的は敵を打倒したり、負傷させて行動不能にさせたり、混乱を巻き起こすのが目的である。ある程度射撃に才能があればそれだけで重要であり、実用にもなったのだろう。

また競技でのスポーツと戦場のスナイパーでの違いもあるだろう。実際に命を賭け、戦場で何時間も潜伏したり緊張に耐えながら神経を研ぎ澄まして射撃戦に従事するのでは質も違ってくる。

実際に道場での剣道で強ければ、現場での斬り合いでも最強かというと単純にそうとも言えなかったそうである。

狙撃手として世界最高のレコードを持つシモ・ハユハは狙撃に上達する秘訣を聞かれるとただ一言答えたそうである。

「練習だ」

◇日本選手のスポーツの射撃記録

現在日本では趣味としての射撃の愛好者は一万人近く存在していると言われ、これにスポーツ射撃に従事する者や警察・自衛隊で訓練する者もいる。

競技としては男女問わずアジア大会、世界大会での入賞者も増えているが、オリンピックなどでの成績はほかのスポーツとして比べてあまり振るついているとは言えない。

過去のメダル獲得は総合で六つである。

これは金メダルが有力とされた時期に、当時の米ソ対立に伴うオリンピック参加ボイコットもあり、多少政治に左右された点もある。日本もモスクワオリンピックには不参加。 ）

オリンピッククラスの選手は幼い時より訓練を積んできていることが多いが、「銃」という道具は現代日本では子供が触れにくい。

●過去の日本人のオリンピックでの成績

・ローマ大会 一九六〇 ）  
銅 吉川貴久 男子フリーピストル

・東京大会 一九六四 ）  
銅 吉川貴久 男子フリーピストル

・ロサンゼルス大会 一九八四 ）  
金 蒲池猛夫 男子ラビッドファイアピストル

た 然し上位の東欧選手が不参加。  
当時四十八歳、最年長の金メダリスト記録。

・ソウル大会 一九八八 ）  
銀 長谷川順子 女子二十五mピストル

・バルセロナ大会 一九九二 ）  
銀 渡辺 和三 男子 トラップ

※ クレー射撃分野でのアジア人男性初のメダル、日本人唯一のメダリスト

・バルセロナ大会 一九九二 ）  
銅 木場 良平 男子五〇mライフル 姿勢

※ ちなみに国会議員で元総理大臣の麻生太郎氏はオリンピックにも出場経験がある。  
1976年のモントリオール大会のスキート競技だったそうだが、この時は四一位と振るわなかったそうだ。